

篠原踊

調査報告書

平成二十六年度 文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」

篠原踊 調査報告書

平成二十六年 度 文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」



奈良県五條市大塔町篠原地区（平成27年1月25日）



篠原地区 天満神社（平成27年1月25日）



天満神社祭礼「梅の古木踊り」(平成27年1月25日)



天満神社祭礼「宝踊り」(平成27年1月25日)



天満神社祭礼「世の中踊り」(平成27年1月25日)



天満神社祭礼「篠原踊」奉納者 (平成27年1月25日)



篠原踊講習会（平成26年9月28日 五條市牧野公民館）



篠原踊講習会「十七八踊り」(平成26年9月28日 五條市牧野公民館)



「梅の古木踊り」(平成8年1月25日)



「十七八踊り」(昭和54年)



篠原踊の扇（梅）



篠原踊の扇（松）



篠原踊の太鼓と桴

惣谷狂言

〔奈良県五條市大塔町惣谷〕



惣谷狂言
(平成25年1月25日 天神社 森本仙介撮影)



惣谷地区 天神社 (平成27年1月25日)

序

当調査報告書は、平成二十六年度の文化庁の「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」の一つで、昭和四十六年に記録作成等の措置を講ずべきものとして選択されていた、奈良県五條市大塔町篠原に伝承される「篠原踊」についての現地調査等にもとづく文書報告書である。公益社団法人全日本郷土芸能協会内に設置された当調査報告書作成委員会がとりまとめたものである。

篠原踊は、篠原集落の近年の急激な人口過疎化の中で、集落在住の伝承者がわずか三名のみとなり、まさに途絶えかけようとしていたところであつた。幸いにも、当該調査の中ではつきりとしたのであるが、この窮状を打開するために現状の篠原おどり保存会を五條市教育委員会および奈良県教育委員会がサポートして（当踊りは奈良県指定の無形民俗文化財でもある）、門戸を篠原集落関係者の外に開いて後継者を公募し、踊り継承のための講習会事業が平成二十六年の六月から始まったのである。この後継者養成の取り組みが効を奏して、前年には中止となっていた一月二十五日の篠原の天満神社祭礼での例年の踊り奉納が、平成二十七年には可能となったのである。新たに踊りの稽古を始めたばかりの受講生のさらなる技芸の錬磨向上や、広域の市民が篠原の民俗伝承を如何に継承してゆくかなどの課題を今後にかかえてはいるものの、ともあれ篠原踊の持続のための新たな挑戦が始まったのである。

当報告書には、篠原踊の歴史的なことや芸態などのこと、そして右に述べた今日焦眉の急となっている踊りの伝承状況のこと、さらにかつてこの踊りとともに併せ演じられていたものと同種の狂言が隣接集落の惣谷に現存しているので、その調査記録も含めて掲載してある。

このようなとりまとめができたのも、篠原おどり保存会会員をはじめ、五條市教育委員会と奈良県教育委員会の関係部署の皆様にご協力をいただいたおかげであり、心から御礼申し上げます。

篠原踊 調査報告書作成委員会 委員長 星野 紘

例言

一、本書は、平成二十六年文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」によって実施した、昭和四十六年（一九七二）に文化庁から記録作成等の措置を講ずべきものとして選択された無形民俗文化財「篠原踊」の調査報告書である。

二、奈良県五條市大塔町に伝わる風流踊りの一種「篠原踊」の現地調査を実施して、現在及び過去の伝承状況の記録を作成し、また舞振りや音楽など、芸態の記録を作成し、調査報告書としてまとめたものである。

三、芸態記録の理解のために、特色ある部分のダイジェスト映像（DVD）を添付した。

四、本書作成にあたり、篠原踊調査報告書作成委員会（以下、委員会という）を組織し、現地調査並びに執筆、報告書作成業務を行った。また事務局は公益社団法人全日本郷土芸能協会に置いた。

五、委員会は以下の方々と組織された（敬称略）。

委員長

星野 紘（独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所

名誉研究員）

委員

青盛 透（京都ノートルダム女子大学非常勤講師）

入江宣子（日本民俗音楽学会副会長）

齊藤裕嗣（独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所

客員研究員）

鹿谷 勲（奈良民俗文化研究所代表）

城井智子（公益社団法人全日本郷土芸能協会専務理事）

笹生 昭（公益社団法人全日本郷土芸能協会常務理事）

森下春夫（公益社団法人全日本郷土芸能協会常務理事）

オブザーバー

森本仙介（奈良県教育委員会事務局文化財保存課）

事務局

小岩秀太郎（公益社団法人全日本郷土芸能協会事務局次長）

六、報告書作成のための調査として、平成二十六年中に現地調査、聞き取り調査、並びにカメラ・ビデオによる記録撮影を実施した。

七、本書の執筆は、第一章を星野紘、第二章を鹿谷勲、青盛透、入江宣子、第三章を森本仙介、附章を鹿谷勲が担当した。

八、本書は口絵（カラー）、第一章 篠原踊総説、第二章 篠原踊現地調査報告、第三章 篠原踊の現在および過去の伝承状況、附章 惣谷の踊りと狂言 により構成される。

九、本報告書作成業務は、文化庁文化財部伝統文化課の指導のもとに、公益社団法人全日本郷土芸能協会が行った。

凡 例

- 一、表記は現代かな遣い・送り仮名に従って原則的には統一した。
- 二、引用文以外は新字体を使用した。
- 三、本文中の難読語には適宜ルビを付した。
- 四、数字は漢数字を用い、原則として「十」「百」「千」は使用しない。(例) 明治一三年、一八カ所、一二五名、二〇^ト、一〇時四五分、八〇〇人
- 五、年号は元号とし、() 内に西暦年を示した。※(例) 明治一三年(一八八〇)
- 六、距離や長さの単位記号は、^{センチ}、^{メートル}、^{キロ}等を使用した。
- 七、芸能・行事の演目や役名等は原則として地域の慣用等の表記に従った。
- 八、楽器や装束等は基本的に一般用語に従ったが、執筆者の希望を優先した。
- 九、主として民俗学の用語等で、項目によって漢字書き、ひらがな書き、カタカナ書き等の相違がある場合があるが、原則として執筆者や地域の慣用等の表記に従った。
- 一〇、芸能名称は「篠原踊」に統一した。
- 一一、「篠原踊」の保護団体名称は「篠原おどり保存会」であるが、地域の慣例に従い「篠原踊保存会」と表記しているところもある。
- 一二、篠原踊の演目名は「梅の古木踊り」「宝踊り」「世の中踊り」等に統一した。
- 一三、篠原踊が公開される神社名称は「天満神社」、惣谷狂言が公開される神社名称は「天神社」に統一した。

一四、写真は、特に表記のない限り、執筆者から提供されたもの及び現地調査において撮影されたものである。

目次

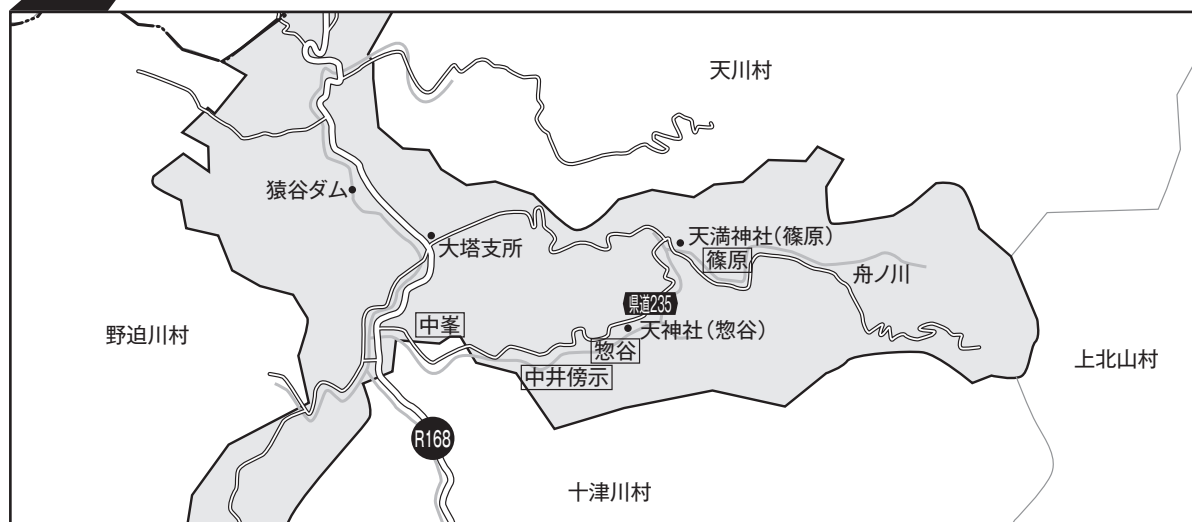
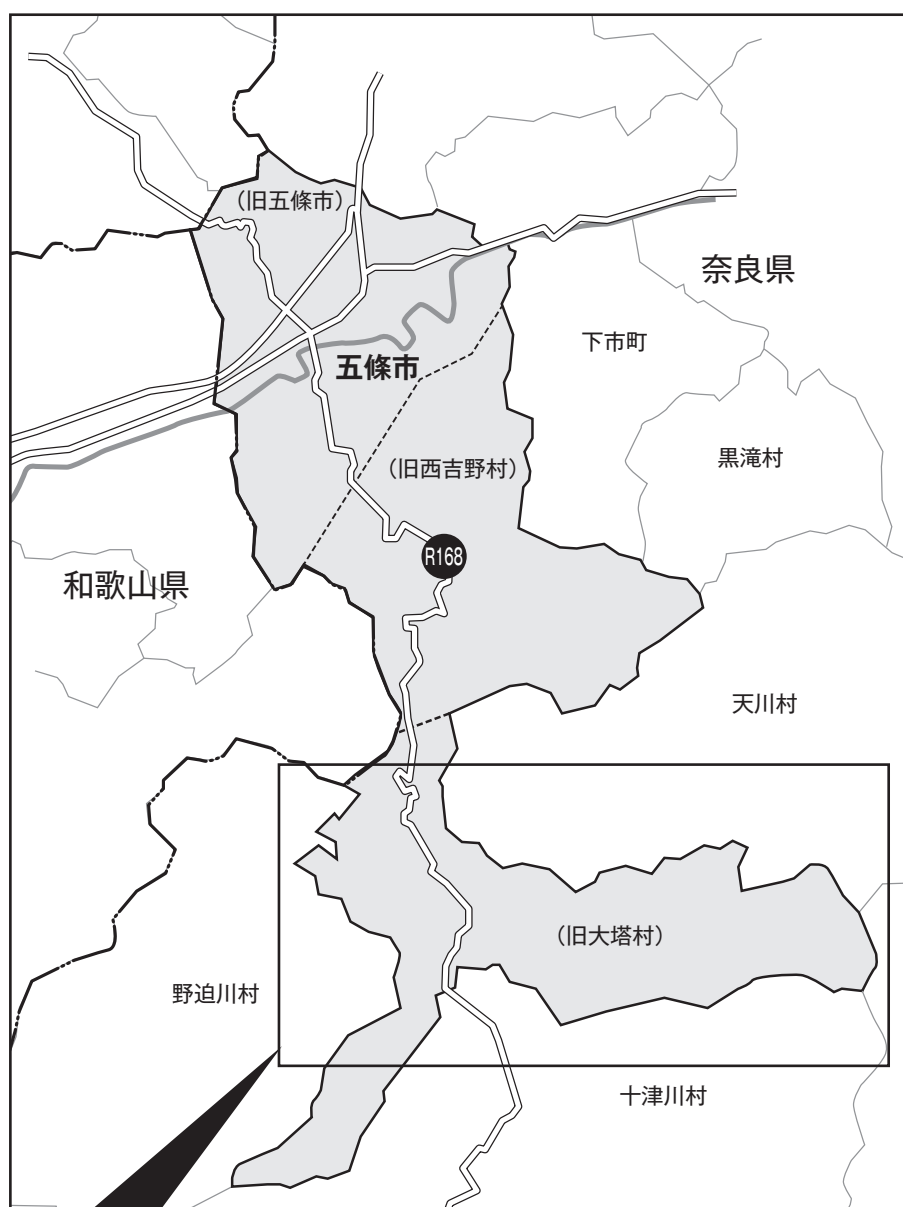
口絵	1
序	7
例言	8
篠原踊伝承地周辺地図	12
第一章 篠原踊総説	16
第二章 篠原踊現地調査報告	
(一) 名称	鹿谷 勲 26
(二) 所在地	鹿谷 勲 26
(三) 公開時期・公開場所	鹿谷 勲 27
(四) 由来・沿革	鹿谷 勲 28
(五) 伝承組織	鹿谷 勲 31
(六) 芸能内容	青盛 透 34
(七) 音楽	入江 宣子 60
第三章 篠原踊の現在および過去の伝承状況	
(一) 戦前から戦後にかけての伝承と保存会の活動	森本 仙介 68
(二) 保存会の現況と今後の展開	71

附章 惣谷の踊りと狂言	鹿谷 勲 78
篠原踊調査報告書作成委員会	85
協力者・協力機関等	86



篠原踊伝承地周辺地図

奈良県五條市



奈良県五條市大塔町（旧大塔村）

第一章 篠原踊総説

第一章 篠原踊 総説

地域の過疎化の中で伝承危機の篠原踊

一、篠原踊の衰退過程と対応施策

近年地域の過疎化、少子高齢化状況の中で民俗芸能の伝承が困難になっているとの情報が全国各地から寄せられている。その中で初期歌舞伎踊りの面影を伝える民俗芸能の一つと見なされてきた奈良県の篠原踊について、伝承がおもわしくないと噂を事前に得ていたので、今回の調査記録事業は、こういった場合にどう対応していくべきかのきわめて困難な課題を背負った対象のことであり、そのような施策的内容にも言及せねばならないとは思っていた。

実は、旧大塔村^{おおとう}の篠原集落（現五條市）の昨今の過疎化状況の中で、篠原踊の伝承者が激減し（現在わずか三名）、例年一月二五日の天満神社での奉納が昨年度は中止となり、また歌い手がいなくなったのでこのところは録音テープで代用していた。このように今後の継続が困難に陥っていたのだが、幸い平成二六年度に五條市教育委員会、奈良県教育委員会の肝いりで、この苦境を打開のため、従来踊りの伝承者を地域出身者に限っていたのをあらため、広く外部の人たちにも門戸を開放して後継希望者を募り、七月から新たな伝承者養成の講習事業を展開していたのである。第一回の講習会には三五名ほどの人が参加し、翌年一月の天満神社での奉納をめざして踊りの稽古を始めたのであった（このことの詳細は第三章に記してある）。

平成二七年一月二五日、天満神社での踊り奉納が可能となったので、現地篠原集落を訪問した。神社境内での踊りには一七名（男性六名、女性一一名）と例年になく多くの参加があり、見物人も一〇〇名ほどが詰めかけた。もともと集落の状況はさびしいもので、人の住んでいる家屋が一〇戸（建物は三〇戸余あるのだが多くが空き家）で、居住者はわずか一二名で多くが高齢者とのこと。この日は祭りで賑わったものの多くが外から車で駆けつけた者たちである（もちろん集落出身者で今は地域外に居住している人もいる。現在の区長氏も奈良市方面に居住の由であった）。

もともと、今回の奉納直前には先述の講習会の実技指導に情熱を燃やしておられた阪谷一郎篠原おどり保存会副会長（昭和二三年（一九四八）生）が病死されて、はたして踊りの披露が出来るのかと関係者は気をもまれたのであった。実は、平成二六年九月二八日の先述の講習会をのぞかせていただいていたのだが、公募で参集した受講生たちの所作がなんとなくぎこちなかったという印象であった。今回は、もちろん本人たちのこれまでの努力、稽古を重ねた賜があつてのことだったと思うが、男性陣は黒の紋付きに袴、女性陣はおもいおもいの着物のいでたちで立派に見え、それなりに様になっていた踊り振りであったと思う。どんなに困難な状況の中でも持続して行けるというか、なにか根強い生命力といったものを民俗芸能は持ち合わせているのかなと感じさせたのである。

とはいえ、先述したように篠原踊が存続の瀬戸際にあることは未だ解消されているわけではないのである。つまりこの踊りを育んできた集落の消失が危ぶまれているのである。そう思わせるドラステックな変貌が起こったのである。このことを文献史料の記載などをもとにその経過をたどってみよう。

昭和十三年（一九三八）、中尾新緑が民謡研究の観点から篠原踊の踊り歌を貴重視してその歌詞集を謄写版刷りで刊行した。その前書きのところで、当時の篠原集落のことを次のように紹介していた。

篠原は吉野群山の最高峰、佛教ヶ嶽（海拔七千尺）山麓にあり、大塔村の一大字である。戸数六十戸、人口三百余、昭和十二年にはじめて電燈がついたといふ土地である。冬は積雪数尺、毎年十一月から翌年の四月までは冬籠もりする。

ところが、平成七年三月に刊行された『民俗芸能現地修得報告書 古歌舞伎踊りの系譜（Ⅳ）』に所載の三隅治雄氏（現在芸能学会長）の一文^①に、第二次大戦後のこと、今から二〇年前までの篠原集落の様子、急激な変化のプロセスが描かれているので見てみよう。三隅氏が最初に篠原を採訪したのは昭和二十八年（一九五三）で、昭和一〇年（一九三五）頃に中絶したという篠原踊が昭和二五、六年（一九五〇、一）に復活していた、その直後のことであった。

みなもとを吉野の大峰山上ヶ嶽に発し、山脈の間を紀州に向かって流れていく十津川の一支流に舟の川がある。その舟の川を15kmばかりさかのぼっていくと、急峻な山の斜面に家屋を点在させた篠原の集落に行きつく。

……（中略）……

現在は、舟の川に沿う道を十津川と合流する宇井まで村落バスで下り、そこから私鉄バスで国道168号線（旧十津川街道）を北上するか、南下するかが便利な交通手段である。

……（中略）……

篠原へ向かう舟の川沿いの道は、当時は道巾も狭く、舗装もされぬガタガタ道で、材木運搬のトラックが無理やり通るが、定期バスもなく、人々は徒歩で4、5時間かけて上がり下りするという。

篠原の集落は当時80戸ばかりで、川を前にした40度余りの急斜面に家屋が点々とへばりついていた。その一角の窪地に建つ小学校に車着くと、すでに村中の人が集まっていて、すぐに車が運んできた映画の鑑賞会が講堂で開かれた。

やや長い引用になったが、僻遠の山地の急峻な斜面に位置する篠原の地理的状況、道路事情、交通手段のこと、そして第二次大戦直後の日本全国で見られた当時の文化娯楽としての学校での映画鑑賞会のことなどが描写されていて、当時を生ききてきた者にはその一端を実体験した話である。ことに篠原住民が一五^キの山道を四、五時間も歩かなければならなかったという難儀は似たようなことを経験してきただけに、どんなに住民が不便を感じていたかが偲ばれるのである。買い物とか、情報が外部に開かれた地との接触は常に胸膨らむことであつたろう。車社会の今日、町場までの所要時間が大幅に短縮されたとはいえ、峡谷沿いの道路の川側にはガードレールがなく、夜間や冬場の通行には平地と違って大いに制約を受けているのである。当時の集落の戸数が八〇戸と記されており、戦前よりやや増えているが、おそらく戦争終結による里帰りの人口増によるものではなかったか。一戸あたりの家族人口を五人平均として四〇〇人余の住民が居住していたことになる。篠原は舟ノ川筋の最奥に位置する一つの大きな村落だったわけである。

ところがそれから三〇年後の昭和五八年（一九八三）に三隅氏が

再度篠原を訪問した時には、居住者戸数が三〇戸余りに減り、小学校には六人しか生徒がいなくなり、かつては集落のほとんどの家の男性が従事していたという壺杓子などの木地仕事に携わる者はもはや二、三人と激減していたという。

そして、現在から二〇年前の平成七年の報告書作成の調査の折りの訪問時（すなわち、第二回目の訪問から約一三年後）には、集落の居住者戸数が一六、一八戸とさらに前回の約半分となり、人口も三五人にと激減していたとのこと。当時すでに小学校は廃校となっていたという。

さらに、それから二〇年後の平成二七年の今日では、先述のように居住者戸数も居住人口もそのまた半数に減っていて、現区長氏が先述のように普段は地域外に居住しておられるというように、今や集落そのものの存続が問題になりかけているわけである。

このたびの天満神社での祭礼、踊りの奉納終了後に催された（篠原集会所にて）直会の席での乾杯の際に次のような発声の挨拶が述べられ、とても印象に残った。それは、「列席者の皆様の篠原踊にかける情熱に敬意を表して乾杯！」というものであったが、本当に篠原踊の今は人々の情熱に支えられて存続しているといった状態なのである。この「情熱」という言葉には二つの意味がこめられていると思う。ひとつは、当稿の最初に言及したように、この踊りを如何に持続してゆくかという伝承者とそれを支える行政サイドの情熱ということである。集落が隆盛の頃には踊りも盛んで、多士才々の踊り手が競い合っていて、時には互いに牽制しあったりのやりとりもあったやの噂話も耳にしたが、今やそんなことはとてもじゃないがありえず、集落外の人々にも広く門戸を開いて後継者を見つけていかなければなくなっているのである。つまり平成二六

年度に出発した講習会の成果が今後一層上がっていくこと、それへの情熱に頼るしか方法はない現在である。

二、篠原踊の学術的魅力

篠原踊の存続になぜに人々はこだわってきたのであろうか。もちろん昔から近郷近在に名を馳せてきた伝承ではあるが、芸能の歴史研究やその芸能の面白さといった点に、関係方面の第三者識者の注目がこれに集まり、調査研究が色々とおこなわれてきたという、そういう研究者の情熱がもう一つ先の乾杯の発声挨拶には含まれていた。端的に言えば、篠原踊を通しての学術的な魅力が当地方にあり、その解明のための努力が傾けられてきたということだ。これまでのこの方面の情熱の現れを、ふたつほど文献をたよりに指摘してみたい。

（一）初期歌舞伎踊りの歌謡との類似性

まだ踊りが盛んだった頃の昭和三三年（一九五八）に初めて篠原の地を採訪したほか、両三度現地入りしたという、民俗芸能研究の泰斗の本田安次は、次のように中世後期から近世初頭にかけて流行していた小歌がこの踊りで歌われていることに注目していた。こういった言動は歌舞伎の発生期の歴史を探っていた歌舞伎研究者のそれと軌を一にしていた。⁽²⁾

雨が降っていた。その夜、寒々とした村のお寺、萬福寺で七時半より踊十七曲を演じていただいた。歌はよし、踊は古老が多く、深い感銘を受けたことであつた。予めは太鼓踊かと思っていたが、これは明らかに小歌踊である。古歌舞伎前後の小歌が多く歌われていた。

郡司正勝は、歌舞伎の歴史を広く庶民の民俗伝承の中で位置付けて考察することにつとめておられたが、同人は「発生期のかぶき歌謡」の一文で、尾張徳川家に伝えられた『采女草子』と、寛永の写本といわれ『近代歌謡集』に「女歌舞妓躍歌」として収録された『おどり』の歌詞と共通する歌詞が、いくつかの民俗芸能に存在することを指摘し、その中に篠原踊も含めていた。篠原踊伝承の中の「小原木」「田舎下り踊」「京鹿子」がそれに当てはまるとして、左のようない覧表（表1）を作成していた。

表1

采女草子	おどり	綾子舞	綾子踊	篠原踊	鼓踊
ふじのおどり	小原木	小原木		小原木	小原妓踊
		堺踊	水の踊（？）		
	やゝこ	常陸踊	塩飽舟		
	田舎下り	田舎下り踊		田舎下り踊	
		松虫踊			松虫踊
いなばおどり		因幡踊			
しのびおどり	忍びおどり	恋の踊	綾子の踊 忍びの踊		忍踊
	塩汲	塩汲踊			
	錦木	錦木踊			
	万事	小切子踊			
かねき					
し	し		京絹	京鹿子	

また同様の視点から小笠原恭子も篠原踊に言及していた。⁽⁴⁾

歌詞の中に前掲の天理図書館蔵『おどり』に共通する部分をもつもの、また、女歌舞伎を描いた徳川黎明会蔵『歌舞伎図鑑』（重美）に共通する歌詞や手振り、衣装などを残すもの、またその上に、ややこおどりに似た名称を伝えるものなどがあげられる。こういったものには、大分県南海部郡弥生町尺間の風流、香川県仲多度郡佐文の綾子踊、鳥取県八頭郡船岡町西谷、鳥取市越後の雨乞踊、兵庫県加東郡東条町の百石踊、奈良県吉野郡大塔村の篠原踊、三重県一志郡阿坂村の鼓踊、岐阜県不破郡垂井町のかんこの舞、静岡県榛原郡中川根町徳山のヒーヤイ踊、旧都下西多摩郡小河内の鹿島踊、そして新潟県柏崎市の綾子舞などがあり……

もつとも、右に指摘された初期歌舞伎踊は、有名な新潟県の綾子舞に見るような小歌のついた女踊りが主体のものであって、篠原踊は、本田安次が予め考えていたような太鼓踊の方が主のものであり、ひとしなみでくれるものでもない。出雲の阿国に始まったとされる歌舞伎の発生期の姿として、なお諸論があり確定的な定義がなされているわけではない。ただ双方に類似する小歌が認められるというに過ぎない。ただ人口に膾炙した大芸ジャンル歌舞伎の形成期のことに、篠原踊もなんらか関わりがあっただろうというまでの話である。

（二）風流踊と手踊りの盆踊りが混在することの意味

「風流踊」という芸能研究者が用いる専門概念があつて、これが近世以降、今日の手踊り形式の「盆踊」へと展開していったもので

はなからうかと考えられている。奈良県南部の当該篠原踊とこれに接する十津川村方面の盆の踊りは、そのプロセスを考えさせる上で貴重な伝承群といえよう。

当調査報告書執筆者の青盛透氏は『奈良県民俗芸能緊急調査報告書 奈良県の民俗芸能①』の中でこの「風流踊」について次のように説明している。⁵⁾

中国から伝わった「風流」の原議はよき遺風の意味であったが、日本においては、さまざまな意匠を凝らした飾り物や造り物をさす語へと変化した。この風流に踊りや歌謡が加わったため、中世後期から芸能要素が膨らんだ。：（中略）：そして中世末から近世初頭にかけて、風流の催しのなかで人々が仮装し、さらに踊り歌に小歌という歌謡詞章を採用する様式が大流行した。この様式が西日本に多く伝承される風流踊りの源流であり、県内の太鼓踊りなどはこの様式分類に属する民俗芸能である。

つまり人々が仮装し、小歌を用いた踊りが流行し、奈良県に分布の太鼓踊りなどはそれといえることである。篠原踊も十津川の盆の踊りの大踊と称される太鼓の踊りも、それだというわけだ。そのことについては、次のように説明していた。

十津川流域に位置する奥吉野地方には、風流踊りとして、篠原踊り（五條市大塔町）や小原・武蔵・西川の大踊り（吉野郡十津川）が残されている。

もつとも、篠原踊の方は主に年頭の神事に奉納されたり、余興と

して踊られてきたものであるのに対して、十津川の方は盆踊りとして行われるという点、前者には出ないが、後者には仮装の者が出たり笹灯籠がでたり、ばか踊りと称されている近世以降の甚句や口説き音頭による手踊りがあったりと、多分に今日の盆踊りの色合いも濃厚である。

ともあれこの両者は、奈良県南部から和歌山県にかけて混在分布している。かつて天川村川合や十津川村中野村区大字旭の迫、また同区大字沼田原、さらに同区大字谷瀬や大字高瀬等にも篠原踊が踊られていたという伝承があるのである。つまり昭和前期には篠原踊の一部が十津川村の北部に広がっていたと考えられるのである。また三隅治雄氏は先述の引用文の中で、篠原踊が和歌山県方面にも広がっていたことを記していた。

この篠原踊は、舟の川のどんづまりの僻地のものながら、十津川筋の村々からも憧憬を寄せられていたらしく、県境を越えた十津川下流和歌山県本宮町土河屋^{つちごや}には、この村の先祖が昔、舟ノ川上流の川瀬（篠原の旧名）から習ってきたという盆踊が伝承されている。男女それぞれ10人以上がそれぞれ一列となり、男は左手に締太鼓、右手に撥、女は右手に扇を持ち、音頭取りの歌につれて、男は太鼓を活発にならしつつ、女は優雅に扇を扱いながら踊る形は、まさしく篠原踊の様式をうけ継ぐものである。服装は男女共に浴衣を着るのは盆踊りだからで、それと踊歌が、篠原とは異なつて、近世中期以降のはやり歌を次々に取り込んでレパートリーとしているのが注目される。：（中略）：また同じ本宮町の、十津川の支流に沿う山間の大瀬集落に伝わる大踊と呼ばれる盆踊も、締太鼓を打つ組と、扇を持つ組が円陣をつくって共に踊

るものである。

もちろん、篠原踊と十津川の盆踊とは先述のように相違点があるのだが、舞踊家の立場から、双方の踊り振りを分析した及川陵一氏は次のように三点の指摘をしていた。⁶⁾

①、篠原では小歌踊りの種類が多く芸態も多彩である。篠原踊では今なお、20演目近くを伝承している。

……(中略)……

②、太鼓を手に持って踊る。

篠原踊では首に吊す、足の上に置いて打つなど特殊なカタチがある。

これだけでも他に類がない程十分な特色ある芸能であるが、それ以上に篠原踊を特色づけているのは、重量ある太鼓を手に持って踊る点であろう。

……(中略)……

③、一本扇が中心。

十津川の踊りは大部分2本扇である。この芸能は和歌山の踊りにも多く見られる。しかし、篠原踊は1本扇で踊る。

篠原踊の太鼓(締め)の踊りと十津川の盆の踊りの中の「大踊り」と称される太鼓奏打の踊りは、確かに右の及川氏の指摘のように差異が見られるものの「大踊り」という概念は現地では錯綜していて、双方に同じように使われている事例もある。青盛氏はそれについて、次のように、それは太鼓の踊りということだろうと両者の基本的な同一性を説明している。⁷⁾

沼田原では「大踊り」といって、これを「太鼓踊り」とも呼んだという。これは篠原踊りでは太鼓を胸からつり下げて左右から打つ打ち方(左が先という)を「大踊り」と呼ぶ、という宮本による約五十年前の聞き取りと付合する。

青盛氏の分類によれば、篠原踊も十津川の大踊りも風流踊(太鼓踊)で、手踊り形式の盆踊と別項目としてあるが、それらが盆に踊られることから(篠原踊も昔は盆に踊られたことがあったとのこと)、双方には弁別しがたい点がある。

ところで、十津川の盆の踊り、特に大踊りのところに焦点を当てて調査し分析された林公子女史は、論文「おどりの構成―「大踊り」のうたとおどり―」⁸⁾において、大踊りの意味とその展開過程について、興味深い考え方を提示していた。その論旨を以下に紹介する。まず、大踊りを次のように定義している。

「大踊り」は、その詞章から近世初期に起源を想定することができ、踊口説、民謡に始まり、大正から昭和初期のはやり歌にいたるまでを主要なレパートリーとする「ばか踊り」に対し、より古い伝承をもつものと考えられる。

右の「ばか踊り」は、いわゆる今日いうところの手踊り形式の盆踊りのことで、江戸中期以降に隆盛した甚句踊りや口説き音頭の踊りである。そして林女史は、その論考の結論として、古い伝承の「大踊り」が各伝承地集落(字)毎にこもごもに固有の展開を見せる創造のあったこと(それを、非「大踊り」と表記している)を推定して、次のように記している。

現在十津川村に伝承されている広義の「大踊り」は、1)、うたとふりが密接に結び付いていることを大きな特徴とするこ
と、2)、また、共通の祖型を持つ狭義の「大踊り」と字に固有
の非「大踊り」(群)があることが明らかになった。殊に、1)
の点は、「ばか踊り」が、歌詞の句数とふりの周期が必ずしも
一致しないことを考えると、それは「大踊り」の際だった特色
であり、「大踊り」についてのみ、踊り手の間でうたとふりと
の関係が強く意識されている理由もうなづける。

……(中略)……

現在各字に固有の「非大踊り」の動きが、それぞれの字にお
いて、より古い「大踊り」の動きから生まれてきたことを示唆
するものと思われ、そこにはかつていきいきとした踊りの創造
の場があったことを想像させるのである。

右の説明でやや解りにくい点を補足すると、広義の大踊りとは数
日間の盆踊りの中でも周辺集落の人たちの参集する日の踊りを「大
踊り」と称しており、そして狭義の大踊りとは、古くから伝わる男
性の踊り手の太鼓踊りのことで、盆踊りのクライマックスで象徴的
に踊られることから「大踊り」と称される場合のことである。また
非「大踊り」とは、このところは研究者を混乱させているのだが、
具体的には「小踊り」とか「いりは」、あるいは「本踊り」などと
字ごとに異なった呼び方をされているものを指している。

いずれにしても、林女史は、右のグレーゾーンの大踊り(つまり、
非「大踊り」)を整理して、太鼓踊りの「大踊り」が集落ごとに特
有の創造展開を見せていたことを述べているのである。そんな風な
十津川村方面の住民の踊り現場での創造過程の中で、近世以降の「ば

か踊り」への展開普及もなされていったのだろうと、そういう想い
を膨らませずにはおかぬような論考と思えた。興味深い見解で
あるように思う。

三、今後の篠原踊に注目されること

以上右に、先の直会の席の乾杯の挨拶にあったように、今日の篠
原踊は二つの側面からの情熱を傾ける人たちによって支えられ、見
守られていることを述べてみた。今後の篠原踊の健やかな持続を願
っている。行政サイドの後立てのもと出発した、人から人へと生き
たかたちで踊りを存続していかせるための取り組みは、第三章の森
本仙介氏の文章に記されているように、今後二〇曲の踊りのマスタ
ーをめざし、また映像媒体による教則テキストの作成という具体的
な計画を実施の予定とのことである。篠原集落における篠原踊とい
う伝統が、その基盤環境が崩壊しつつある現在、どのようにして従
来の民俗伝承を継承してゆけるのか、これはひとつの新たな挑戦で
あり、その成り行きは全国の同種の状況下にある民俗芸能の先例と
して大いに注目されるものである。

他方、この種の奈良県南部方面の山間地に広く分布する盆などの
折りの踊り(篠原踊は祭礼の奉納披露が主のもので、あるいは
風流の踊りというべきか)に対する学術的な調査研究は、前項二、
で紹介したような興味深い成果を挙げている。もっともこういった
ことへの情熱は右に述べた篠原踊の存続に直接関わるものではな
かろう(しいて言えば、従来のこの種の学術的な調査研究の成果が奈
良県や国の篠原踊の無形民俗文化財に取り上げられる際の根拠理由
として活用されて、側面的にその継続を応援してきたとはみなせ
る)。逆に篠原踊などが存続してきたからこそこの種の調査研究も

可能になったといえよう。もともと、篠原踊をはじめ、奈良県南部のこの種伝承の有する歴史や意義についてはまだまだ解明されてしかるべき課題は種々あるのだと思う。個人的に従来から気になっていたことをその一例として挙げれば、第二章の鹿谷勲氏の文章にちらっと紹介してある、踊り堂^ゝのことである。中世後期の文献史料に奈良県の踊り堂のことは種々記載され、十津川の盆の踊りや和歌山県本宮町の大瀬の太鼓踊りなどでは、現在もお堂など板敷きの建物の中で踊られることがあり、篠原の北の方の盆踊りにも踊り堂が存在しているとのことである。この存在が風流踊りや盆踊りの展開の中でどういう歴史を持ち、どういう役割をはたしてきたものか、このことの解明はほとんどなされていないが、捨て置かれてよい事項ではないように思っている。今日、盆踊りといえは屋外に櫓を組んで踊るものというのが一般的であるが、そういう常識とは異なる形態のものも存在していたのであり、それは説明されてしかるべきことなのである。この方面の学術的研究の進展もおおいに注目されるところである。

(星野 紘)

註

- (1) 『民俗芸能現地修得報告書 古歌舞伎踊りの系譜(Ⅳ)』(日本民俗芸能協会 一九九五) 二〇四頁
- (2) 『篠原踊』(篠原踊保存会 一九八一) 五頁
- (3) 『かぶきの発想』(弘文堂 一九五九) 一四九―一五〇頁
- (4) 『日本芸能史 第4巻中世―近世』(法政大学出版局 一九八五) 二二〇頁
- (5) 『奈良県民俗芸能緊急調査報告書 奈良県の民俗芸能1』(奈良県教育委員会 二〇一四) 二二頁
- (6) 註(1)と同書 八頁
- (7) 註(5)と同書 三〇頁
- (8) 『十津川の盆踊り』(谷村晃編 アカデミア 一九九二) 四二―四五〇頁

第二章 篠原踊現地調査報告

第二章 篠原踊 現地調査報告

(一) 名称

篠原踊^{しのはなもち}

「篠原踊」と称する。もとは「川瀬踊り」と呼ばれていた。

享保二年（一七三六）刊行の『大和志』（『日本輿地通誌畿内部分』）に、「篠原 一名川瀬」とあるように、篠原の集落はもと川瀬（川迫）と呼ばれていた。昭和十一年（一九三六）から十四年（一九三九）にかけて吉野郡西部を踏査した宮本常一は「篠原踊は川瀬踊とも呼ばれ、今天川村川合、十津川村迫でも行なわれている」と記している。⁽¹⁾ 篠原を川瀬と呼び、特有の踊りがあることは、江戸時代末期の医家で博物学者畔田伴存（翠山）が「躍有り。川瀬躍と云ふ。」⁽²⁾と伝えている。

(二) 所在地

奈良県五條市大塔町篠原

篠原の集落は、奈良県南部を占める吉野郡の中西部、大峯山脈の西斜面の旧大塔村に位置している。こ



篠原の集落（中央は万福寺）

の旧大塔村の領域は、十津川の最上流の天ノ川の流域にあたり、その支流舟ノ川の谷筋に中峯・中井傍示・惣谷・篠原と四つの集落が「舟川ノ荘」と呼ばれていた。⁽³⁾ この舟ノ川流域を地形的に見ると、東には大峯修験の奥駈ルートである標高一八〇〇から一九〇〇メートルの大峯山脈の主軸が南北に走り、そのうちの明星ヶ岳（一八九四メートル）のやや南の西斜面から舟ノ川が西流している。この溪谷の北側は一三〇〇から一一〇〇メートルの山が東西に連なり、南側も一五〇〇から一三〇〇メートルの山が東西に連なっており、北側の川瀬峠や高野辻あるいは南側の下辻山を越えなければ、外界と容易につながることができないという溪谷沿いの閉じられた一大空隙ともいえるような場所である。ここに点在する四つの集落は、「舟の川筋にて川迫初め垣内なり、次の垣内中峰なり、此垣内は武八といふ人開き、其次惣谷垣内を川迫の人開き、次に中井傍示を中峰より開く垣内なり、四垣内を舟ノ川村といふなり」とあるように、篠原と惣谷、中峯と中井傍示という二つのまとまりを持っており、互いに交渉はあまりなかったとされる。

十津川村に至る西熊野街道（十津川街道、国道一六八号線）の宇井から東に約一四キロ入った標高約六〇〇メートルの地に篠原の集落がある。今日、車で一六八号線から谷筋を東に入ると篠原が最奥の地との感が深い。天川村の和田から川瀬峠を越えて篠原に通じるルート及び十津川街道筋の辻堂から高野辻を越えて舟ノ川筋に下るルートが主要路であったとされるので、惣谷の方がむしろ奥であったといわれる。

集落内に万福寺（浄土真宗本願寺派）があるが、縁起によればもとは浄土宗だったが、開基の円正法師が浄土真宗に改宗し、大永年間に（一五二一〜一五二八）に道場を開き、実如宗主から六字名号を

賜り、慶長一三年（一六〇八）に准如宗主から本尊の裏書きを賜り、同年建立して万福寺としたとい⁽⁵⁾う。

明治二二年（一八八九）四月に、この舟ノ川の四つの集落と十津川街道沿いの一二カ村郷一四カ村が合併して大塔村が成立した。南朝の歴史にゆかりが深い土地柄から大塔宮に因んでつけられた村名であった。さらに平成一七年九月には、西吉野村とともに五條市と合併し、五條市大塔町篠原となった。

・生業等

篠原と惣谷の集落は急斜面に立地し、その斜面に広がる耕地は平均傾斜二〇度から三〇度、場所によるとそれ以上の傾斜地で、水田を作ることは困難で、斜面にハベと呼ぶ栗などの丸太などを横に並べて土壌流出を食い止めながら畑作を行なっている。大正期までは焼畑耕作が盛んに行なわれ、稗などを主要作物とし、木地や杓子作りなどを主な生業としていた。「川瀬村は、天の川より三里（天川栃尾村より三里、坪内より三里半）。西南の奥にして、山原に百軒ばかりの人家建ならべたり（屋根は板葺、あるいは杉皮ぶき）。その地水田なく米をつくらず、稗・芋などをつくり食す。米は下市村より背負荷となし来るゆゑに、米価常に諸方にすぐれ貴く、しほまた相同じ。この村は、牛と鶏を畜ふ事、禁制なり。竹筒を梅酢を以て浸し、赤からしめ、時ならず客に饗す。」「この村に、石葺をとり世を渡る者有り。一ヶ年人別金二十両ばかりの石葺を出す」と畔田伴存はその生活振りを伝えている⁽⁶⁾。

こうした暮らしはその後長く続いたようで、次の交易の話も篠原の外部との繋がりを示すものとして参考となる。天川村山西の福井コギク（明治一一年（一八七八）生）によると「娘時代の仕事は物資の運搬であった。即ち山西の背後にある険しい川瀬峠をこえて

篠原（大塔村）に行き、樽丸、杓子、曲（マゲ）等を背負って自宅にかえり、翌日はそれを背負って天辻に運び、帰りには米や塩を背負って自宅に帰り、翌日これを篠原に運んだ。このようにして毎日毎日繰り返したものだ⁽⁷⁾った。」とい⁽⁷⁾う。

・人口

篠原と惣谷両地区の過疎化は急激で、篠原は明治一〇年（一八七七）には七三戸三五一人で、その後昭和二〇年（一九四五）に七六戸三七七人いた住民は、同三〇年（一九五五）には七八戸四五一人、同五四年（一九七九）には三三戸八九人と減少して、現在はさらに一〇戸に激減している。

（三）公開時期・公開場所

一月二五日に篠原集落北西の森の中に鎮座する天満神社（篠原八一番地）の社前で公開される。一月二五日はカミゴトハジメ（神事初め）とかつては呼ばれ、神社境内で踊る。上り詰めた山の頂に、西向きに鉄板葺きの春日造りの社殿が鎮座し、社前にはわずかな平地がある。平成二七年一月二五日は、朝九時四〇分過ぎから岡下宮司のもと修祓・宮司一拝・開扉・献饌・祝詞・玉串奉奠・閉扉と祭典が執行された。終了後一〇時一五分頃から四〇分頃まで踊り式三番の三曲が奉納された。

今日では一月二五日に踊りだけが行なわれるが、かつては踊りと「田植狂言」「舟こぎ狂言」「豆炒り狂言」「朝比奈（鬼狂言）」「鐘引き」「米搗き」などの狂言や鎧などを着けた地芝居が寺で演じられていた。地芝居が盛んな頃は、その化粧の間に踊りを踊ったというが、この狂言と地芝居は、大正の初め頃（大正元年は一九一二）までに

は行なわれなくなった⁽⁸⁾。また明治十一年（一八七八）生まれの阪谷留吉によれば、日露戦争（一九〇四―一九〇五）当時までは踊りと踊りの間に同様の狂言を行なったともいうから、⁽⁹⁾狂言は明治三〇年代終わりから大正初年で途絶えたようである。現在は踊りは一月二五日だけの行事であるが、かつては翌日二六日に、シアゲといって神社に参り、この日にも余興をすることがあり、これをカサヤブチといったという⁽¹⁰⁾。また前日二四日にカサゾロイといって芝居と踊りの総仕上げをすることもあったというから、⁽¹¹⁾正式な踊りは二五日であったが、かつては前後三日にわたり行われていたことがわかる。篠原踊は、かつては盆の七月二五日に寺でも踊られていた⁽¹²⁾。正月と少しも変わらなかったというが、正月は「入波」ではじまって「サンサ踊り」で納めるが、盆は「向いの山踊り」が最初で、「鎌倉踊り」がヒキオドリであった。その際、踊りは座敷で踊り、その他の余興の踊りは外の庭で踊った。また家に不幸事や喜び事があると、祭礼のあとで踊ってくれないかと頼むこともあったという⁽¹³⁾。先の『吉野郡名山図志』には「この村、毎年二四日・五日両日、躍有り。川瀬躍と云ふ。村内に躍堂あり（草葺なり）。この内にして躍る。近村より諸人群をなし来り、これを見る。その来たりし者、親疎によらず、酒飯を出し饗応す。これこの地の風なりと云ふ。」とあり、その頃は踊りはすでに二日間おこなわれていたことや、元は踊り堂があり、その中で踊られていたことが分かる⁽¹⁴⁾。

（四）由来・沿革

『吉野郡名山図志』で触れたように、篠原の踊りは江戸時代末期にはすでに近隣からも見物人を集める珍しい踊りであった。篠原の

踊りのこうした雰囲気は、大正四年（一九一五）の県風俗誌編纂のための調査時にも感じられており、「大塔村大字篠原特有ノ踊」として次のような印象が記されている。「右篠原踊ノ種類ハ凡ソ二十八種類アリテ、今其一班ヲ拔擢セシモノハ、尋常人ノ一見スルモ一読ニ苦シム次第ナレドモ、之ヲ技能者ノ装束ヲ付ケ、男女トモ場所ニヨリ十二三人拍子ヲ入レ歌ヲ歌ヒ、男ハ胸ニ太鼓ヲ吊リ両手ニ鞭ヲ持チ左右ヨリ打込ミ、女子ハ扇子ヲモチ縦横列ニナリ種々ニ其技ヲ奏スレバ、綿衣風ニ従ヒ長袖交モ横ハリ其宛轉ノ妙ヲ極メ、凝視スル者一見古代カ一種特得ノ踊リナルコトヲ知り、其耳目ニ感觸スル所、何トナク奇妙不思議ノ感ニ打タレ、遂ニ時間ノ経過スルヲ知ラサルニ至ル、故ニ近村近郷ノ評判モ高ク、一二他村人ノ此真根（ママ）ヲスル者アリト雖モ、到底及ハサルヲ知ル、依テ此ノ歌ノ真味ヲ探クリ、踊リヲ一見セント欲スル者ハ、先ツ該土地ニ就キ動作実験スルヨリ外ナシ、是レ今日ニ於テ篠原踊リノ世上人口ニ膾炙シ、時トシテハ希望者ヨリ歡迎ヲ受クルニ至ルモ、実ニ一種古来ヨリ占有ノ特色タル所以ナランカ⁽¹⁶⁾」としている。大正期の調査者も奥吉野の山間に伝わる一種特有の古風な踊りを奇異の感を抱いて報告しているが、その後町田嘉章は舞踊史の上から県内で最も珍重に値するものとしたうえで、「このような交通不便な貧しい部落に『篠原踊り』のような優美な都風な踊や歌が三十曲以上も伝わっているのは正に驚異と云うべきであろう」と詠嘆を帯びた評価をしている⁽¹⁷⁾。

大正時の風俗誌編纂の調査報告では、特に篠原踊の由来や伝説は語られていないが、踊りの起こりについては、①木地や杓子の運上御免にかかわる木地師に関するもの、②篠原に出没したオオカミの退治の成就を祈願し、願いが叶ってその願果しとして踊るようにな

ったというオオカミ退治に関するもの、③その昔篠原殿という落ち武者の霊を慰めるためという落人に関わるものなど三種の由来譚が語られている。

① 本地や杓子の運上御免にかかわるもの

宮本常一は阪谷留吉氏（明治一年（一八七八）生）が筆写して所蔵しているものとして以下のような資料を翻刻している。

「其昔吉野ノ都後醍醐天皇之御宇当篠原村ニ真津（間頭トモ書ク）新兵衛ト申者アリ。此人ハ旧伊勢国山田ノ郷士ナルガ、故アリテ当所へ来リ、数年寺子屋師匠相勤メラレ其末当村ノ住人トナリシガ、元来英知ノ者ニシテ、当区民ニ諸事教訓ノ主トシテ、大ニ愛撫セララル。抑当村人民ハ往古近江国愛知郡君ヶ畑小椋之庄筒井公文所ノ一族ナルガ、当所へ罷リ越シ、代々器質ノ棟梁トシテ器地師杓子轆轤等ヲ職業トセル土地柄ナレ共、世乱時変リ、地頭所ヨリ運上トカカ口銀トカ云フ者ヲ取立ラレ職業者一同甚以テ困難ノ趣キナルヲ右ノ人聞付ケラレ、何トカシテ是ヲ省ク手段無之哉ト且暮相考ヘ居リ候処、不図思付、器子及ヒ杓子等ヲ上等ニ製造シ、是ヲ年々吉野宮中ニ上納スル事ニ決定シ、直ニ右人上都シ、右持参セシ種々ノ器具等ヲ献上シ、其次年運上御免ノ趣ヲ嘆願セシニ、早速御聞届ケ被下建武三年丙子三月十五日ヨリ惣木役御免ト相成、当村民ノ恐悦不可過之、偕其翌年正月二十五日宮中ノ御用ニ付、某大臣ノ御近臣村上彦四郎殿従者ヲ引連レ十津川郷へ御下向ノ際近道ナルヲ幸ヒ、当所ヲ御通行相成候処、該日ハソモ氏神ノ御祭礼ニ有之ヲ以テ、真津新兵衛ノ宅ニテ御休息ヲ請ヒ、就テハ尚御一泊ヲ相願ヒ度処、御聞届済相成、其夜御神酒ヲ献上シ、其余興トシテ当所ニ古クヨリ仕来リノ手踊リ種々ヲ踊リテ、是ヲ御覧ニ入レシニ余程打喜バレ、以後此踊

リハ永々篠原踊リト称シテ不可捨、爾来氏神ノ祭礼ニハ必ず踊リ可申上ト仰セラレタリ。依テ毎年正月二十五日ニハ踊リ申スベキモノナリ。最モ此踊リハ近遠到ル処ニ於テ川瀬踊ト云フ。今ヲ去ル事五百年ヲ経タリキ。」¹⁸⁾

この文書について宮本は、建武二年（一三三五）にはまだ天皇は京都にいたことや、吉野に都があった頃には没していた村上義光が来村していることなどの矛盾を指摘し、その文体から本地屋文書と伝説を混ぜて明治に書いたものであるうとしている。ほぼ同一の文書が、松尾篠原小学校長所持の書類からとして『大塔村史』にも引用されている。伊勢国山田の郷士の真津新兵衛の知恵で、運上御免を勝ち取り、来村した村上彦四郎を接待した時に披露した伝来の踊りが篠原踊だとする。

② オオカミ退治に関するもの

オオカミ退治に関する伝承を伝えるものは、若葉薫「奥吉野山中の篠原部落に遺る数々の異習奇談」¹⁹⁾が最初の文献と思われる。これには、かつて大きなオオカミが人にまで害を及ぼしたので、その退治に乗り出したが、村の長を食い殺してさらに被害は募るので、氏神に祈りを籠めることになり、村中総出で踊りを踊ったり、鉦太鼓で神慮を慰め懸命にオオカミ退治を祈った。そのかいあって獐猛で巨大なオオカミは獵師に撃たれ、ようやく村人は安堵に胸を撫で下ろしたという。この時の踊りが篠原踊の始まりであるとしている。さらに古老の言による本式の踊りのやりかたとして、まず般若心経を三回唱えてから、庄屋が神前で拝礼した後、声高々に「コトシハ、シシモレル、サルモレル、キリハタモ、ホウサクレ、ウリガミサマニ、ナニカオロリヲ、ケンリマセヨウ（今年はシシも出ず、猿も出

ず、切畑も豊作で、氏神様に何か踊りを献じましょう」と感謝の言葉を述べてからまず「宝踊り」と踊りの種類を奏上してから踊られ、そのあと「梅の古木踊り」さらに「近江踊り」「花こうて踊り」などが踊られるとしている。神社での踊りが終わると、夜には本堂でやはり庄屋の指図で踊られるが、まず庄屋が唄を三番声高々に歌い（これを「式三番」という）、そのあと踊りが踊られるが、休憩時以外は話や飲食はできず、静粛を旨として行なわれ、最後に庄屋がトリの唄を歌い、厳粛な儀式のように行われる篠原の最大の行事であるとしている。筆者の「若葉薫」は編者岸田日出男のことと思われる、物語的で文飾の多い文体ではあるが、昭和初年に当時六〇歳くらいの戎谷大吉という人物が、古老から聞いた話として記していることから、その内容は幕末期まで遡るものかもしれない。この「今年ハシシも出ず」云々という言葉は、昭和一四年（一九三九）の聞き書きである宮本の報告にも登場する。猪と猿が語られ、オオカミの言葉は登場しないものの、害獣の難から逃れたことを踊りの契機としている文言である。

昭和一三年（一九三八）に謄写版による『篠原踊歌』を刊行した中尾新緑は、この中で或年オオカミが村を襲い娘や子供が殺され、評定が開かれ若者十数名が山奥に入ったが、雄牛ほどもあるオオカミ数十匹が現れ若者達は全滅したので、神慮を慰めるために踊りを献じたとし、岸田文男は、オオカミ退治の祈願は、沢田屋嘉門という者の提案により行われたとも伝えている。⁽²¹⁾ 本田安次も「前田甚八という老翁が九十二歳で大正二年に亡くなったが、その二百年前ほどの昔」のこととして、付近に住んでいた獐猛なオオカミが、何かと人々を苦しめ、どうしても退治できなかったので、氏神に願をかけて、踊りを奉納するからオオカミの難をなくしていただきたい

と祈ったところ、オオカミは獵師に撃たれて死んだので、その願果たしに年々踊りを演じてきたという。⁽²²⁾ 二百年前という表現は奇異であるが、前田甚八が自分が生まれる百年ほど前にあった話として、この事を聞き及んでいたとすれば、一八世紀初めの正徳から享保頃にかけてのことになる。しかしこの唱え言は明治一一年生まれの阪谷留吉は聞いたことがないと答えているので、一八歳で踊りを始めるとすると、明治三〇年代にはこうした唱え言は途絶えていたものと思われる。

③ 落人に関わるもの

踊りの由来を語るものとして、今ひとつ落武者・落人伝説がある。本地屋文書にすでに伊勢国山田の郷士真津（間頭）新兵衛の名が登場するが、さらに畔田伴存は、「篠原村の前、舟川谷間に鎌ヶ滝、鎌ヶ淵と云ふ有り。昔、鎌田五郎太夫と云ふ落人二人篠原に來り住みて悪行せしにより、土人集まりてこれを捕らへ、この淵へ落とし殺せしなり。その時共に死せし犬とて犬に似たる石、淵の傍に立てり」と落人の話を伝えている。⁽²³⁾ この落人は「篠原殿」とも伝えられる。岸田日出男が記すところによると、享保年間に北国の武士である篠原という落武者が訪れて住み着いた。彼は性格狂暴であったものの、人々は「篠原殿」と敬していたが、ある時山に遊んで葛蔓を裂いてみると歯切れよく音を立てて裂けたことから、妊婦の腹をこのように裂いてみたいと叫んだ。村人は婦人に危害が及ばないようにと、相談のうえ村中総出で川魚を捕らえる村流し（毒流し）の機會を利用して謀殺を図った。腕の立つ太郎兵衛と次郎兵衛が滝の上に屋形を作り、そこで見物させている時に、屋形の柱を取り去って篠原殿を淵に落として見事成功したという。瀕死の篠原殿は、大判

と金の盃と銚子の場所を伝えたと言われる。これが享保五年（一七二〇）六月のこととされ、これ以降、その滝を篠原滝といい、川瀬村を篠原と呼ぶようになったという⁽²⁴⁾。

川瀬村が篠原となった由来としてこの落人が登場するが、篠原踊とは関連させてはいない。しかし、筆者が明治四二年（一九〇九）生まれの水口彌氏から聞いた話では、平家の落ち武者かという篠原という浪人者が悪辣なことをしたので、庄屋村役人が策を巡らし、太郎兵衛・次郎兵衛の働きで同様にして篠原殿を謀殺した。その後しばらくしてオオカミの被害が出始め、人がかみ殺されるようになり、篠原殿の怨霊のせいだとして氏神にオオカミ退治を祈願し、それがなかったで、篠原踊を奉納したという⁽²⁵⁾。これはオオカミ被害と篠原殿の二つのモチーフが結びついた話となっている。こうした由来譚がいくつか文字化されたが、篠原の土地の人の手になる資料を見ると、篠原殿は文武に優れていて住民から尊敬されていたが、ふと思ったことで一命を落とすことになったと悪人視しないものとなっている⁽²⁶⁾。

妊婦の腹を裂くということは、早く武烈天皇の悪行の一つとして『日本書紀』に見えているが、落人説話にこれが加味されたものとも考えられる。さらにオオカミ説話も加わるが、こうした篠原が持つ伝説的世界は、厳しい自然の中で日々の暮らしを営んできた民俗環境のなかで作りに上げられてきたもので、そこには木地屋集団の持つ伝説的言辭の世界も含まれている。そうしたなかで川瀬村が篠原村と呼ばれるに到る契機⁽²⁷⁾として何らかの歴史的な事件があったものと推測される。そのことと一連の踊りの導入や伝承との関わりはまだまだ不明である。本田安次の聞き取りから、オオカミの被害があったのは正徳から享保にかけてと一応推測してみたが、篠原殿事件

も享保五年（一七二〇）とされていることは一つの符合とも思われる。万福寺が浄土真宗の道場として大永年間（一五二一―一五二八）に草創されたと伝えることは先に記したが、この集落の歴史にとつてそうした画期となる歴史的な事件や事実が、一八世紀初め頃にもあったことを、これらの伝承は反映しているのかも知れない。

（五）伝承組織

篠原おどり保存会が県指定時の保持団体となっており、篠原区長が保存会長を勤めてきた。一時区とは別の保存会としたこともあったが、のち区と合体した。

踊りの実施方法については、先の水口彌によれば、毎年正月三日に寺で区民が集まって村寄りをする。これをハツヨリ（初寄り）という。この日に、区長・副区長・寺役（寺と宮の一年間の世話役三人）の五役を決める。また区長から「二五日の祭り」（神事始めとは言わなかった）と余興などを例年通りに行なうかどうか協議される。行うことになれば、翌日寺役三人が酒を携えて、踊りの師匠（踊り手も集まる）と青年会会長の所へ、踊りと余興をしてくれるように頼みに行く。依頼された方では、翌日の晩から踊りと芝居の練習を始める。踊りと芝居をする者は一応分かれており、青年会の男子が芝居をし、青年会の女子と年長の男女が踊りを行った。祭りの前の日はカサゾロイといって、芝居と踊りの総仕上げとし、普段は仕事用の袴（天川バカマ）で練習するが、この日は本式に衣裳を着けて、芝居は寺で、踊りは師匠の家で行なったという。そして踊りと芝居は二五日と二六日の二晩行なったという話も残る。二五日は引き踊りをせず、二六日には最後に引き踊りをしたというものであつ

た。⁽²⁸⁾

この青年会は、「若社」とも呼ばれ、昔からの呼び方で「若連中」と呼ぶ人もいたという。一八歳はおそらく数えであろうが、一八歳から二五歳までが青年会で、嫁を貰うと退会した。昔は一八歳になると一月二五日の祭りの日に、宮役へ酒一升を持って青年にしてくれと頼んでおき、七月一四日にゲンブクがあつて、寺で正座に坐り村の者から祝われたという。さらに以前はこの席で名替えがあつたという。

男は一八歳、女は一六歳になると一人前といわれ、男は正月に、女は盆の二五日前後に寺で一人前の披露をしたという。⁽²⁹⁾また盆の二五日にも正月とかわらぬ踊りがあつたというから、男は正月二五日の祭りで踊りを披露して一人前と認めてもらえ、女は盆に踊りを披露して一人前になるという踊りを踊ることで成年・成女とする意識があつたのであろう。篠原踊はこれまで正月の踊りのイメージが強かったが、正月と盆の年二回の大きな公開が、青年組織である「若連中」や「若い衆」によって行われ、それが成年・成女となる通過儀礼的な役割を果たしていたという側面も見逃すことはできない。

(鹿谷 勲)

註

- (1) 宮本常一『吉野西奥民俗採訪録』(一九四二)。天川村川合の事例は、中尾新緑編の謄写版の『大和吉野郡大塔村 篠原踊歌 完 附 同天川村川瀬踊歌』(昭和十三年、『上方』九〇号再掲)で紹介されている。旭の踊りについては、『奈良県吉野郡旭ダム関係地民俗等調査報告書』(関西電力株式会社一九七五)、谷村晃編『十津川の盆踊り』(アカデミア・ミュージック 一九九二)、林宏『十津川郷採訪録 民俗二』(十津川村教育委員会 一九九三)を参照。同じ舟ノ川流域の沼田原で昭和十四年(一九三九)頃まで行なわれていた大踊りは、谷村晃編『十津川の盆踊り』(アカデミア・ミュージック 一九九二)を参照。また、十津川村谷瀬にも明治に篠原から踊り好きの女性が嫁いで始まったという類似の踊りが伝承されており、平成一四年八月に筆者も調査したが、『奈良県民俗芸能緊急調査報告書 奈良県の民俗芸能2』(奈良県教育委員会 二〇一四)には福持昌之による報告がある。
- (2) 畔田伴存(一七九二―一八五九)『吉野郡名山図志』『日本名所風俗図会9 奈良の巻』(角川書店 一九八四) 弘化四年(一八四七)頃成立か。
- (3) 『大和志』享保二十二年(一七三六)、『吉野西奥民俗採訪録』は惣谷と篠原の二字を舟ノ川郷とする。
- (4) 『日本歴史地名大系 第三〇巻 奈良県の地名』(一九八二)
- (5) 註(4)に同じ
- (6) 畔田伴存前掲書
- (7) 岸田日出男編『大和天の川』(天川村観光協会 一九五八)
- (8) 本田安次『篠原踊』『大塔村史』一九五九

- (9) 岸田文男「篠原踊」『大塔村史』一九五九
- (10) 宮本常一前掲書、昭和二八年（一九五三）に現地で調査を行った三隅治雄によれば、狂言や芝居は若い衆の分担となり、前日を「笠ざろい」（ぞろいの誤植か）、翌日を「笠破ち」と称したという（「篠原踊り」『民俗芸能現地習得報告書 古歌舞伎踊りの系譜（Ⅳ）』日本民俗芸能協会 一九九六）。なお、篠原踊は戦時中の昭和一四、五年（一九三九、四〇）から戦後二七年（一九五二）までは踊りも芝居も中断していたが、同氏の来村を契機に復活されたという。
- (11) 水口彌（明治四二年（一九〇九）生）談、昭和五八年（一九八三）筆者調査。
- (12) 宮本常一前掲書。岸田文男の前掲書によれば旧七月一五、一六日に寺の中で踊ったとある。
- (13) 宮本常一前掲書
- (14) 畔田伴存前掲書
- (15) 筆者の聞き及んでいる所だけでも、付近の旧大塔村阪本や簾や中原にも「踊り堂」はあった。普段は吹き抜けの堂で、盆踊りの時には堂の周囲に張り出して棧敷を作り、ここで見学し酒食をとった。十津川村でも堂内で踊った所は多い。
- (16) 大正四年（一九一五）に調査された『大塔村風俗史編纂資料』奈良県編『奈良県風俗誌』のうち。読点は筆者。
- (17) 町田嘉章（佳聲）解説『日本民謡大観 近畿編』（日本放送協会 一九六六）
- (18) 宮本常一前掲書
- (19) 若葉薫「奥吉野山中の篠原部落に遺る数々の異習奇談」『吉野群山の叢書』（大和山岳会吉野支部 一九二八）所収。昭和

- 和三年（一九二八）に刊行された『吉野群山の叢書』は五八頁の小冊子で、「吉野群山の談叢」「西吉野大塔村の談叢」「大台ヶ原山中の怪異」を合本したもの。元の版は確認し得ていないが、大正期から昭和初期にそれぞれ小冊子として刊行されたものか。岸田日出男（一八九一～一九五九）は、奈良県技師で吉野熊野地域を国立公園とするにあたって奔走した人として知られ、調査の折り岸田氏の名を出せば「あの人の知り合いか」と気を許して話してくれたと一方ならぬ世話になったと宮本は『吉野西奥民俗採訪録』の序文に記している。
- (20) 中尾新緑前掲書
- (21) 岸田文男前掲書
- (22) 本田安次前掲書
- (23) 畔田伴存前掲書
- (24) 若葉薫前掲書
- (25) 水口彌（明治四二年（一九〇九）生）談、昭和五八年（一九八三）筆者調査。
- (26) 『しのはら』（篠原区 一九七九）篠原小学校廃校に伴って刊行された冊子
- (27) 明暦二年（一六五六）の「ウリワタシモウスハタケノコト」には川瀬村とあり、延宝七年（一六七九）の検地帳には「大和国吉野郡舟川郷篠原村検地帳」とある。
- (28) 註（25）に同じ
- (29) 本田安次前掲書
- (30) 宮本常一前掲書

(六) 芸能内容

1 踊りの伝承と記録

民俗芸能として分類すると、篠原踊は小歌系の詞章を歌詞に用いた風流踊りのひとつである。奈良県平野部には近代初期までなもで(南無手)踊りとよぶ系統の風流踊りが広く分布し、その系統の踊りは吉野郡北部の一部まで浸透していた。しかし、同じ吉野郡でも篠原踊はこの系統とは別種の風流踊りとなっている。

なもで踊り系統がいわゆるかんこ踊り・太鼓踊り、つまり太鼓を胸に吊して打ちながら踊る芸態であるのに対して、この踊りはその芸態に加えて、太鼓(締太鼓)を左手にもって右手のバチで打つ片手打ちタイプの芸態を主とするのが芸態上の大きな違いである。篠原踊の多彩で技巧的な芸態は、風流踊り系として全国的にも高水準なものとなっている。

風流系芸能は多人数の編成となることが多いため、村落共同体あげての催しが通例であるのに対して、篠原では青年会の踊りでも村落全体の踊りではなかった。昭和年間から踊り愛好者仲間の親睦会的ともいべき、ゆるやかな集まりで構成されて踊られていた。

現行の踊りは年中行事として一月二五日の天満神社祭礼奉納芸能となっているが、本来はそのためだけの踊りであったものではない。

現行の祭礼では式三番といい、梅の古木、世の中、宝踊りの三曲のみであることは、すでに先行報告書にもあるとおりである。しかしもっとも重要であったのは、その夜集落の万福寺で行われた宴席での踊りであった。昭和四〇年代まで、入波踊りからはじまって青年会の余興芝居やさまざまな芸能を挟みながら一二、三曲の踊りが踊られていたという。入波踊り、お舟踊りと連続して終わった後に休

憩があり、宴席の一同から花がついたことある。そうすると、また踊り手が並んで、花買うて踊りの曲を花のお礼に踊った時代がある。

また、篠原では早く盆踊りも失われたが、盆踊りがあった時代には合間合間にこの踊りが挿入されて踊られていたという。また、旧篠原地区に居住した人々の親睦会である篠原会でも踊られる機会があった。

よび名については、古い時代に「川瀬踊り」の名があったという。川瀬は近代篠原村の成立する以前にあった名前という。近世では舟ノ川郷篠原村で、川瀬というのは行政村落名ではなく、通称である。現代では古老であっても、川瀬踊りという名称は伝え聞くに過ぎない。篠原踊の名称がいつの時代から巷間に知られたか、あまり明確にできる史料はないようである。

現在までの調査結果、篠原踊の芸態についても古い記録は、大正四年(一九一五)に奈良県が調査依頼してまとめた「大塔村風俗誌」(奈良県立図書情報館まほろばライブラリ「奈良県風俗史編纂資料」所収)である。

ここには「大塔村大字篠原特有ノ踊」として長崎踊りと近江踊りの二曲の詞章が、おそらくは発音のままひらかなで墨筆されている。当時の伝承曲は二七、八曲であると記され、総勢一二、三人の男女の踊りが存在し、太鼓は胸に吊して左右から打つと記載してある。

近江踊りは現行でも記載のとおり芸態であるが、長崎踊りは今の伝承では片バチで打つ型であり、歌の詞章順番がのちの歌本と入れ替っているなど、不審な点もある。「大塔村風俗誌」にみえる長崎踊りの詞章はつぎのとおりである。

はあながさあき、みいればあよ

ををーもをいんいさすーくくく

はもをーとの、とのをををわなあがあ、さあんあきにー

それひいやうろを、ひやらろをいよをーいふひ、

やあにひやあらろをーはあをををやあ

つうひいやらろをはああんはにやあれつうーろー

現在、長崎踊りは中絶状態となっている。第二次大戦後、踊りが復興したときまでは、長崎踊りは継承されていた。昭和四十六年（一九七二）に篠原を離れた吉崎正氏は復興の第一世代で、この踊りを継承されてビデオ映像を残されている。映像を拝見したところ、たしかに「風俗誌」の記録どおりに歌っている。

一番の詞章「長崎見れば思い出す 元の殿御は長崎に」のつぎに記載されている部分は、大原木踊りのハヤシにあるヒーヤリヒーヤリヒーヤリコに似ているので、笛の口唱歌のようにみえるが、意味がよくわからない。昭和三〇年（一九五五）筆記の阪谷末房氏筆記歌本には、つぎのような長崎踊りの書き込みがある。

アソレヒヤラレ インヤイヨガイイヤヤラロ
ハラオオヤラヤ ラロハヤンバニヤレ

歌本の記載では、歌の題名の次行下に小さく別にカタカナで書き込みしてあり、他の踊りの事例ではハヤシである。ところが実際にはハヤシではなく、歌謡に含まれた詞章として踊っている。歌本のおりに歌っていたとはかぎらないことになる。別の系統の長崎踊りが存在したか、あるいは復興期にはいろいろ工夫があつて踊りが整理された結果であるのか、よくわからない。口承の過程で変化が

あつたことは推定され、時代にそつて篠原独自の工夫が重ねられていたのではないかと思われる。

さて最初に当地の踊りを世間に紹介したのは岸田日出男氏で、若葉薫（岸田日出男のペンネームか）「昭和聖代の今尚現実に見る太古そのまの桃源郷」（岸田日出男著『吉野群山の叢書』所収 吉野山岳会吉野支部 昭和三年（一九二八）の古老からの聞き取りによると、古くは祭礼は旧正月二五日で、最初に踊り子（女性の踊りのことか）と歌い手と羽織り袴姿の太鼓手一同が神前で心経を唱えて、庄屋が「コトシハシシモレル、サルモレル、キリハタモ、ハウサクレ、ウリカミサマニ、ナニカヲロリヲ、オロリマセヨウ 宝ヲロリ」と口上を述べたあとに宝踊りが奉納され、ついで「梅の古木ヲロリ」と庄屋がまた口上を述べて梅の古木踊りが奉納され、さらに「近江踊、花コウテ踊等」が順次踊られたと伝える。夜はお堂の中に宴席が設けられ、庄屋が踊り子・歌い手・太鼓手を率いて長方形に並んで座り、中央に座した庄屋が歌を三番歌う。これを式三番といい、これが終るまで踊りははじまらなかった。この後、神社と同様に庄屋が一番ずつ踊り名をつけて踊りが続いていく。座席の人々は飲食や会話はせず厳粛ななかで踊られる。合間合間に休息をとつて、その間に会食がおこなわれていく。最後に庄屋が「トリ」の歌を歌つてお開きとなる。十数夜前から御寺の庭で猛稽古があり、怠けたりする子女は厳しく叱られた。踊り歌はかつて四八番ほどあつたが、当時伝わっていたのは三一番という。

ちなみにもっとも多くの歌がわかるのは昭和三四年（一九五九）の『大塔村史』で、岸田文夫氏が翻刻された詞章は三六曲（昭和五六年（一九八一）『篠原踊』も同数）に及ぶ。

また数年に一度、奈良県庁から派遣された役人があると、わざわ

ざ踊りの席を設け、役人に踊りの一覧を渡して区長が「才役人様、何オロリヲ差上げませう」と聞き、役人は「宝踊りを所望」と答えると、区長が「宝踊り」と述べて踊りがはじまられたと伝える。この記述については、のちに岸田文夫氏が『大塔村史』に尊父日出男氏による古老からの聞き書きとして紹介されている。

第二次大戦前の踊りに関して、天満神社と万福寺での曲名や行事次第については、筆者によつて記述に差異があり、現在確かめる手段がない。『篠原踊』で式三番の三曲は天満神社祭礼でしか踊らないとの見解が確立しているが、大戦前の民俗誌では順序も曲名も混乱がある。第二次大戦直後の伝承でも、梅の古木踊りだけは外部で踊らなかったが、世の中踊りと宝踊りは踊っていたという伝承も、万福寺において踊りが所望されて上演される形式であったため、リクエストがあれば、梅の古木を除いて、その他は踊っていたとする伝承もある。

さて前述の岸田日出男氏の記録によれば、昭和初年には山林の仕事が不況であり、この少し前から祭礼ではもはや以前のような踊りはできなくなっていたらしい。昭和三年（一九二八）御大典の年というので、この年の二月一六日（旧暦正月二五日に相当）に久しぶりに大がかりに踊りが実行されたという。大正末年から昭和初年にかけても踊りの中断があり、式三番にしても現在伝えられるものと少し様子が異なることがわかる。

昭和一〇年（一九三五）に刊行された小寺融吉編『日本民謡辞典』（壬生書院）には、篠原踊の項目がみえ、「奈良県吉野の連峰の谷あひ、篠原の盆踊。特色あるものといふ。」と記載されている。篠原踊の名はすでに昭和初年には東京にも伝わっていた。

昭和十三年（一九三八）には中尾新緑氏が『川瀬踊歌』を謄写出

版し、それが雑誌『郷土研究上方』同年六月号に掲載されて、踊り歌の内容が広く知られた。旧暦正月二五日の祭礼に梅の古木・宝踊り、花買うて踊り、女十七八踊り、新宮踊り、向ひの山踊りの六曲があったとする。男性は紋付袴に白たすきで、太鼓を胸につり下げて左右から打ち、女性は緋袴を着用し扇をもつ。中尾氏はあまり変化のない踊りとみたようで、「前後に身体を動かす」踊りと記している。同年の『民謡研究』二巻三号には中尾氏から編集部がこの書の寄贈のあった記事が掲載されており、東京の研究者も同時期にこの歌を知るようになったと思われる。のちに当時の編集であった臼田甚五郎氏「歌謡と民謡」（『臼田甚五郎著作集 三』おうふう 平成七年）にもこの歌本が引用されている。しかし中尾氏は同系統の踊りを川瀬踊りと表記したので、臼田・宮本両氏らに、川合などの踊りがすべて篠原踊であると誤解を与えた。

同時期、『吉野西奥民俗採訪録』に記されているように、宮本常一氏が篠原の民俗調査をたびたび実行し、踊りの実態について紹介した。踊りについてはいろいろな祭礼や伝説の部門別に書き分けられ、記載の一致しない点もある。

「食物」の項では一月二五日午後に踊り、夜寺の本堂（万福寺）でも五、六〇人が会食する前で踊ったとある。神社（天満神社）では三曲踊り、お寺ではその三曲は踊らない。入波、世の中踊り、宝踊り、式三番をやつて口上をのべ、その後に余興に踊る。余興は庭で踊り、ヒキ踊りはさんさ踊りであった。また七月二五日に盆踊りがあり、向の山踊りが最初で、鎌倉踊りがヒキ踊りであったと記している。向の山踊りを盆踊りのはじめに踊ったという伝承は最近まであるが、第二次大戦後は「ヒキ踊り」の存在は知っていても、すでに鎌倉踊りの伝承はない。

「神祭・踊り」の項目では、神前では宝踊り、梅の古木踊りともう一曲（不明）踊ったとある。太鼓は片手に持って打つこともあれば、胸に吊り下げて両側から打ち込む踊りもあり、「大踊りといわれるものはすべてこれであり、左から先に打ち込んだ」と記載してある。大踊りという表現は宮本氏の民俗誌にしか見えず、十津川流域にある踊りと一致して興味深い。また祝い事があった家から頼まれて踊ることもあったと伝える。これも第二次大戦後にも一度だけあったという伝承がある。ちなみに筆者は平成二六年『奈良県民俗芸能緊急調査報告書 奈良県の民俗芸能Ⅰ』第三章で昭和の前期に東京日本青年館で踊ったと記したが、「吉野西奥民俗採訪録』『日本常民文化研究所ノート第二〇』（開明堂 昭和一七年（一九四二）版で、「全国郷土舞踊大会に出た」とある注記にしたがったものである。昭和五八年（一九八三）以前に東京で踊った記録は発見できていない。大戦前には踊っていないので訂正する。またかつて余興の間に狂言が演じられ、歌舞伎踊り風に踊りと狂言の組み合わせがあることに注目したが、踊りと狂言が一組という意識は伝承にないこともわかったので、こちらも訂正する。

岸田日出男・文夫両氏や本田安次氏らが執筆した昭和三四年（一九五九）の『大塔村史』で、篠原踊の当時の伝承や現状が記録された。これを受けて、昭和五六年（一九八一）に篠原踊保存会から『篠原踊』（のちに『大塔の民俗芸能』に所収）が発刊され、前述の先行研究と詞章、採譜が掲載された。この報告書において、本田安次氏による昭和三三年頃の歌の伝承と踊り方が紹介されている。しかし第二次大戦前の踊り伝承が聞き取れたのは、この時期が最後となった。

さらに平成六年、日本民俗芸能協会が踊り調査を実施し、『民俗芸能現地習得報告書 古歌舞伎踊りの系譜（Ⅳ）』で踊りの内容が詳述

された。昭和二八年（一九五三）に篠原踊を現地調査された三隅治雄氏が、ここで改めて篠原踊の伝承と十津川村周辺の盆踊りの関係について当時の調査結果とあわせてふれられている。さらに及川陵一、花柳園喜輔、矢島秀子氏らが踊り方の内容を、また肥後清彦氏が音楽を解析された。これまでの記録や報告が歌の詞章と行事次第にページを割いてきたことからすれば、この報告書はビデオ映像解析という方法と現地で踊りを習得するという目的をもち、踊り様式の型と組み合わせの関係を整理するという、画期的な報告書となっている。

今回の芸態調査は実際に四曲しかみることができなかったため、芸態分析についてはこの報告書の成果によるところが大きい。

2 天満神社祭礼の芸能次第（現状調査）

毎年一月二五日午前十一時、天満神社境内にて祭典があり、その後一式三番とよばれる三曲が奉納される。調査年は復興途上で新しい踊り手が参加したためと音頭取りの阪谷一郎氏が急逝されたという事情があり、音頭は録音された音源を用いることになった。行事の直前に録音機をつかって万福寺で音合わせをおこなった。例年は音合わせはしていない。

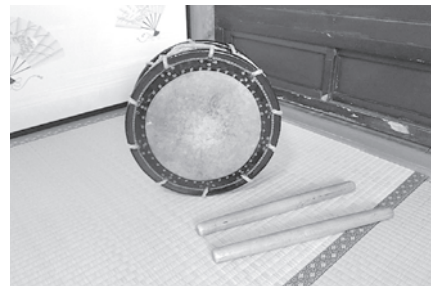
祭典のあと、太鼓打ちが神殿前横並びに三人、後ろに二人並び、その後ろに女性が横三、四人ずつ数列で並ぶ。調査年には一人が参加した。最初に「梅の古木踊り」と紹介されると、すぐ音頭（調査年度は録音による）がはじまり、太鼓打ちと女性の踊りが続く。ついで「世の中踊り」と曲目紹介があり、それから踊りがはじまる。最後に「宝踊り」と紹介されて、踊りが演じられる。終るとすぐに舟ノ川沿いにある公民館に移り、休憩昼食となる。

3 楽器

男性の踊り人数分の締太鼓のみ使用する。かつてはそれぞれ個人のものを利用したが、今は篠原おどり保存会でもっている太鼓もある。第二次世界大戦後の踊り復興の当時者である吉崎正氏（昭和六年（一九三一）生）の使用していた太鼓は市販のもので、直径三四・一^{サシ}、内径二六・五^{サシ}、高一二・二^{サシ}、内高一〇・五^{サシ}のものであったが、太鼓の大きさと重みはそれぞれまちまちである。

左手一本で太鼓を裏返す技があるので、各太鼓とも独自に軽量化の工夫がされている。木工は篠原住民の得意とするところであったので、くりぬきの太鼓胴をはずし、個々に曲げものなどに加工して持ちやすくしているものがある。片手打ちする場合、調べ緒に左手の指をかけて太鼓を持つので、指の痛みを緩和するため手拭やタオルを調べ緒に通し、その上から指をかける。この手拭かタオルは、入波踊りなどで太鼓を首にかけて両手で打つ曲の場合、太鼓を吊すとき首の後ろで縛るのに用いられる。

バチも自前で作成する。バチは房をつけず、多くの踊りでは一本のみ使用するが、後述するように二本バチをもちいる踊り方も数曲ある。吉崎氏の使用している例では直径二・八^{サシ}、長さ三九・六^{サシ}であった。



篠原踊の太鼓とバチ

4 踊りの構成と衣装

太鼓打ちは三、四人、多いときでも五、六人で成人男性である。

調査年の平成二七年一月二五日の天満神社祭礼では六人を予定していたが、喪中休みの人が出たので太鼓打ちは最終的に五人となった。衣装は黒紋付袴、羽織は着用しない。白足袋（『大塔村史』の写真では黒足袋と思われる）、神社境内など野外で踊るときは下駄履きとなる。輪踊りとなる曲目もあるので、最低でも三人は必要となる。踊り手が不足していた近年は、音頭は録音テープ、太鼓は二人で実施されたことがある。かつては紋付は家紋入り、現在は区の用意した梅の紋入りを使用している。宮本常一氏は『吉野奥西探訪録』で梅鉢の紋としているが、踊りに古くから参加している吉崎氏は家紋が梅鉢であり、自分のものを使ったというから本来は自前で家紋入りであったのであろう。

女性は着物足袋下駄履きで、舞扇を一本もつ。神社は山道を歩き、凍結や雪のこともあるから、着物でなく平服にゴム長で踊っていたこともある。平成に入ってからのは、赤紫地に「篠原踊」と染め抜いた揃いの着物を使っていた。調査年度はそれぞれ自前の着物を着用された。現在ではあまり踊る機会がなくなっているが、従来の報告書に掲載されていない「百人一首」という曲などが一部の女性たちに伝承されており、この踊りは十津川盆踊りに広く見られるのと同じく、左右二枚の扇を用いる。扇は開いて用いるが、入波踊りや梅の古木踊り、田舎下り踊り、お稚児踊りのように開かずのかなめの少し上を右手にもって踊る型もある。原則的に女性の人数は特定していない。『大塔村史』では一六歳で参加したとあり、古くは未婚女性の踊りであったと伝える。中尾新緑氏『川瀬踊歌』において、昭和の初期の当地や天川村川合では男性は紋付袴をつけ白たすきで、女性は緋袴を着用したとある。篠原では男性はたすきを掛けたという伝承も、女性が袴を着用したという伝承もない。村ごとに異なっ

ていたであろう。

音頭取りは一名で、通例同じ人物が長い期間に役を務める。第二次大戦後の復興以後、音頭はいままで四人ほどが引き継いだという。通例では、歌の繰り返しのための補助役は配置しない。ときに音頭の声が小さいとき、スケといって補助と一緒に歌うことがある。太鼓のリズムも理解しないといけないので、ベテランの担当となる。黒紋付きに羽織袴を着用し、扇をもつ。座敷で踊るときは正座して歌い、神社境内では立ったままで歌う。踊りの司会役とは別人の役である。

5 演目

平成二七年の調査時は篠原おどり保存会では踊りの復興練習のさなかであり、かつてたくさんあった曲目のうち、踊りを実見できたのは式三番の梅の古木踊り、世の中踊り、宝踊り、それから練習中で見せていただいた十七八踊りの四曲のみである。

平成六年の日本民俗芸能協会による調査では、これに加えて入波・お舟踊り、田舎下り踊り、綾取り踊り、大原木踊り、哀れ龍田踊り、賤は高砂踊り、にわか踊り、お稚児踊り、近江踊り、雪原踊りが踊られていた。この他花買うて踊り、長崎踊り、白糸踊り、白菊踊り、京鹿の子踊り、向の山踊りは第二次大戦後も伝承があった。

昭和三四年（一九五九）『大塔村史』と五六年（一九八一）『篠原踊』には三六曲（含お舟踊り）の踊り歌が掲載されているが、しのびつまもち踊り、お庭踊り、三左踊り、吉野桜踊り、おふる踊り、大井川踊り、鎌倉踊り、かやや踊り、花の江島踊り、みすの内踊り、旅のそもじ踊り、おとの踊り、伊豆や三島踊り、お江戸下り等の曲は詞章のみ伝わっている。早くに廃絶していたのか、第二次大戦以後

伝わらなかったらしい。

6 太鼓打ちの芸態

前述のとおり、調査年度には復活途上であったため、すべての芸態については実見していない。かつて昭和五四年度（一九七九）作成の奈良県のビデオ、さらに平成六年度日本民俗芸能協会の調査ビデオを拝見する機会があり、それに保存会のリーダー格である故阪谷一郎氏（調査年次急逝）と阪谷民男氏、そして吉崎正氏からの聞き書を加えて芸態分析した結果を報告する。

伝承する曲目は、伝承者の経験年数によって異なる。阪谷家に伝わる本では三〇曲の詞章が掲載されている。現在でも一二、三曲は踊れる人もあるが、第二次大戦直後の踊り手の伝えるところでは、これらすべての曲目が第二次大戦後に踊られていたわけではない。毎年祭礼時の式三番以外は、夜の万福寺での踊りがなくなったので、今では踊る機会も少ない。

踊りの様式は男女ともに足捌きステップは基本的に共通で、女性は扇を右手で握るが、踊りの所作もほぼ男性の太鼓打ちに合わせてある。ただし、世の中踊りなど、ヌキハチの入る型るとき、太鼓打ちは正面からみて横あるいは背後を向くことがあるが、このとき女性性は所作を変えて正面を向いたままの型となるなど、踊りによって相違するところがある。太鼓打ちの踊りが完成したのちに、女性の踊りが加えられたものであろう。扇は曲目に応じて開閉して用い、両手を添えてもつ所作がある。全体の傾向については、『奈良県民俗芸能緊急調査報告書 奈良県の民俗芸能Ⅰ』（奈良県教育委員会 平成二六年）に示しておいたが、男性の太鼓打ちが中心となる芸態が大半である。しかし大原木踊りと十七八踊りのように女性が見せ場

をつくり、太鼓打ちが伴奏に徹する芸態もある。男女とも踊り手は音頭取りの声を手がかりに、振り付けを変化させて踊るものごとである。同じ歌のなかでも、歌の詞章で変化する振り付けがあるからであろう。

座して踊らずに伴奏として太鼓を打つ様式、太鼓を手拭で首に括って胸に下げて左右から打ちながら踊る様式もあるが、大部分の曲目は太鼓を左手にもって右手のバチで打ち回す片手打ちを中心としている。とくに重い締太鼓の調べ緒を握って、左手首だけで革面を返して打つ芸態は、篠原踊の大きな特徴である。バチを二本使う諸手^{もろて}（両手）打ちと、一本だけ使う片手打ちの二種類の打ち方があり、バチの使い方では芸態が大きく異なる。諸手打ちすれば、当然細かいリズムを打つことが可能で、たとえば入波踊りに続くお舟踊りでは、音頭がシラブルに区切って歌う箇所があり、ここは諸手打ちならではの細かいリズムが打ち分けられる。

締太鼓を左手にもって右のバチで打つ芸態は、江戸期の『松の葉』に「端手片バチ」（岩波文庫『松の葉』『葉手』七、これについては岩波文庫『声曲類纂』巻之五にも寛文の小唄惣まくりとして片バチの曲がみえる）という曲目があるように、「片バチ」の名は古くからあるスタイルである。



京都府宮津市籠神社笹ばやし

太鼓を左手にもった片手打ちの風流踊りとしては、近畿では京都府丹後の笹ばやし、花の踊りや京都市久多の花笠踊りに類似するもので、片バチ（片手打ち）・諸バチ^{もろ}（両手打ち）の二種類の打ち方を残すところも共通している。以下、この用語で示すと式三番の曲をはじめ大多数は片バチ型で、入波＋お舟踊り（休みなく連続する）、近江踊り、大原木踊り、十七八踊りは諸バチ型となる。

また入波踊り（お舟踊りを連続して一組）と近江踊りは、近畿地方に多いかんこ（鞆鼓）踊り・太鼓踊りの様式で、手拭で首から締太鼓を胸につり下げて、左右からバチで打ちながら踊る芸態である。

篠原踊は近畿圏の風流踊りのなかでも、もつとも複合的な構成でなりたっている。民俗芸能の風流踊りは、歌謡の部分とその切り目に挿入される間奏部（当地ではハヤシ）とで太鼓のリズムと振り付けを変化させるのが標準的な芸態である。三重県伊賀・北伊勢、滋賀県甲賀、京都府南山城、奈良県東山中の各地方に広く分布する順逆（じんやく）踊りを例外として、多くは歌謡のあるところと間奏部の太鼓リズムと振り付けが一組だけであるのに対して、篠原では歌謡部でも二番からリズムと振り付けが多様に変化し、間奏部でも太鼓の打ち方と振り付けを変化させ、他地域よりも複雑な技法となっている。すでに『民俗芸能現地習得報告書 古歌舞伎踊りの系譜（Ⅳ）』において、芸態は詳細に解析されている。今回実見した結果、その解析結果は妥当と思われるので、全体の踊り内容はそちらを参照されたい。

したがってここでは、周辺の踊りとの比較のために序奏と特徴的な踊り型を述べ、それから現行の式三番について説明するにとどめる。

① 序奏の分類

すべての曲で踊り歌がはじまる前に短い序奏がつく。太鼓を打たず音頭だけではじまる型と音頭がなく太鼓だけではじまる型がある。篠原では、冒頭にトントントンと太鼓リズム三拍を一回または二回（入波、近江踊り）打つ型が原則である。太鼓の用い方は踊り様式を決定づけるので、以下は踊りの最初に打つ型を太鼓の打ち方によって分類してみる。なおここで左右を表記するとき、すべて踊り手の立場からみての左右である。

〈諸バチ型の序奏1〉（入波踊り・近江踊り）

入端（当地では入波踊り）は、最初の踊りとされている地域が多い。篠原でも入波踊りは夜の万福寺の行事で入場の踊りとされていた。片手打ちでハーの合いの手を入れてテンテンテンというように右バチで三拍を打つ。すぐ一拍空けてヤーの合いの手を入れて再度この拍子を打つ序奏がつく。同型である近江踊りもやはりこの序奏で開始される（太鼓リズム譜5）。

〈諸バチ型の序奏2〉（大原木踊り・十七八踊り）

諸バチ型でも序奏1と異なり太鼓打ちの踊りがなく、扇をもつ女性の踊りが中心で、いわば太鼓が完全に伴奏様式になる。

腰を下ろして座り、両足を少し伸ばして足首に太鼓をかけて両手



入波踊り

太鼓リズム譜

1. 踊ろよ型：
2. 略式序奏：
3. ヒラダイコ：
4. ウチアルキ：
5. 入波：
6. お並びあれ型：

で打つ。序奏1型とまったく芸態が異なり、室内での披露を前提とした演出である。太鼓打ちは音頭に対面して横並びとなり、両手にバチを持ち、腰を下ろして足を伸ばし、締太鼓を足首の上に乗せる。太鼓を紐で身体に括りつける型でもなく、また太鼓台や太鼓受け（持ち）をもたない型で、非常に珍しい芸態である。篠原特有の打ち方といえる。

しかし全体に歌謡部とハヤシ部の太鼓リズムがそれぞれ独立したものとなって、近畿地方の風流踊りの系統の音楽をもっている。このタイプは二曲伝承されるが、それぞれ少し型がちがうので区分して述べる。

a 大原木踊りの序奏

最初に「口上」とよぶ節があり、大原木踊り固有の芸態である。音頭というより「語り」といふべき部分が口上で、太鼓の伴奏がなく少し節をつけて唱える。口上の末尾の「黒木を召され候や」が終ると太鼓打ちも女性の踊りも座ったままで一礼する。続いて音頭が「イヨ」と歌い出すところで、すぐに序奏1と同じく右バチだけでトントントンと三拍連続して打つ序奏がある。これは十七八踊りも同様で諸バチ型ですべてリズムが共通する。詞章のある歌謡部では左バチ一回入れ、右左右とバチを入れ、最後に少しだけ遅れて左バチを



大原木踊り

入れる。ここでは省略するが、ハヤシは別の太鼓リズムがある。大原木踊りのハヤシに口唱歌が伝わる。

ハーハイヤー サーエイヤートコトン
ハーヒーヤリコ ハーヒーヤリコ
ハーヒーヤリ ヒーヤリ ヒーヤリコ
エイ トコトンノトントントン

b 十七八踊りの序奏

大原木踊りと同じく、太鼓打ちは太鼓の囃子のみで女性の踊りの伴奏役となる。大原木の「口上」型をとまわらない。「踊ろうよ」の音頭で入る。「踊ろうよ」は二度繰返すが、最初は太鼓は打たず、「踊ろうよおん」の最後の発声の「よおん」で踊り一同が一礼する。再度「踊ろうよ」で右片手バチのみで三拍を刻む。ここで扇をもった女性の踊り手が立ち上がる。すぐ「ハイヤーハーヨイ」の合の手が入り、トントントンと右手だけの片手打ちで三拍入れ、一拍空けてまた一拍打ち、一拍空けて三拍打つ。このリズムは後で述べる片バチ型の略式序奏とまったく同じリズムである。

踊り歌になり、太鼓打ちは両手を揃えて左肩まで大きく振り上げ、太鼓を打つ。所作は少しちがうが、太鼓のリズムは大原木踊りと同一であろう。ハヤシは歌謡部



十七八踊り

と別の打ち方がある。ちなみに十七八踊りの歌の区切りに入るハヤシはつぎのようなものである。

エーイーヤートコトン サアーアートコトン

ハータータータートオテコテン

ハータータータートオテコテン

ハッ テコテコテン エイ

テコテンノーテンテンテン

〈片バチ型〉

片バチ型には正座したままから踊りがはじまる「踊ろうよ」型と「お並びあれ」型、さらに立ち上がったまま演じるときの略式型の三つの序奏スタイルがある。

a 踊ろうよ型

座敷や舞台で踊るときには、太鼓打ちは正座して右手のバチ、左手の太鼓を床につき、正面横一列で待機する。「踊ろうよおん」という詞章を音頭が二度繰返して歌う。はじめの「おん」で太鼓打ちは前にゆっくり一礼し、二度目の「ハイヤー踊ろうよおん」ですぐに立上りながら二拍打つ。すぐにその場で足踏みしながら、右に太鼓を右横に振って打つ革面を裏返す。二拍打って、すぐ太鼓を左に振り二拍、同様にこれを右左右と打ち、後述するスゴキでバチと太鼓を右肩まで振り上げて引き下ろし、この動作で二連拍し、さらにバチと太鼓を打ち合わせる所作で強く一拍打ち、太鼓を裏返す。スゴキは二回繰返される（太鼓リズム譜1）。踊りの振り付けは二拍で区切られる。

この型での女性踊りは膝をついて座り、舞扇を開いてかなめを下

になるように膝上に両手をそえて構え、最初の「踊ろうよおん」が終ると、太鼓打ちと一緒に一礼して立ち上がったて踊りはじめる。

b お並びあれ型（田舎下り・古い伝承の宝踊り）

現伝承曲としては田舎下り踊りのみである。冒頭の詞章が「お並びわれ ○○を一踊り ハイイヨ○○を一踊りイン」ではじまる。最初の待機は踊ろうよ型と同一。最後の「イン」で一同一礼。さらに二度目「ハーお並びわれ ○○を一踊り」と歌いかけると、太鼓打ちは一斉に立ち上がり、三拍のリズムを打つ（太鼓リズム譜6）。この踊り様式は後述するヒラオドリである。ヒラオドリの太鼓リズムを参照されたい。

大塔村刊『篠原踊』所載の詞章によると、二番宝踊りには「ハーお並びあれ 宝ハー踊を一踊りハイイヨ一踊り」が二回記されている。古くは宝踊りもこの様式で踊っていた時代がある。現行では神社境内でしか踊られることがないので、立ったまま略式の序奏（スゴキ入り）で踊る。

「お並びあれ型」はかつて二曲あった。このことは第二次大戦後の踊り復興世代である吉崎正氏からの聞き取りでも確認された。ところが昭和三〇年代書写の歌本を検討してみると、詞章冒頭に「お並び」と加筆したものが他にもある。たとえば阪谷民男氏が尊父より所伝の歌本では、新宮踊り、お稚児踊りに「お並びやで」と小さく書き込みがあり、これらの曲が現行では「踊ろうよ」で踊っているから、踊りの伝承系統には二種類あったか、または踊りの振り付けなどの整理された段階があることになる。

〈略式の序奏〉

屋外では膝付きで踊ることがないので、最初に略式の序奏を打ち、そのまま踊り歌がはじまる様式となっている。

ハイヤーハーと合いの手を入れながら、右足から前に一步踏みだし、元に戻ってその場で足踏みして三拍のリズムを打つ。一拍空け、ハイヨーの合いの手を入れながら一拍打ち、打つ太鼓の面を裏返す。さらにスゴキの型で二拍、一拍空けてバチと太鼓を中央で強く打ち合せる（太鼓リズム譜2）。

② 太鼓打ちの基本所作

すでに『民俗芸能現地習得報告書 古歌舞伎踊りの系譜（Ⅳ）』で及川陵一氏がすでに明らかにされているように、当地の踊りには太鼓の打ち方と振り付けに一定の基本所作がある。その基本所作には地元で名称がつけられたものがある。スゴキ、ヒラオドリ、ヌキハチなどがそれである。部分的に独立した所作の組み合わせで踊りが成り立っている。部分名称はもつとあるのかも知れないが、すべての踊りを実見していないので調査は未元である。

〈スゴキ〉

右手のバチと左手の太鼓を添えて右上段に振りかぶるような所作で、太鼓を三拍打ちながら左前に引下げる動きである。しごくような動作からの命名であろう。略式の序奏で述べたように、冒頭の踊りに使うときには、三拍の太鼓を打ちながら右足を一步出し、すぐ元に戻ってその場で足踏みし一拍打つ所作が前につく。三拍、一拍あけて、三拍打つというリズムは、つぎのヒラオドリに準ずる。

〈ヒラオドリ〉

左前方に右足を一步踏み出し体を



スゴキ

左に向け（太鼓二拍）、元の位置に戻る（太鼓一拍打って太鼓革面を裏返す）。右前方に左足を踏み出し右に向き（太鼓二拍）、元の位置に戻る（太鼓一拍打って太鼓を裏返す）。左右方向に一度ずつ繰返して計四回で一セットとなっている（太鼓リズム譜3）。

ヒラオドリの名称の意味については、

太鼓を水平に左右に振り打つことか、普通の踊りという意味か、よくわからない。手首で締太鼓の打つ革面

を裏返す芸態は、奈良県下市町丹生の「太古踊り」にもある。ヒラウチとヨコウチという太鼓の芸態名が伝わるが、ヒラウチは太鼓を握った左手の親指が外に向いたとき、太鼓の革面が水平になるときの打ち方で、共通する芸態名かも知れない。

知らない。

〈ヌキハチ〉

この型は左足または右足を大きく前に踏み出し半身に構える。そして左手を前に伸ばし、自分の顔の前方に太鼓の革面をもちあげ、太鼓は一拍休止して右手を後方に大きく引く構えをいう。基本的に正面から見ると、後ろ向きになる所作である。構えの名称で、打つ所作は含まないという。『民俗芸能現地習得報告書 古歌舞伎踊り



ヌキハチ



ヒラオドリ

の系譜（Ⅳ）』ではヌケハチとする。今回は、篠原踊の古い所伝をもつ、吉崎正氏の用語を使用した。

また及川氏が同書で指摘されているとおり、多くの踊りに含まれている。正面で見ると横向きかやや背後を向くので、三～四人の踊りが輪踊りして互に向き合って構えるときにもっとも効果を發揮する。ヌキハチとはバチが抜ける、つまり太鼓の拍が一拍抜けることからの名称であろう。世の中踊り、宝踊り、田舎下り踊り、お稚児踊りに含まれる。

〈ウチコミ〉

吉崎正氏の指導によれば、ヌキハチにつづき、左手の太鼓の前に伸ばした構えのまま、一拍動きを止めてから、ヤーのかけ声で左手の太鼓の前に伸ばした構えでバチを強く一回打ち込む所作である。ヌキハチと一セットなので、同じ踊りに含まれる。また大きく太鼓を打ち合せる所作もやはりウチコミという伝承も別にある。

〈ウチアルキ〉

これは前述の報告書で及川陵一氏が指摘された所作のことである。現地にはとくによび名はない。しかし所作としては独立し便利な区分なので、ここでも及川氏の用語を踏襲する。歩むように、少し腰を落としながら左回り（賤は高砂踊りのように逆回りもある）に緩やかに回りはじめ、太鼓の革面を自分の前



ウチアルキ

に向け、バチで右左と交互に四回計八拍軽く擦り打ちし、最後は腰を伸ばして三拍打つ動作である（太鼓リズム譜4）。宝踊りの例で説明している。田舎下り、お稚児踊りに含まれている。

〈トビ〉

これは所作の通称で吉崎正氏が使用された表現による。太鼓打ちが輪踊りとなったとき、太鼓革面を打ち手の前面にもって打ちながら、左回りに右足を大きく一步踏み出して、すぐ左足または右足を跳ね飛ばすように出し、あとの足をすり足で前進する所作をいう。宝、田舎下り、賤は高砂、哀れ龍田、綾取り踊りにある。

③ 式三番の詞章と踊り

管見のかぎり、近畿地方における風流踊りには必ず歌と切り目で太鼓の打つリズムを打ち分け、振り付けが変化するという特色がある。これについては篠原踊も例外でなく、ほとんどの曲でその構成がなされている。太鼓のリズムと振り付けの対応関係によって風流踊りを考えるというのが筆者の立場なので、以下、現行で演じられているものをこの視点から検討してみる。天満神社での踊りは先述したとおり、梅の古木踊り、世の中踊り、宝踊りの順である。

〈梅の古木踊り〉

梅の古木踊りはハヤシの挿入で歌を区切ると考えると、一節ごとの詞章が短い。しかし歌謡はコブシが多く使用され、母音の長さと繰り返しを巧みにつかっただけで詞章と太鼓リズムの調整がなされる。なお、前述の白田甚五郎氏「歌謡と民謡」によれば、すでに江戸期の舟歌に梅の古木踊りと同一の詞章がみえるところである。

この踊りでは歌謡部での振り付けと太鼓リズムは一つで、区切りに入るハヤシの部分も振り付けと太鼓リズムが一つとなっている。

ただし歌謡部は三、四節に最初の詞章にだけ、バチを正面目の下に横にさし出し、太鼓を打たない振り付けがあるので、細かくいうと歌謡部の太鼓のリズムが二種類あることになる。またハヤシの部分には、スゴキの入る略式序奏と同一である。しかし詞章に示したハヤシの抜ける箇所は、合いの手が入るがこの振り付けがなく、正面を向いたまま三拍だけ打って歌がつづく。女性は扇は開かず、右手にかなめの上あたりを握って踊る。

梅の古木踊りの詞章（ ）内はハヤシの合いの手

(サアハー イヤー ハー ヨイ)

梅のオーンオー古木にイオヤ (ハヤシ)

ハーなーぜ駒アーつなーぐよ (ハヤシ)

サーイヨーヤー オンヤアー駒アーがアー (ハヤシ)

ハーいさめーばーアーンアーハーコリヤ花も散る (三連拍)

サーイヨヤーオンヤアーハア駒アーが (ハヤシ)

花の上エンエなーるオヤ (ハヤシ)

ハア白露みれーえばよ (ハヤシ)

ハアインヨヤーオンヤアーおらアーも (ハヤシ)

ハアーなりたや露コリヤ露の身と (三連拍)

ハイイヨヤーオンヤアーハーヤハオンヤアーン (ハヤシ)

梅は匂オンオいよヤー (ハヤシ)

ハー桜アンアーは色オヤヨ (ハヤシ)

ハーイヨヤーオンヤアー 人はアー (ハヤシ)

ハー育アちイーでエンエーふりコリヤふりやいらぬ (三連拍)

ハアインヨヤーオンヤヨア育ちでふりやいらぬ (ハヤシ)

(トンノトン)

はじめは略式序奏で入る。右足を左足前に出し、正面で両手を広げて太鼓とバチを上から下に打ち合せて一拍打ち、すぐに太鼓を裏返す。左足を出して左半身となり一拍打ち、太鼓を裏返す。すぐ右に回りながら三拍打つ。左を向いて左腰に引きつけて一拍打ち、そのまま左手を少し上に突き出すかたちで太鼓を一拍、またすばやく手元に引いて二拍を短く連打する。スゴキで一拍打ち、二拍連打、正面を向いて一拍打って太鼓を裏返し、もう一度繰返し、二拍打ってハヤシに入る。

ハヤシは略式序奏と同じスゴキの入る型である。これが反復される。詞章に示す (三連拍) と記す箇所は、スゴキ入りのハヤシがなく、一節目の切りで「コリヤ花も散る」という歌で、最後の太鼓裏返し後の二拍に代わりに、短い二連拍がある。そこで右足を一歩前に出して、バチを右肩から大きく正面に回し、自分の顔の前に突き出す。最後にその場で三連拍し、ハヤシを省略して元の歌の踊り動作に移る。〈世の中踊り〉

振り付けと太鼓リズムパターンは、全体を通じてもつともシンブルな所作構成で成り立っている。歌謡部の振り付けとハヤシの部分で、振り付けと太鼓のリズムが一定で変化しない。歌の区切りで「世の中踊りを一踊り」の歌が終ると、合いの手が入ってハヤシとなる。しかし踊りの振り付けと太鼓リズムは区別がなく、変化がない。近畿地方の風流踊りでは少ない類型に属し、篠原でもこの踊りのみである。詞章は、音頭の発音がわかるように吉崎正氏が手控えとして起されたものをそのまま利用した。末尾に掲載した阪谷民男氏所蔵本の詞章をあわせて参照されたい。

世の中踊り詞章（ ）内はハヤシの合いの手

(ハイヤハアヨオイ)

ンこどよりことしは みなよのなアかでエ
とオところどころがたつウ

サアとオところどころにくらがたつウ

サアよのなかおどりをひとおどりイ

サアよのなかおどりをひとおどりイ

(サア ハイ ヤイ サア ハイ ヤイ)

ンヨのなアカをやよ ゆりやなをいてヨ

よのなアかをヨゆりなをいて

みなよのなアかをゆりやなおすう

サアみなよのなかをゆりやなおすう

サアよのなかおどりをひとおどりイ

よのなかおどりをひとおどりイ

(サア ハイ ヤイ サア ハイ ヤイ)

よおてらのごもんのおわかしゅうさアまは

おてらのごもんのおわかしゅうさアまはヨ

よのなかよかれとふえをふンク

サアよのなかよかれとふえをふンク

サアよのなかおどりをひとおどりイ

サアよのなかおどりをひとおどりイ

(サア ハイ ヤイ ハイ ヤイ)

よいなばのすうえのあさつゆこオぎて

いなばのすうえのあさつゆこオぎて

みなよのなアかへそオよそよと

サアよのなかはおどりはこれまでよオン

サアよのなかおどりはこれまでよオン

(サア ハイ ヤイ ハイ ヤイ)

片バチ型略式で開始されるので、最初はスゴキの所作の入る序奏で踊りがはじまる。座敷や舞台で演じる場合は、その前に「踊ろうよ」型の踊りが加わってはじまる。

歌は四節からなり、歌の末尾には「サー世の中踊りを一踊り」の詞章がつく。最終節のみは「サー世の中踊りはこれまでよ」と入れ替る。そしてそれぞれその後「サー ハイ ヤイ サー ハイ ヤイ」の合いの手が挿入される。しかし太鼓リズムと踊りは詞章と合いの手の場面に変化なく、すべて定型で最後まで連続する。最後に一拍太鼓リズムを打ち添えて終了する。

最初に右足を右前に一歩出し、左足をすぐに右に寄せる。同時にすばやく太鼓を横に振って右脇下に引きつけ、二拍打つ。連続してそのまま体を左に向けながら一拍打つ。重い締太鼓を右水平に振り、その勢いを右腰に少し右膝をまげて右腰を落としながらしなやかに受け打ち、また同じ動作で左腰に受ける芸態で、篠原特有の華やかな所作である。

さらに左後ろに左足を少し開き、つま先をあげて、左肘を伸ばして太鼓を斜め下に立てる。バチを右肩に引寄せて一拍空けて打つ(ヌキハチ)。

すぐに手首をひねって締太鼓の打つ革面を裏返し、右足から大きく右に回って太鼓を振り正面を向き、右足に重心をかけて左足を寄せる。連続して二拍打ち、さらに太鼓とバチを正面で合わせるように強く打って、すぐ太鼓革面を裏返す。最初は左回転左半身、同じ動作を左足から右回転右半身でおこなう。

文章にすると煩雑であるが、右から左に回りこみ三拍、中にヌキ

ハチ（二拍分相当）を挿入して、左から右に反転して三拍打ち、最後に正面で太鼓とバチを打ち合わせる。こうして太鼓打ちは右左交互に場回りしながら踊りがつく。

合いの手が入るところはハヤシであるが、この踊りは他の踊りと異なつて、合いの手が入っても太鼓リズムも踊りの振り付けも変化がなく、最初から終わりまで同一様式の繰り返しである。女性の踊りは扇を右手にもって踊る。足捌きはほぼ男性に準じる。しかし、ヌキハチで太鼓打ちが正面からみて側面または背後を向くとき、女性も横を向いた所作のままに踊る。

『民俗芸能現地習得報告書 古歌舞伎踊りの系譜（Ⅳ）』では、この踊りに二つの踊りパターンがあるとされている。しかしAパターンは序奏である。踊りはBパターンの一種類のみで、三拍太鼓を打ってヌキハチに移り、また三拍打つという、同じ打ち方の繰り返しである。連続技ですぐつぎの動作に移るため、後半の三拍のつぎの音は詰まって聞える。

〈宝踊り〉

宝踊りは女性も扇を開いて踊る型で、太鼓は片バチ型である。歌謡部の太鼓リズムはヒラオドリ、ハヤシは組み合わせでヌキハチからウチアルキ、ヒラオドリの連続技で成り立つ。

つぎに掲げる詞章の末に*のある箇所は、短いハヤシともいうべきもので、口唱歌は唱えない。歌がなく、太鼓のみの短い区切り打ちがある。

後半の詞章は伝本によつて異なり、「よろず宝をかいこめて」以下は音頭の都合で省略されたり順番が変化することがよくあったようである。

宝踊りの詞章（ ）内はハヤシの合いの手

ハ―ソレこはよいとこ やら名所*

ヤ―こはよいとこ やら名所

（サ―エイヤ―サ―ハ―ヨイヨイ、ハ―ヤ―ヤ―アソレ）

ハ―ソレこれのお里へえちを建てよ*

ヤ―これのお里へえちを建てよ（ハヤシ）

ハ―ソレえちを建ててにや何しよぞ*

ヤ―えちを建ててにや何しよぞ（ハヤシ）

ハ―ソレえちを建ててにや倉建てよ*

ヤ―えちを建ててにや倉建てよ（ハヤシ）

ハ―ソレよろず宝をかいこめて*

ヤ―よろず宝をかいこめて（ハヤシ）

ハ―ソレ銭やこがねをかいこめて*

ヤ―銭やこがねをかいこめて

ハ―ソレおらがつぽねにや月がさす*

ヤ―おらがつぽねにや月がさす（ハヤシ）

ハ―ソレ油ひかさずば消さすものを*

ヤ―油ひかさずば消さすものを（ハヤシ）

ハ―ソレ宝踊りはこれまでよ*

ヤ―宝踊りはこれまでよ

最初はスゴキの入る略式序奏である。音頭の歌がはじまるとヒラオドリとなる。右足から左に回り込んで太鼓を二拍打つ。元の正面戻って一拍打って手首を回して締太鼓の打つ革面を裏返す。つぎに左足から右に回り込みながら二拍、正面に戻る動作で一拍打ち、打つ太鼓の革面を裏返す。これを詞章にあわせて四度繰り返し返す。

つぎに五回目で歌の切れ目となり、右足を左に踏み込み少し腰を

落しぎみに強く一拍さらに一拍打ち、左を向いてまた一拍打つ（ヒラオドリの変形）。詞章の＊記号のある箇所は踊りである。

ヒラオドリの終わりにハヤシとなる。正面を向いて手を大きく左右に開いてから強くバチと太鼓を合わせる所作で一拍打ち、太鼓を裏返す。これをもう一度繰返す。

サーエイヤーの合いの手で左に大きく回り、正面から見て左後ろを向き、左足を少し前に出してつま先をあげてヌキハチを構える。

一拍ウチコミしたあと、少し腰をかがめて前屈みでウチアルキにvari、最初に二連拍、ついで左右摺り打ち四回して計八拍、この動作で左回りし、最後に腰を伸ばして正面を向く。

さらに正面で足踏みしながらヒラオドリの太鼓リズムを二度繰り返し、またヒラオドリに戻って左右一度ヒラオドリを踊る。また歌謡部に戻る。歌の八節目「宝踊りはこれまでよ」が止め歌で、最後には正面で一拍打って止める。ハヤシの部分は付属しない。以上は天満神社祭礼の宝踊りである。しかし祭礼の宝踊りは略式の踊りで、本式が別にある。本式は「お並びやれ宝踊りを一踊り」ではじまるものであったらしい。これが止めの「宝踊りはこれまでよ」と対応して様式上の統一感がある。本式での振り付け上の大きな違いは「錢やこがねをかいこめて」の歌が終ると、ヒラオドリではなくトビに変化するところで、「おらがつばねにや月がさす」の終わりまでリズムは同じでトビとなり、「宝踊りはこれまで」でヒラオドリに戻るという点にある。なお、ハヤシのところに口唱歌があり、サーエイヤー アトトントン サアハヨイトントントン トロリンヨイトロリン トントントン ハアトントントントン ヤアトントントントン ソウリヤトントントントンと唱える。

7 篠原踊の分布

篠原踊とよばれる様式は、近畿圏の風流踊りには珍しく男女が加わる踊りである。そのもつとも大きな芸態の特徴は、諸バチ型と片バチ型の二種類を合わせ持つことであろう。とくに手首を捻って太鼓を裏返し打つという豪快で華やかな振り付けが伝えられ、篠原ならではの独特の片バチ型を形成している。

現在でも、篠原では一月二五日（昭和五〇年以前は旧暦）の祭礼行事の一環であり、式三番という奉納芸能として継承されてきたことは確かである。しかし式三番は能楽の名称であるから、最初から踊りが祭礼の中心ではなく、あとから行事として定着したことを示している。すでに触れたように、近隣の村落にも式三番として踊りを奉納していた例があり、隣接する惣谷でも奉納されていたが、入波、向の山踊り、長者踊りで踊りは篠原と異なっていた。

また踊りの伝承は近世にさかのぼるものであろうが、大正の初めから昭和四〇年末までの既存の確実な記録では、踊りは祭礼行事では三曲のみで、その夜の宴席で多くの曲を踊っていた。県庁高官の来訪があれば、席を設けて踊りで饗応したともいう。また万福寺（のち小学校校庭）の盆踊りでも最初に「向の山踊り」を踊ってそれから、太鼓を山積みにしてから本格的な盆踊りに入ったという。盆踊りの歌は別にあつた。男性は万福寺のお堂の中で踊り、女性は寺の縁側で踊ったという。しかし篠原踊は盆踊りの最初あるいは途中に挿入される踊りではあつたが、盆踊りの曲として意識されてはいなかった。風流踊りは多人数の構成であるから、統制をとりやすくするため、芸態は画一的に伝えられている。太鼓の打ち方は口唱歌で籠や木を相手に打つように子供は教育され、一人前になると太鼓を与えられて踊りに入る。若者組や青年会を抜ける頃になると、踊りに習熟し

たものが歌役となる。しかし、三々四人という小規模な太鼓打ちで編成される篠原では、太鼓の口唱歌の稽古本が発達せず、歌本に小さなカタカナで記されているのみである。太鼓のリズムだけを覚える期間をおかずに踊り手の隣で見よう見まねで稽古したと伝える。口唱歌が声に出して唱えられるのは、当地でいうハヤシ、歌の切れ目切れ目において歌なしで演奏される太鼓の箇所である。例をあげれば、宝踊りでのトリンコン トリンコン、近江踊りのスッテンスッテンスッテテンなどで、ここだけ太鼓打ち総員が声に出して唱えながら太鼓を打つ。管見のかぎり、当地の歌本でもハヤシの口唱歌は記載されるが、音頭の歌っている箇所での太鼓の口唱歌は記載がない。

また本式での序奏「踊ろうよ」と「お並びやれ」の型は、他の多くの地域で見られる詞章、

皆一様にお並びやれ ○○踊りを踊ろうよ（または一踊り）

の変形であることは明らかである。すべての踊りが定式であるわけではないが、全体の傾向から見れば歌の切れ目切れ目で「○○踊りをひと踊り」の歌が入り、歌の末尾で「○○踊りはこれまで」で終る様式が標準的であったといえるであろう。通例「皆一様に」では太鼓を打たないか、または太鼓を縁打ち、もしくは叩く場合も軽く一拍子のみ打つとか工夫され、太鼓打ちが音頭を優先して待機する。

篠原踊の序奏でも、やはり最初の音頭が繰り返されるまで正座し、太鼓を打たない。ほぼ近畿地方の風流踊りの原則に沿っている。しかし、歌のはじめの部分が二種類あり、画一化されていないのは篠原の特色であり、踊りがどこかの段階で整理されたか、あるいは別の系統の踊りが導入されたかという可能性が高い。

太鼓の使用法は、バチ合わせや側打ちの芸態がない。しかし、諸(阿)

手打ちと片手打ちがあり、さらに諸手打ちも太鼓を首から胸に下げて左右から打つ型と、座って足を伸ばし足首にかけて打つ型があって多彩である。つぎにこのような芸態を手がかりに、周辺地域の踊りと分布状況を検討してみよう。

平成四年刊行『十津川の盆踊り』（谷村晃編 アカデミア）には林公子氏「おどりの構成―「大踊り」のうたとおどり」と間野由美子氏「大踊り」の歌と旋律」の論考があり、さらに各集落ごとに調査カードが別編で掲載されている。この調査によって、昭和末期まで奈良県十津川村周辺に類似した歌が分布したとわかる。篠原のような歌謡をとまなう風流踊り系統のものは、ほぼ昭和の後半には廃絶していたようである。

昭和一〇年代、十津川村最奥の迫^せ一〇月一三日の秋祭りについて、踏査に入った宮本常一氏が当地の踊りをみて「篠原踊」があると記している。神社祭典の後、堂に入って宴席で何番か踊り、そのあとは俗謡などの踊りをしたという。

しかし宮本氏は当初篠原踊を周辺村落の類似するものも含めて、広義に解釈していたようで、のちに別に調査した林宏氏の批判がある。林宏氏の聞き取りでは、迫の人々が篠原の踊りに加わっても踊ることができると、迫や中谷の踊りは本来盆のオオドリというもので、「篠原踊」ではないとする。『十津川の盆踊り』の調査カードでも、ほぼ同様の聞き取り報告があるから、この批判は妥当であろう。男性が太鼓をもって、女性が舞扇をもって踊る様式のもので、片バチ型であった。

また同様に中絶したが梅之本の踊りは、一人一人が締太鼓を胸に掛ける諸バチ型であったという（『奈良県吉野郡旭ダム関係地民俗等調査報告書』関西電気株式会社 昭和五〇年（一九七五）一二月）。

十津川上流にかけて、諸バチ型と片バチ型の二種類の踊りが、村落別に伝承されていた。

なお『十津川の盆踊り』にもふれてあるが、同じく十津川村旭にも盆踊りがあり、古くは風流踊り系の歌謡をともなう踊りがあった。歌の伝承本には（「盆踊り歌 旭 十津川村旭西村豊吉氏遺稿 岸尾富定記より」東勇編 十津川村民俗資料館蔵本）、「梅の古木」や「宝おどり」や「世の中おどり」という篠原式三番とほぼ同様の詞章も含まれ、周辺では珍しい曲目ではなかったらしい。さらにこの歌本を転載した記録には、詞章だけでなくハヤシ、つまり太鼓の口唱歌が部分的に残されている。宝踊りのハヤシを並記すると、以下のとおりである。

旭 サーエイヤハ トトト ハイヤハ トトト エイ

 トロリ トロリ トント サヤアハ ソリヤ

篠原 サーエイヤ トトト サア ヨイ トロリン

 ヨトロリン トントントン ハア トントントン

 ヤアトントントン ソリヤトントントン

トトトやトロリトロリと記されているところは明らかに太鼓の打ちかたを示すもので、篠原の宝踊りでも太鼓打ちが声を出すハヤシの部分、現行ではウチアルキである。他の踊りで詞章とハヤシを比較してみると、現在踊りが見られなくても旭の踊りも篠原踊に類似した踊りをもっていたと推測できる。

昭和の末に、迫と上野地と沼田原の歌謡を大阪教育大学が記録している。にわか踊り、宝踊り、白糸踊りなど、ほぼ篠原と共通する踊り歌である。さいわい太鼓リズムも同時録音されているので一部

比較することが可能となった。

歌謡部の太鼓リズムは一拍打ち一拍空けてまた一拍打つ型、同様に二拍ずつ打つ型、三拍ずつ打つ型のシンブルな構成のものが多く、迫に伝承されたにわか踊り（伝承者岸尾富定氏）にヒラオドリ型が確認できる。ハヤシもシンブルで合いの手も類似している。篠原の踊りもこの分布圏の中にあるといえる。しかし周辺の踊りはどうやら篠原ほど複雑な様式ではなかったらしい。篠原にはよほど振り付けに堪能な師匠がいたのであろう。

また十津川村中央の三村区などの盆踊りには、片バチ型の芸態が残り、さらにかつて武蔵には風流踊り歌系の鎌倉踊り、湯之原には小鷹踊りが伝えられていた。いずれも中絶したが、湯之原はビデオ映像が残されていたので検証可能である。湯之原小鷹踊りは盆踊りの曲で、映像では右肩から左脇にかけて首から紐でさげる踊り手もみえるが、原則的に男性の踊りは締太鼓の片バチ型で、輪にならず横一列となつて場回りする芸態である。太鼓リズムもほぼ共通し、女性の踊りも付随する点、篠原踊の芸態に近い。

また西川には現行の盆踊りにコオドリの名をもつ曲がある。入波踊りや鎌倉踊り、しのび踊りなどは風流踊り系の歌謡をもち、胸に締太鼓を吊り上げ、左右から長い色房のついた両手のバチで打ちながら踊る芸態である。入波踊りはそのまま江戸踊りに連続して踊るもので、入波踊りからお舟踊りに続く篠原と同じ二番続きとなっている。入波踊りについてみれば、バチの打ち方や長い房のさばきで芸態には独自なものがあるが、序奏の入れ方、最初の基本的な太鼓のリズム、一拍抜いて早くなる変奏リズムといい、共通点がある。篠原の諸バチ型が同じ系統の風流踊りといえるであろう。

ただし『奈良県民俗芸能緊急調査報告書 奈良県の民俗芸能Ⅰ』

で指摘しておいたことであるが、現行の大踊りとして伝承されるものは篠原踊系統がもつ小歌謡を持たず、太鼓打ちの芸態も風流踊りと異なる。西川でも大踊りは伝承されるが、歌謡や太鼓打ちの芸態は別系統のものである。十津川村周辺において「大踊り」という表現の伝承は多様である。そのなかでとりわけ現地で古風と意識された、特定の曲目のみが篠原踊と同系統といえる。

また更に下流域に至ると、三隅治雄氏が平成六年度『民俗芸能現地習得報告書 古歌舞伎踊りの系譜(Ⅳ)』のなかで指摘されているように、和歌山県本宮町土地河屋の盆踊りには片バチ型の踊りが伝わり、川瀬(篠原の古名)から学んだという伝承が残る。

篠原と分水嶺を隔てた吉野川(紀の川)水系を見てみると、吉野郡下市町丹生にも風流系の踊りが伝わる。太古踊りという名称で、昭和十五年(一九四〇)の紀元二六〇〇年祭に檀原神宮で踊ったことから県内でも知られた。ここにも片バチ型の太鼓踊りがあり、締太鼓の打つ革面を裏返しながリズムを打つ、篠原特有の芸態をみることが出来る。にわか踊り、お庭踊り、宝踊りなど、篠原と共通する曲目が伝わっている。

同郡川上村東川も類似する踊りが伝わり、こちらは子供が柄付きの小型鉦打ち太鼓を片バチで打つ芸態をもつ。中絶したが、吉野町国栖にも締太鼓片バチ型の風流踊りが伝承されていた。これらの踊りは「早馬」という子供の小太鼓を痕跡として残している。しかし、『奈良県民俗芸能緊急調査報告書 奈良県の民俗芸能Ⅰ』で指摘しておいたように、これは近代初期まで大和平野に分布したなもので踊りの一部である。吉野北部は二つの風流踊りの分布が重なり合うところで、篠原踊系との分岐点となっている。なお廃絶したが、宝踊り、分水嶺を越えて奈良県吉野郡北側紀の川(吉野川)流域には、篠原

踊の芸態分布はさほど濃密ではなく、範囲も狭い。さらに下流域の分布状況についてはいまだ詳細な調査報告がない。

このように、篠原踊の芸態は、主に奈良県吉野郡十津川流域に沿って伝わったものとみることができる。十津川村周辺では踊りの伝承は盆踊りが多く、さらに上流域には篠原同様に祭礼行事でも踊っていた地域がある。盆踊りでも祭礼でも踊るといふ篠原の踊りは、分布の上ではさして不思議ではないことになる。ただし十津川流域で諸バチ型の芸態をもつのは西川のみで、諸バチ型と片バチ型の併用芸態が各地にあるわけではないようである。

諸バチ型で太鼓を胸高に吊す踊り様式は、雨乞い踊りなどとして近畿地方に多く見受けられるもので、入端踊り・馬場入りの名称で入場の踊りは縦列の踊りが多いが、あとの踊りの大半は輪踊りとなるものが多い。しかし『民俗芸能現地習得報告書 古歌舞伎踊りの系譜(Ⅳ)』でも示されているとおり、篠原の太鼓打ちの踊りは大半が横一列が通常でありながら(入波踊りは縦一列)、いくつか輪踊りとなる振り付けを内包している。踊りの隊列についてはとくに伝承はない。伝来当時には元は輪踊りであったか、または踊り手の人数が限られるため、篠原で独自に振り付けを工夫した結果であるかもしれない。

現在伝承されている踊りの芸態は、諸バチ型の太鼓踊り系統の踊りでは近江踊り(他地域ではとら松踊り)で歌謡部とハヤシ部分の踊りがそれぞれ一種類ずつで繰返される。入波踊りも「和田の岬」の歌謡部で最後の一拍を打たず短縮で変奏されるが、ほぼ同型で繰返されるシンプルな踊りである。いわば太鼓踊り系統の踊りは、踊りの構成がシンプルといえる。また座して打つ大原木踊りも十七八踊り(末尾の一つ前の一節は大原木踊りの節に変わるとの所伝があ

る)も、ほぼ歌謡部とハヤシ部のリズム対応は一对一で同じである。これに対して片バチ型の踊りは、世の中踊りを唯一の例外として、歌謡の節目でリズムは同じでも芸態が変化し、ハヤシも芸態が多様に変化するものが多い。諸バチ型は古い芸態をそのまま残しているものではないだろうか。

風流笠鉾や風流の造花などがないのは、雨乞いなど臨時の行事ではなかったためであろう。また全体で踊りの輪が形成されないのは昭和の初期も同様なので、おそらく踊り手の人数がさほど多くなかったためと、屋内で踊ることを前提に工夫されたことによるものであろう。目を驚かすという視覚的な「風流」の要素は少ないが、むしろ踊りの変化とリズム変化の「風流」というべきであろう。ほぼ明治生まれの話者も亡くなり、過疎という条件も加わって古い踊りの伝承は先述した記録に頼るほかない。昭和三年(一九二八)の記録によると、いくどか中絶と復活を繰り返したらしい。踊りは時代によって変容するものであり、篠原の例でいえば、宝踊りのトビの振り付けは少し変化している。社務所兼宝物殿が神社下の境内に移設されたことによって、踊り場が手狭になり後半のトビが省略されて別のヒラオドリで踊られている。このような変化は、近年まで篠原で踊りを楽しむ人々が多く居住し、踊りの振り付けに積極的に独自の工夫を加えて研鑽した結果であろう。

第二次大戦前の篠原では、新宮まで管流しで盛んに材木を運送し、舟ノ川から熊野川へ材木流のため往来する人も少なくなかったと伝えられる。歌謡は都会的な叙情性の高いもので、篠原から生まれたものではない。とくに「新宮節ききや よこ衆が名を呼ぶ」という詞章の新宮踊りは詞章はやや新しく、新宮まで熊野川水系を上下していた生活背景と無縁ではないであろう。十津川村谷瀬や和歌山県

本宮町新古屋の盆踊りのように、篠原から伝わったという伝承があり、大正年間から篠原踊の名が轟いていたと記されることも、うなずけるように思える。(文中のリズム譜は、京都市立藝術大学三回生荒木真歩さんの協力をえて作成した。)

8 踊り歌本

篠原では古い歌本が発見されていない。伝本は数冊あるがいずれも近代のもので、筆記された年代がよくわからない。今回は現状報告でもあるので、篠原踊保存会の阪谷民男氏所蔵本(父君末房氏筆記本)を翻刻した。この本は表書から昭和三〇年(一九五五)の作成と思われる。篠原踊以外の百人一首、一人娘(今回は省略)の踊り歌の詞章がある。あとからの追記および訂正箇所が多いので、この部分については若干省略した。稽古のときに音頭の歌を採録したものが多かったためか、諸本によって異同がある。詞章については、『大塔村史』と『篠原踊』にこの本より多数の歌が所載されている。脱漏もあるが、現行の踊り手が使用するものであるのであえて採録した。

(表紙)

篠原踊歌詞

阪谷用 S30

一 入波踊

ハア踊が参るよ どれから参るくくく

ハイヨオヤ 加賀越前エエんの オヨ 京からにくくく

ハア堺の浦では 異藥をめさる／＼

ハイヨオヤ それ様新宮へ オヨ そよ／＼と／＼

ハア新宮のサ港は 目出度い港

ハイヨオヤ 一寸出てみれば 浮舟が

ハア浮舟に積みたは何々候よ

ハイヨオヤ 下には白金中には黄金 綾や錦を帆にかけて

ハア此処は和田の岬 くるりと廻れ 島の御座船 島の御座船

二 御船踊

ヨオ長崎の ヨオ 出舟入舟 通い舟

ハイヨハ 沖に見えたは 様の舟／＼

御船踊を一踊

舟は見えても 我が様見えぬ

見えぬ道理よ 帆のかげで 御船踊を一踊

船に積みたは何々ぞ 金銀米船下に積む

綿紅染色よ 御船踊を一踊

様の舟かよ 沖こぐは

綾や錦を帆にかけて 御船踊はこれまでよ

三 梅の古木

サアハイヤハヨイ

ハ梅の古木に ヨオヤハイヤ ハア なで駒つうな／＼よ

ハイヨオヤオンヤ 駒が サア勇めば花 コリヤア、も散る

ハイヨオヤオンヤ 駒が

ハ花の上なる ヨオヤ ハア白露ウンウ 見ればよ

ハイヨオヤオンヤ おらもハアなりたやアンア 露コリヤの身と

ハイヨオヤオンヤ おらも

ハ梅は香いよ ヨオヤハア 桜はアンア色よ

ハイヨオヤオンヤ 人はハア育ちでエンエ ふりコリヤいイラぬ
ハイヨオヤオンヤ 人は

四 世の中踊

ン去年より今年はみな世の中で／＼

サア所々に倉が立つ／＼

サア世の中踊を一踊／＼サアハイヤ

ンヨ世の中をよゆりや直いて／＼

皆世の中をゆり直す／＼

ンヨお寺の御門の御若衆様は／＼

世の中よかれと笛を吹く／＼

ンヨ世いなばの末の朝露こぎて／＼皆世の中へそよ／＼

世の中踊はこれ迄よ

五 宝踊

サアエイヤトコトン トコトン

ハソレ サハイヨイ ヨイトントン

ハア ハソリヤ

ハソレ此処はよいとこ やら名所や／＼

ハソレ これのお里へ家地やを建ちよ／＼

ハソレ家地を建てにや 何しようど／＼

ハソレ家地を建てにや倉を建てちよう／＼

ハソレ錢や黄金を買いこめてや よろづ宝を買いこめて

ハソレおらが局にや月かさすや／＼

油ひかずは消さすもの

宝踊はこれ迄よ

六 花買うて踊

踊ろよなあーん 花の踊りを一踊サア一踊

ハア花買うてなよ アソレ何にするよとハイヨ問いソレければよ

アソレ我が殿の オンハハイヨ手拭にハイヨそめてやる

ハア浮き人は 顔の掛りは十五夜よ

ソレ見ても見あかぬ 身元の志ほは 唐の鏡よ

ハア十三でなあよ 殿に去られて無念なよ

ソレ柳切株 吾が身の末は 未の楽しみ

ハア言うつろよなあよ 御座もせまいと云うつろが

ソレ御座も広いよ 枕もなかし なかしねられぬ

七 長崎踊

アソレヒヤラレ

インヤイヨガイヤヤラロ

ハラオオヤロヤラロハヤンパニヤレルロ

長崎見れば ハアヨ思ひ出すくくく

ハア元の殿御はヨ長崎に アソレ長崎に

元の殿御は長崎にも イヤレハヤアヤラロデソレ 長崎に

ハア大阪船かよヨ 浮き漕ぐはくくく

ハソレヤラドイヨインヨヤラドハラローハヤンパニヤ

ハア歌でやらいでヨ ろうでやる

ソレ長崎に 元の殿御は長崎に

ソレ御江戸船かよヨ 浮き漕ぐはくくく

ハアろうでやらいで 恋い風で

ソレ長崎に 元の殿御は長崎に

八 白菊踊

インヨハイヨよしや吉野の イヨ花ソリヤなれば

ハイヨこかれ候よ 白菊に イヨ白ソリヤ白菊に

ハイヨ殿の間を知る イヨ花なれど コリヤーエエ

こかれ候よ 白菊にくく

ハイヨ露の間を知る 花なれど

ハイヨ庭のまを知る花なれど

九 賤は高砂踊

オ、ンドローヨオン

ンヨウ静波高砂のくくく

ハイヤ ハ ヨオ 松の葉に住むきりぎりす

ハイヨ松の木蔭で身をやつす ハイヨ空でこがれて 鳴くばかり

ンソレ思えねばこそ 君まといてんよ

ンソレ 思ひ くの見れば

ンソレ思ひの増鏡 、、、ン 、、、マスカーガミ

ヨウ静波有明のくくく

ハイヨヨオ月の出らるをまちかねて トロヨイハハ

ハイヨ 松の木蔭で身をやつすン ソレ空でこがれて鳴くばかり

ハイヨ思えねばこそ君まとをんよ ソレ思ひ くの見れば

ンソレ思ひの増鏡 ミンミマスカーガミ

ヨウ静波日暮のくくくヨオ月の出るのを待ちかねて

ハイヨ 月は山端に君はこぬ

十 忍び妻持踊

ハ忍び妻持ちや イヨ心にかゝる 又も来たかと 門を見る

ハ寺の鐘が鳴 イヨ夜は明る 寺の鐘かなる 夜は明る

ハ何日の夜よりも今の夜は サア心淋しき夜はない

ハ来まま、待つまい 待つ時きやすぎる

門にもたれて 夜を明かす

十一 俄か踊

俄か踊りの事なればくくく

ヨオ悪しき所は御免なされ

ヨオ来ては手を締め 来た音たかく

ハイヤインヤンレヤンく

ヨオあれはそなたの事すーみーか

ひより山から月見ればくく

ヨオしばし曇りて又さえる

磯の浦から 沖見ればくく

ヨオ出船入船限り無くく

十二 哀れ龍田

オ、ンドロー ヨウーオン

ン哀れ龍田の薄紅葉くく

ヨオひとの心に意をさすな

イヨさそいさそうて ヨオ彼の様よオ、

心は若野の君様ニ エイサーラ エーイ エイサラエイとの

ソリヤ此面白や

ン君は茅野に降る霰れくく ハイヤハヨイ

ヨオ音はせず来て降り心

ン浮世さかりの賤が身はくく

親の許さぬ殿を持つ

十三 京鹿の子踊

ハア是は京鹿子くく ハア見えぬ様よオヤ

ハアン鹿子の 付けようもよ オヤ ハアおきよ

ハア京やたらさハ 都ごととして エ立越し

ハアこのたらすさまは 春の花

ハア是は京若衆 ハア髪のまげよもよ

ハア是は京女郎衆 ハア髪のまげよもよ

ハア是は京歌舞伎 ハア音ごとのとりよもよ

ハア是は京小袖 ハア御紋の付けよもよ

十四 近江踊

おん並びやでー

ハア江近（ママ）の國の ハア秋田の町の親方は ハアまはる

先ず召す馬のようだいは ハア金福りんの鞍をかけ

ハア綾の手綱をゆり掛けて

ハア勇みに勇んで掛けてこる 近江踊を一踊くく

ハア具足は何と好まれた二回くく 上六段の白糸よ

ハアすそくれないとおどしたつ ハイヨ不足（ママ）はないとおどしたつ（脱アルカ）

ハア刀は何と好まれたくく ヨウもとは白金中黄金

ハア千馬千鳥の金かしら ハア四方四面と振りかぶり

ハア槍を何と好まれたくく ハア二尺七寸浪の平

末をば異国の蛭巻

ハアさて其の後を見てやれば

白柄の長刀 千振り計りと（以下、詞章欠落）

十五 田舎下り踊

お並びやーで 田舎踊を一踊り

ヨウ田舎下りは面白やくく ヨオいつも下るよ年々に

田舎下りの道すがら ハア道すがら

ヨオ明日は吉日旅に立つ ヨオ思ふ若衆といとまごい

ヨオ旅の習ひか あれを見よ ヨオ笠の締よがいとにあふ

ヨオ思ふ若衆と寝た夜は ヨオ鳥も鳴すな夜も明けなよ

ヨオ人もさはぐな なさけなよ

ヨオなげいなげよの其の頃は

ヨオ声聞くさえなつかしや

ヨオ此処は江近（ママ、下同ジ）の三井寺よ

ヨオ鐘の音がする有難や

ヨオ此処は江近の石山よ　ヨオ鐘の響は聞こゆれど

ヨオ我と心はやわからに

十六　新宮踊

お並びー

ヨオ新宮節ききや　よこ衆が名呼ぶ　御座れ戻ろよオン熊野地へ

ヨオ新宮堀川にごりの川よ　住めば心のとまる川

ヨオ新宮照れく船町曇れ　阿波やこなみに日もさすな

ヨオ新宮船かよ早や来て戻る　なでにおアそいよインヨ様の舟

ヨオ如何に夜もく新町通ひ　金の雪駄もたまるまい

ヨオ三文せつたも五両しよとまよ　様に雪駄を絶やしやせぬ

ヨオ新宮出てから　ヨ宇殿が名所　出船入船は名所

十七　雪原踊

お富士の山に降る　白雪の　笠の上の重さよ

ハイヨ雪か恋か　雪原踊りは面白や

熊野の山に降る白雪か　笠の上の重さよ

ハイヨ雪か恋か　雪原踊りは面白や

あたごの山に降る白雪か　笠の上の重さよ

ハイヨ雪か恋か　雪原踊りは面白や

十八　お稚児踊

お並びやで

ハアシットロ　シットロトントン　サアコトシ　ヤトコトシ

ハア天竺の雲の間から　ヤお稚児がお文通しやるくくく

ハア茲開け御門の御番所よ　松若お稚児が文通しやる

イヨどれに通しやる　松葉やお稚児が通しやる

ハアよし老いて霜に打たせよ　夜更けて来たのは文章よ

ハア十七が恋をするわいな　紅葉の葉のよないろかあよ

ハアあれ見いさいの　十九の娘女が　あれ見て人の殿とるわ

ハイヨ人の殿取らいと思えども　吹く風になびかぬ草もない

情にハアほれぬ人もなよ　お稚児踊りはこれ迄よく

十九　向いの山踊

ハア向の山で茶をくめば　ハア十九の殿に手をしめられる

ハイヨあしよや是もふしよなるに　ハイヨ引くに引かれぬ

どんどの山の材木　ハイヨ人の小娘をくくく

ハア我が殿におらがやりたい物を　ハア重藤の弓にまな矢を添て

ハイヨあれなるとのに

ハア我が夫をおらが思わぬとおしやる　ハア思えばこそよ

買うとも着しよに関東の　ハアめあをに四国のつむぎ

我が夫にサアおらが着せたいものを

ハア伊勢の編笠の八ツつぶさを

ハイヨあれなる殿に着せ参らす

二十　お庭踊

ハア兼勝殿の門見れば　ヨオ黒金御門と先づ見た

ハイヤお庭踊を一踊り

ハアお庭のかゝりを見てやれば　ヨオ先づは植えたよ川原つゝじ

立寄りて　花をよくく見てやれば

ヨオ千重の椿にうすいの牡丹

牡丹芍薬しだれ小柳　やら見ごとにて

立石を見てやれば　砂をばらくとまかれつゝ

水をばまいた如くなり

ハア天竺こまんがらめにつくられて ハイヤ先づ見事に作られた
ハイヤお庭踊はこれ迄よ／＼

二十一 三左踊

三左ふれ／＼よ そりや腰をふれ 腰をふらねばしよもなや

三左下ツコイシヨ

丹波丹後の そじや鷹なれど それて来たわよ
そじや殿故（ママ）に せんど頼めば犬たのため
犬は尾をふる後もする あまり踊れはしをなよ

二十二 山崎嵐踊

ヨアとてもこもなれば豊國の 花の都を見下して
心行方を上に見させそめたよ 山崎嵐 さらりと見そめたよ
君の袂と我が袖と結び合わして念話し／＼
道の小草も露もさけ 我と君とはおだやかに
君はかやゝに降る霰 音もせず来て降り心

二十三 十七八踊

十七八よ／＼／＼サア桑名の宿で
帯とけコリヤとけと サアせめかける
ヤ十七踊を一踊／＼／＼
十七八よ／＼／＼サアすまやのつゝじ
サアほれた殿御とサア目をさます
十七八よ／＼／＼サア板屋の霰
寝入るとコリヤすれば サアゆりおこす
十七八よ／＼／＼ヨオイとし殿御と
富士のすそので二人ねて 寝物語りで夜を明す
十七踊りはこれ迄よ

二十四 お風呂踊

ヨウ寺町のお風呂へ入リたや
お稚児や若衆にあいたや／＼／＼
ヨウよい風呂よ入りよい風呂 こりや
どこの番所が建てたよ／＼／＼
ヨウ番所は大和番所よ 大工と定めて
奈良番所／＼／＼
ヨウかなくずは ばんばと火が散る
寺提灯ともいて／＼

二十五 大原木踊

ヤアオハラオハラギ カワイ／＼／＼クロギミツサイナ
ハチヨウリヨウフリヨウ ハイヤシヤ
大原瀬上の原 世上の里 雪が氷りて春雨の
大原木を召され 黒木を召され候や
ヨウ八瀬や大原の習いには 黒い脚絆に黒い手おいをしやんとして
ヨオかねを付けたらの サア殿御の有るとの約束
ヨウ八瀬や大原の習いには 白い脚絆に白い手おいをしやんとして
ヨオかねを付けねばよ サア殿御のないとの約束
ヨウ八瀬や大原の屋敷人は ヨオ紅や麝香は持たねども
ヨウにおうて来たのが化者 ヨウ萩とすゝきか恋をして
萩はそよ／＼サアすゝきは穂に出て見られた
ヨオ今の若衆は 思慮がのて 茗荷の中でも寝よをしやる
如何に寝よ／＼と サア茗荷がしおれりや 子がさす

二十六 大井川踊

大井川の淵瀬をしらで ハソレ心まかせに
なゝめそろとの せめは

ハこのたやせん楽しみの ハソレその為め人手に
たなばたよ 此の我にあおうよの

ハこのちぎり故 たんぽぽと 秋はちとせよ かみだせよ
ハ君故に交す恋 うき身をやつす 我れかなよ 人のうらみ候や

二十七 吉野桜踊

吉野桜は名所にて ヨげに春を待ち
実に花盛りヨ 雨と風とは吉野山
月にせいきよ雨に風 風はむげなや 吹き散らす
自主の桜は 志賀の桜 八重の桜は

二十八 かやや踊

佐渡の島の かやゝの宿の娘 七人持ちて
七人の乙姫おじよろ 高きお馬にのせて
伊勢へくくと急がれる
伊勢へ来りて三年なれど 殿の肌には未だふれぬ

二十九 白糸踊

白糸よ白糸よ ヨウ夜のちぎりに 結ばれて
解くに解かれぬ ちぎりこめたよ 思いのままに
ちぎり こめたよ

十五夜よ 十五夜よ 月に曇りはなけれども 君の心に曇りあり
我が様よく江戸へおじやらば 暇もたれ
江戸おやめされよ 江戸にや 江戸女郎

三十 綾とり踊

ソリヤサササハイテンテ サササアハイテン サアヨイヨイヨコラ
ハア八重の桜はくくハア散る木は元によさ
ハイヨ夜の嵐に露こぎて
踊持ちやしらで 森はくろ金 ハイヨ綾織りとくく

ついたお席はハイヨ 黄金山く

ハイヨ庭の白雪くく

ハア志賀の桜はくくハア散る木の元によさ ハイヨ

しんきはじよろよ ハイヤ浜に出て しんきおこるよろうさいや

ハア吉野桜はくく散る木の元によさハイヨ

夜の嵐に露こぎて おどろ いちやしらで

ハア日本恋しや いけこいし いけのはたなる女郎こひし

ハア自主の桜は散る木を元によさ ハイヨ 様の舟かよ沖こぐ舟は

千鳥かけしの 帆が見える

附 百人一首

天智天皇

秋の田の かりほの菴の苦あらみ ハチツテン

我が衣も手は 露にぬれつ、

ハこら やっちよんや ちよん はれはさのさ いやこれはさのさ

いやはれは どっこいどっこい どっこい これはさのさよいよい

チツテン

* この曲は篠原おどり保存会の練習で部分的に拝見した。太鼓打

ちは伴奏で、女性が二枚扇を用いるの踊り歌である。伊勢音

頭風のハヤシがつく。以下、百人一首の順に繰り返される。

(裏表紙)

昭和参拾年壹月之を記す

阪谷末房

附 喜多映美「大塔村風俗誌」(「奈良県風俗史編纂資料」所収、大正四年調査 奈良県図書情報館蔵)

「右、篠原踊ノ種類ハ凡ソ二十七、八種類アリテ、今其一班ヲ拔擢セシモノハ、尋常人ノ一見スルトモ、一読ニ苦シム次第ナレトモ、之ヲ技術者ノ装束ヲ付ケ、男女共場所ニヨリ十二、三人拍子ヲ入レ、歌ヲ歌ヒ、男ハ胸ニ太鼓ヲ釣リ、両手ニ鞭ヲ持チ、左右ヨリ打込ミ、女子ハ扇子ヲ持チ縦横列ニナリ、種々ニ其技ヲ奏スレバ、綿衣風ニ長袖交モ横ハリ、其宛転ノ妙ヲ極メ、凝視スル者一見古代カ一種特得(ママ)ノ踊リナルコトヲ知り、其耳目ニ感触スル所、何トナク奇妙不思議ノ感ニ打タレ、遂ニ時間ノ経過スルヲ知ラサルニ至ル、故ニ近村近郷ノ評判高ク、一、二他、村人ノ此ノ真根(ママ)ヲスル者アルト雖、到底及ハサルヲ知ル、依テ此ノ歌ノ真味ヲ探リテ踊リヲ一見セント欲スル者ハ、先ツ諺土地ニ就キ、動作ヲ実験スルヨリ外ナシ、是レ今日ニ於テ篠原踊リノ世上人口ニ膾炙シ、時トシテハ希望者ヨリ歡迎ヲ受ナルニ至ルモ、実ニ一種古来ヨリ占有ノ特色タル所以ナランカ」

*「奈良県風俗史編纂資料」は、現在のところ篠原のもっとも古い記録である。墨筆の未刊資料であるのでここに翻刻した。

(青盛 透)

(七) 音楽

篠原踊は歌詞の多様性からも想像できるように、ルーツの異なるタイプの踊り歌が長年にわたって集積されたものであろう。今回は調査で実見できた「梅の古木踊り」「宝踊り」「世の中踊り」の三曲について気がついたことを記す。

まず踊り手が自ら太鼓を持って踊ることが特色である。一番基本的な曲として皆さんが最初に稽古する「世の中踊り」は、終始「バチを後方に引いて構えて次に太鼓をひっくり返す」の動作を伴った八拍子のリズムを繰り返す。旋律に対応しているわけではない。歌はおおむね四拍子で進むが、時折字余りや休符をカットしたり長くしたりすることがあると、歌と八拍子のリズムとにズレが生じるが、一向に構わない。この曲に限らず篠原踊ではひたすら太鼓の拍子の動きを身体に染み込ませるのが稽古である。結果的に歌は一人に任されている。ちなみに太鼓を叩くのは男性だけで、女性は扇を持って踊る。

次に顕著なのは太鼓のハヤシが単なる伴奏以上の存在であることである。「梅の古木踊り」は最もハヤシが頻繁に挟まっている曲である。ハヤシはAとBの二タイプあり、構成は次のようである。

歌①「梅の古木に」――ハヤシA―― 歌②「なぜ駒つなぐ」――ハヤシAB―― 歌③「駒」――ハヤシA―― 歌④「いさめば花も散る」――ハヤシB―― 歌⑤「駒よ」――ハヤシA

「梅の古木踊り」はハヤシが二種類、それも頻繁に入るのにくわえて、歌の旋律も似ているようで毎回少しずつ違う。部分的に転調のような動きもあって節回しがとても難しい。メリスマ(コブシ)に富み、産み字や掛け声も多く歌詞をたどることが困難であった。(採譜でも一部不明瞭な箇所あり。)また『日本民謡大観近畿編』に載っている楽譜(たぶん昭和二〇(三〇年代の採集))と比べてもかなりの違いがあった。もともと律音階が陰旋化の傾向を示して不安定だった(最高音がやや低めを表わす↓付き)音が、今回かなりは

つきり陰旋化（b）していた。これはこの曲に限った変化である。経年化ゆえの変化か、あるいは個人的な傾向かは分らない。

「宝踊り」の場合はどうか。ハヤシは一種類で、一曲の真ん中と終わりの二ヶ所に入る。歌の旋律はそれほど難しくないが、太鼓のハヤシは長く、叩きながら自転したりかがんだり、左へ右へと動きが忙しい。

歌①「ハーソーレ ここは良いとこやら名所よ ここは良いとこやら名所」―ハヤシ― 歌②「ハーソーレ これのお里へ家地を建ちよよ これのお里へ家地を建ちよよ」―ハヤシ

ここで歌詞の歌い方順序を「世の中踊り」を例に示す。

- ①「こぞより今年はみな世の中で こぞより今年はみな世の中で」
- ②「所々に倉が建つ サ― 所々に倉が建つ サ―」
- ③「世の中踊りをひと踊り サ― 世の中踊りをひと踊り」
- ④「イサーハイハイ イサーハイハイ」

「世の中踊り」は太鼓のハヤシは付かず、歌の旋律も①は甲を二回繰返し、②③も各々乙を二回ずつ計四回と、うたいやすい旋律が何回も繰り返されるので、一緒にうたっている方も多かった。皆さんがうたいながら踊ればもつと太鼓も揃うであろう。

篠原踊の楽譜について（付「十七八踊り」）

ここに挙げた奉納三曲の音源は、昭和五四年（一九七九）一月二五日に篠原の天満神社境内で奉納された際の映像記録から音のみ拾いだしてCDにしたもの（奈良県教育委員会提供）で、今回平成二十七年一月二五日の奉納の際にもこの音源を使用した。当日うたうはずの音

頭取りの阪谷一郎さんが急逝したためである。採譜にあたってはこのCDをもとに調査当日の演技を映像で確かめ若干の補正をおこなった。映像（報告書付録）を視ると、歌と太鼓のリズムのズレが目立つ。どうしても太鼓が歌より早くなってしまうのである。踊り手は動きながら叩くのに一所懸命で、歌を聞きながら合わせていく余裕がないように見受けられた。そのくらい踊り手の動きが多様である。

楽譜を見るにあたって次の点に注意してほしい。

- ①この楽譜は上記の一回限りの演奏の記録であり、規範となるものではない。つまり模範演奏でも、ましてこの通りにうたうべきというものでもない。同じ旋律でもうたう毎に違ったリズムや表記になる場合もある。息継ぎの場所は特に決まっていないので、歌詞が分断されることもあり、歌詞の聞き取りを難しくしている。
- ②実際の音の高さはほぼこの楽譜の一オクターブ下である。速度表示もおおよそと思って欲しい。踊り手の動きに連動して微妙に拍の伸び縮みがあるが、機械的な正確さは求めている。音高についても同様に、やや低め高めの↓↑表示は最小限にとどめてある。はつきりとした音高を持たない時は×印を用いる。
- ③ハヤシとは、太鼓の打音と打ち手（踊り手）の掛け声のみの部分。「世の中踊り」の一同掛け声は踊り手や周囲の人達皆で歌っていた部分。単に「歌」とあれば音頭取りの独唱。
- ④小節の区切りは太鼓のリズムから四拍子を基準にしたが、歌詞の字余りや掛け声から多少の増減がある。そのため拍子記号は省略してある。
- ⑤bの調号は西洋音楽的な調性を意味してはいない。

〔十七八踊について〕

この曲は両足を揃えて投げ出してすわり、足先に太鼓をのせて打つという珍しいもので、神社境内ではなく室内で踊る。女性には扇をひらひら滑らかに回す。平成二六年九月二八日五條市での講習会では、太鼓の叩き方を熱心に指導する阪谷一郎さんの姿があった。最後に阪谷さんの歌が会場に流れたのであるが、採譜する段になってみると旋律はなんとか辿れたものの、歌詞を聞き取ることが非常に困難であった。残念ながら不完全な楽譜を載せる。かなり長い太鼓のハヤシは付属映像で視て欲しい。

（入江 宣子）

梅の古木踊り

演唱: 和泉 安恭
採譜: 入江 宣子

♩ = 75

[ハヤシA] [歌]

歌
太鼓

サ ハイ ヤ ハ ヨ イ う め の こ オン ほ く に

[ハヤシA] [歌]

ハ ア イ ヤ ハ ヨ イ ハ な ぜ こ ま

[ハヤシA] [ハヤシB]

ア つ な ア ゴ よ サ ハイ ヤ ハ ヨ イ ハ

[歌]

イ ヨ ヤ ハ オン ハ こ ま ア ア ナ

[ハヤシA] [歌]

サ ハイ ヤ ハ ヨ イ ハ い さ め エ ば ア イ ア ア

[ハヤシB] [歌]

は な コ リ ヤ ハ の オ ち イ る ハ イ ヨ ヤ ハ オン ハ

※太鼓を前方につき出す。

こ ま ヨ

ハヤシAへ続く

宝踊り

♩ = 82 ※太鼓は、歌の部分では、 を繰り返す。

演唱：和泉 安恭
採譜：入江 宣子

歌

太鼓

【ハヤシ】

【歌】

オイ ハ ソンソ ソンソ ここええ これじ わのを よオー オオた いさて ととて こえにや えなく らじに

めをしよ
いたぞだ
しよちよ
ちよ

一
二
二
二

よよよ
よよよ

二
二
二
二

これじ
こええ

わのを
よおた

いさて
とて

こえに
やに

やえなく
らじに

めをしよ
いたぞだ
しよちよ
ちよ

一
二
二
二

【ハヤシ】



サ エ イ ヤ ア ハ ヨイ ヨイ ハ ヤ

※叩きながら、後方に円を描く。

1, 2, 3. [歌] 4. [歌]

オ ヤ ハ ヤ ヤ ア た か ら お ど り ー わ ー

※左へ ※右へ

— — これ ま で — — エ サ こ オ — れ ま で — や イ ヤ こ

世の中踊り

演唱：和泉 安恭
採譜：入江 宣子

♩ = 66 ※太鼓は、を繰り返す。 * 右バチを後ろに構える。 ** 太鼓をひっくり返す。

[歌] 甲₁

歌 イ コーゾーより こ と し わ ア み な よ の な ー か ー で エ コーゾーより イ

太鼓

乙₁

こ と し わ み な ア よ の な ー か ー で と オ コーろー ど コーろー に イ

以下、略

乙₂

くーらーがーたーつー ウサー とーのーこーろーどーこーろーにーくーらーがーたーよーのーなーかーおーどーりをーひーとーおーどーりー

[一同掛声]

乙₃₄

つりー ウサーよーのーなーかーおーどーりをーひーとーおーどーりー イ

[歌] 甲₁

サーハイハイ イ サーハイハイ イ ヨーよーの

甲₂

なーかをヨ ゆりや なーお してーヨーよーの なーかをヨ

乙₁

ゆりや な お しーてー み な よーのーなーかーをーゆーりーな おー

乙₂

すーウサー み な よーのーなーかーをーゆーりーな おーすーウサー

乙₃

乙₄

よーのーなーかーおーどーりをーひーとーおーどーりー イ サーよーのーなーかー

[一同掛声]

おーどーりをーひーとーおーどーりー イ サーハイハイハイ イ

サーハイハイイ

十七八踊り

演唱: 阪谷 一郎
採譜: 入江 宣子

♩ = 95

(ハヤシ略)

[歌]

ヤ エーじゅー しーーちー はーちー イーよー オ

[掛声] [歌] [掛声]

ヤ ヤ しーちー はーちー いーよーーヤ イーヤ ハーア

[歌]

ヤーオー〔桑名の宿〕(で) サおーーびーとーけーコリヤとーけ

とーけとーサーせーーめーかーーけーるーアーヨイヤ〔十七

ハ〕エイエーコラおーどーりーーをーひーーとーおーどー

りーアイイ〔十七八〕エーエーコリヤおーどーりーーを

ひーーとーおーどーりーオー

ハヤシへ
以下略

第三章

篠原踊の現在および過去の伝承状況

第三章 篠原踊の現在および過去の伝承状況

(一) 戦前から戦後にかけての伝承と保存会の活動

篠原踊における音頭取りの系譜

締太鼓を打つ踊り子自身が音頭を取ることも多い風流踊りにあつて、篠原踊は音頭と踊り手はやくより分化している。音頭取りは太鼓や踊りの動きにあわせて音頭を取る必要があるため、踊りに熟練した男性で、声のよい者が音頭取りになることが一般的であつた。そのため音頭取りはベテランの踊りの指導者であることが多いようである。⁽¹⁾

現在、確認できる中で最も古い音頭取りは、吉崎正氏（昭和六年（一九三二）生）の曾祖父にあたる吉崎要蔵（文政四年（一八二二）〜明治三十六年（一九〇三））である。要蔵は、踊りと音頭の師匠であり、三味線を弾いて浄瑠璃語りもしたと伝えられている。⁽²⁾

戦前には、吉岡⁽⁴⁾から井本へ養子に入つた井本音吉も音頭を取つたらしいが、戦前から戦後にかけて篠原踊の最も中心的な指導者であつた音頭取りは阪谷留吉（明治十一年（一八七八）〜昭和四〇年（一九六五））である。

昭和十四年（一九三九）八月二十七日、民俗学者の宮本常一が篠原を調査に訪れた際、奈良県技師で郷土史家の岸田日出男⁽⁶⁾の紹介で、長く区長をつとめ、篠原踊の音頭取りであつた阪谷留吉から聞き取りをしている。さらに宮本は同年一〇月一一〜一三日にも篠原を再訪し、留吉とその三男に会っている。⁽⁸⁾

戦中は篠原でも若者がいなくなつて踊りも中断したが、戦後には帰郷した若者によって、踊りが盛んになった。

吉崎正氏が踊りをはじめた昭和二五、六年（一九五〇、一）頃は篠原にいた二〇人ほどの男女の若者のほとんどが踊りを習つていたという。日中の仕事を終えて夕食を済ますと、若者たちは阪谷留吉宅に行き、襖を取り外し、部屋を広くして練習をしたという。この頃には高齢の留吉に代わつて甥の阪谷清房が音頭を取ることが多くなつていた。清房は阪谷のオモヤ（本家筋）で、留吉のスケ（音頭取りの補助）を長らくつとめていた。

十津川村旭の中の川に県有林があり、阪谷留吉・末房親子は下草刈り等この県有林の手入れを請け負つていた。多くの職人を連れて泊まりがけの仕事に行つた時などは、飯場の小屋で太鼓に見立てたメツパ（弁当箱）を叩いて踊つた。ここで阪谷清房や辻内定光らは留吉から歌や踊りを教わつたという。

昭和二八年（一九五三）三月二十四日には東京文化財研究所の三隅治雄が調査に来て、踊りの録音をしており、昭和三三年（一九五八）一二月以降は、本田安次が何度か現地を調査に訪れている。同年には一三曲の録音をしたというが、これは正確には昭和三四年（一九五九）八月二六日のことであろう。⁽¹²⁾ 音頭は「坂谷留吉、坂谷徳房」と解説には記されており、阪谷留吉が音頭取りであつたことがうかがえる。しかし、上記の「坂谷徳房」の誤記が、次男の徳夫氏かあるいは三男の末房氏かは不明である。⁽¹³⁾ 徳夫はやくに神戸方面へ出ており、末房もまだ踊りには参加していなかったらしい。昭和三四年に録音されたこの音源を聞か限り、音頭は実際には清房が主で留吉が補助であるという。⁽¹⁴⁾ 昭和三〇年代に篠原の富田喜八郎氏が清房の音頭を万福寺で録音しているが、篠原集会所に残されていた録音

もほぼ同時期の清房の音頭である。また昭和三十三年（一九五八）四月二五日に辻堂小学校、昭和三十六年（一九六一）五月二七日に大阪の毎日ホール、同年一〇月一五日に伊勢神宮で踊った際に音頭を取ったのも清房であった。¹⁵

昭和三〇年代には音頭取りの中心は留吉から清房に移っていた。

その後、昭和三〇年代後期に清房は大阪へ転出、昭和三十九年五月一七日の五條ライオンズクラブ祝賀式、昭和四〇年（一九六五）三月二〇日の奈良県庁舎建築落成式における大和の古民謡古民舞発表大会では、和泉安恭（昭和三年（一九二八）～平成一三年（二〇〇一））が音頭取りをつとめている。

安恭は関西電力の篠原堰堤の管理人をしており、清房が音頭を取った録音テープを聴いて歌を練習していたとい



昭和36年10月15日「日本民謡踊大会」
（三重県伊勢市宇治館町・伊勢神宮内宮広場） 吉崎正氏提供



昭和33年4月25日「大塔村観光地発行事」
（奈良県吉野郡大塔村辻堂・辻堂小学校） 吉崎正氏提供

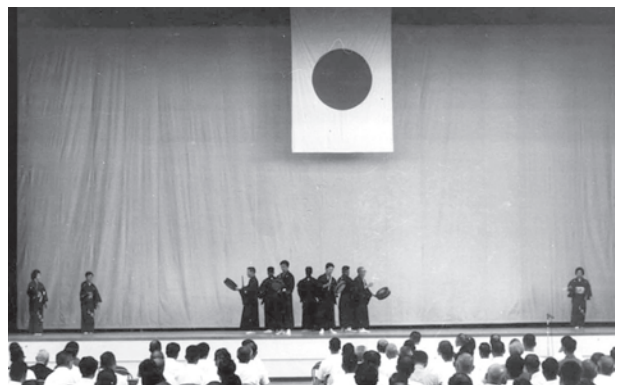
う。しかし安恭も昭和四六、七年（一九七一、二）頃には大和高田市へ転出したため、以降は踊り子の一人であった岸本勇（昭和八年（一九三三）～平成二〇年（二〇〇八））が近年まで音頭取りをつとめていた。

篠原踊保存会

昭和三〇年に「篠原おどり」が奈良県の無形文化財に指定され（保持者 篠原区）、昭和五二年（一九七七）

に無形民俗文化財に切り替えられた（保持団体 篠原おどり保存会）。また、昭和四六年（一九七一）には「篠原踊」が国の記録選択となっている（保護団体 篠原おどり保存会）。なお、保存会の名称については慣習的に地元では「篠原踊保存会」と表記されることが多かったようである。¹⁶ 県指定には同地出身で篠原小学校の校長である西尾勇夫氏の尽力があったという。

昭和五六年当時の「篠原踊保存会々長」であった戎谷一男氏によれば、「昭和二十九年に文化庁、県文化財保存課が調査の結果、全国的にも数少ない貴重な芸能であることが認められ、奈良県無形文化財に指定され、以来踊り保存会を発足させこれが維持継承のため、保存会のみならず区を挙げて取り組み」とあり、昭和三〇年の県の無形文化財指定に際して篠原踊保存会が結成されたようである。¹⁷



昭和39年5月17日「五條ライオンズクラブ祝賀式」
（奈良県五條市岡口・五條高等学校） 吉崎正氏提供

しかし、昭和一七年九月に日本常民文化研究所が刊行した宮本常一の調査報告三六七―三六八頁の註に「又この踊は東京の日本青年館で毎年行はれた全國郷土舞踊大會にも出た。さうして保存會も出ている。この踊りを世に紹介するには岸田日出男氏が非常に盡力された」、三八九頁の註に「此の傳説は篠原踊の保存會が、他地方へ踊に行つて踊る前にその由来を先づ述べねばならぬためにに書きつけられたものがあつて、それを要約した」とあり、戦前から村内外の公演等に行くことも多かったため、名称(看板)だけであつたとしても既に「保存会」は存在していたようである。戦中は踊りが中断されていたこともあり、指定にあたつて再度、保存会を作つたものであろう。

もっともこの時も実際には篠原区全体が保存会のようなものであり、区長が保存会長を兼務、会計(副区長が担当)や踊りの活動も区の中で管理されていた。規約も特に存在しなかつたという。村内外に踊りに出た時の謝礼は区より踊り子の代表に渡されてから参加した踊り子に分配された。保存会はあくまでも篠原区の一部という意識であつた。

そもそも篠原踊は住民の中の踊りの好きな人々によつて伝承されてきた。踊りをする住民は大正四年(一九一五)の「奈良県風俗誌」では総勢一二、三人、戦後の多い時期でも男性(太鼓打ち)は五、六人、女性は十数人ほどであつた。篠原から外に転出した場合でも奉納や舞台に参加することは自由であり、保存会を退会する手続きなども存在しなかつた。篠原の住民や出身者であれば保存会員として自由に踊りに参加できる親睦会的な集まりであつた。個人的に親しい親類や知り合いの家に仕事が終わってから出かけては踊りの稽古をすることも多く、練習も見よう見まねで厳しい指導などもなか

つた。後述の篠原会における踊りの伝承でも同じことがあてはまる。

篠原会における伝承活動

篠原では昭和三〇年代までは、谷奥や根本、奥田といった下市町の材木業者が立木を買つて山から伐り出していたので、多くの住民は山仕事に雇われていた。しかし、周辺の山の木を伐り出してしまふと、春の植林や夏の下草刈り以外は、伐採のように年中働ける山仕事は激減してしまつた。このため、高度経済成長期の昭和四〇年代になると、多くの人々は山仕事をやめ、安定した職を求めて篠原から五條市や大和高田市、橿原市等を中心に都市部へと出て行つた。篠原では昭和四三年(一九六八)に水口彌氏が奈良市に引越したのが最初で、それから吉崎正氏の家族も昭和四六年(一九七一)

に五條市へ転出した。その後は次々と住民の転出が続いた。吉崎正氏は天満神社の踊りの奉納にも最初は帰つて参加していたが、二、三年後には行かなくなつたという。ただし保存会が踊りの舞台で外に出る時にはほとんど出演していた。

昭和五〇(一九七五)

年頃には、篠原出身者の同郷会である篠原会が大福広造を中心として結成



昭和62年4月19日「篠原会」
(奈良県橿原市久米町・久米寺) 吉崎正氏提供

された。最初は奈良市の元興寺や公会堂も会場となったが、後年は橿原市の久米寺を借りることが多かった。毎年春頃に開催され、およそ二〇人ほどが参加していたという。飲食をともにして同郷者の親睦を深める目的であったが、数年後には余興として篠原踊や盆踊りも自然とされるようになり、篠原会で太鼓を購入するまでになった。篠原踊の二、三曲



平成10年4月5日「篠原会」
(奈良県奈良市二条町・簡保の宿) 吉崎正氏提供

を稽古を兼ねて踊ったが、音頭の録音を流して踊ったり、踊り子(太鼓打ち)自身が音頭を取りながら踊ったという。その後、平成四年(一九九二)には大福広造より柳谷孝へと会長が交代したが、高齢化にともなう会員の減少により、平成一〇年頃を最後に自然に解散した。

天満神社の奉納後における万福寺での余興の踊りはやくに絶えたが、生活改善センター(現在の篠原集会所)での奉納に向けた稽古でも式三番以外の練習は続けられていた。しかし、年々過疎化が進み、天満神社で奉納するための三曲(式三番)以外の伝承や練習が地元の篠原で途絶えがちになる中で、篠原会では「いりは」「十

七八踊り」「綾取り踊り」をはじめとした踊りが続けられていたのである。

後の保存会の再興に、篠原会における篠原の地以外での伝承活動が果たした役割は大きい。

(二) 保存会の現況と今後の展開

保存会の再興

戦後、保存会はほぼ毎年、村内外の公演や慶事に呼ばれて踊りを踊っていた。しかし、昭和の終わり頃から出演する機会が減り、平成九年と一六年の紀伊半島民俗芸能祭、平成一七年の五條市の屋敷山公園での踊りの披露を最後に舞台や村外での出演が途絶えた。これは保存会を支える篠原の過疎化が進み、経験者が高齢化するとともに踊り子の人数が激減したためである。

昭和二八年(一九五三)頃は八〇軒ほどあった篠原の集落は、昭和五八年(一九八三)には三〇軒余り、平成七年は一六



平成5年8月7日「道の日記念 感道フェア93」
(東京都渋谷区代々木神園町・代々木公園イベント広場) 楢本芳博氏提供

一八軒（三五人）となり、平成二七年は一〇軒（一二二人）である。⁽²¹⁾
平成二〇年一月二〇日には三〇年以上にわたって音頭取りをつとめた岸本勇氏が亡くなり、二一年一月二五日の奉納は中止された。二・二三年は岸本氏の録音テープを再生して踊りを奉納したが、二四年一月二五日の奉納は二三年九月の紀伊半島大水害で犠牲となった篠原区民に対する追悼の意もあり中止された。音頭取り不在で迎えた平成二五年一月二五日の奉納において、奈良県教育委員会事務局文化財保存課（以下、県文化財保存課）は五條市教育委員会事務局文化財課（以下、市文化財課）とともに篠原踊の今後の伝承方法を探るとともに協力して支援するための相談をした。⁽²²⁾この時の踊り子は男性二人、女性三人。篠原在住者は阪谷民男氏、富田裕子氏、富田妙子氏の三人であった。

五條市は二五年度の事業として市内所在の県指定無形民俗文化財⁽²³⁾に関する過去の映像記録等のデジタル化を実施した。これは、伝承者育成のための素材を、今後利用可能な形式に変換し、保存する目的であった。

県文化財保存課は県内の民俗芸能の現状を調査、把握するため、文化庁の補助事業である「奈良県民俗芸能緊急調査」を、二三年度から二五年度まで実施していた。⁽²⁴⁾緊急調査では、資料調査として、県文化財保存課所蔵の映像・音響資料以外にも地元の篠原集会所、五條市大塔支所、あるいは大阪教育大学⁽²⁵⁾の所在資料の確認をしており、これが上記のデジタル化の素材の一部ともなった。その後、二六年度には富田喜八郎氏が所蔵の音響⁽²⁶⁾（前出）を保存会がデジタル化した。

緊急調査では、篠原踊の現地調査を実施するなかで、踊り子の代表であった阪谷民男氏（昭和二五年生）への聞き取りから、兄であ

る阪谷一郎氏（昭和二三年～平成二七年）が現在ではただ一人音頭を取れることが判明した。一郎氏は大学を卒業後に篠原から出て大阪の会社に就職したが、二九歳の頃に吉崎正氏や和泉安恭氏から踊りを習い、五〇歳頃までは公演や天満神社の奉納で踊っていた。⁽²⁷⁾さらに一郎氏は篠原会にも毎年参加して、音頭と踊りの稽古もしていた。篠原から大和高田市に転出し、現在でも自営業を営んでいる等、踊りや音頭の指導をするには困難はあったが、篠原に帰郷した一郎氏に筆者が直接お話をうかがったところ、本人の意欲は十分であり、周囲の環境が整えば指導も引き受けることが可能であることが確認できた。そこで、一郎氏を指導者にして新しい伝承者を広く公募することが検討されることとなり、地元（自治会）と保存会への説明は民男氏に委ねられた。

平成二六年一月二五日の奉納は関係者の不幸事により中止されたが、保存会は五條市役所大塔支所の吉川佳秀氏（課長補佐）と相談するなかで、読売新聞や「全日本郷土芸能協会会報」七四号（平成二六年一月発行）に来る二七年一月二五日の再開に向けて伝承者の公募が掲載された。はじめて外部から踊り手となる保存会員を募る決定については阪谷民男氏が一任されたという。これらの媒体への掲載をきっかけに、四月二二日及び五月二九日に保存会、大塔支所、市文化財課、県文化財保存課が話し合いを持ち、具体的な公募方法・講習内容の検討をした。その結果、二六年六月一日に「伝承者募集説明会」を牧野公民館（五條市中之町）で開催することが決定された。⁽²⁸⁾

六月一日午後一時三〇分からの説明会には関係者を除く四三名が参加し、保存会と県文化財保存課による説明の後、県教育委員会制作の篠原踊の映像（昭和五四年一月二五日収録）が上映され、音頭

取りの阪谷一郎氏を先頭に「いりは」等が壇上で実演された。最後に参加者には今後の講習会の曜日・時間帯の希望、交通手段等を集計するためのアンケートが配られた。

説明会不参加を含む四七名のアンケート集計の結果、二五名より回答があり、日曜日の午後一時より三時頃まで牧野公民館にて月二回程度の講習会を設けることが決まった(ただし、第三回講習会より男性は午前一〇時からはじめることになった)。

なお、四七名の内訳は、五條市一八名、五條市以外の県内一〇市町村二一名、大阪府五名、京都府一名、和歌山県二名であった(市文化財課集計)。

第一回七月二〇日(日)、第二回八月二四日(日)、第三回九月二八日(日)の講習会の後、一〇月一日に保存会が正式に発足。三〇名余りが新しい会員となり、「篠原おどり保存会規約」が新たに制定・施行された。本規約において、役員の選定や事業計画、規約の制定改廃等の重要事項は年一回開催される通常総会や臨時総会で決議されることになっているが、附則で「平成27年3月31日までは経過措置期間とするため、すべて会長の指示に従うものとする」とされ、平成二六年度は自治会長・保存会長である玉井和尋氏に一任さ



平成26年6月1日「伝承者募集説明会」
(奈良県五條市中之町・牧野公民館) 五條市教育委員会事務局文化財課提供

れた。現在は毎年五條市より八万円の補助があるが、平成二六年度の会費は一人千円と定められた。

第四回一〇月五日(日)、第五回一〇月一九日(日)、第六回一〇月二六日(日)の講習を経て、十一月三日(月・祝)に「第一八回大塔いきいき文化祭」に出演。会員二二名が「世の中踊り」「十七八踊り」の二曲を披露した。⁽²⁹⁾

以後も平成二七年一月二五日に予定されている「梅の古木踊り」「世の中踊り」「宝踊り」の奉納⁽³⁰⁾に向けて練習が行われた。第七回一月一六日(日)の講習会では上記の式三番の模範演技を男性は阪谷一郎氏、阪谷民男氏、女性⁽³¹⁾は富田妙子氏、生野はすす氏、平山ゆみ氏の踊りによって市文化財課が撮影し、第八回十一月二三日の講習会で編集した映像を出席者にDVDで配布した。

その後、第九回講習会は一二月一四日(日)に予定されていたが指導者である阪谷一郎氏が大和高田市立病院(大和高田市)へ入院したことにより一二月二一日(日)に延期された。以後も音頭取り不在のまま、男性(太鼓)は阪谷民男氏の指導のもと、映像記録を手本にした練習が第一〇回一月二一日(日)、第一一回一月一八日(日)まで続



平成26年9月28日「第3回講習会」
(奈良県五條市中之町・牧野公民館) 五條市教育委員会事務局文化財課提供

けられた。

奉納直前の一月一八日の最終講習会では公民館の駐車場にて音響と踊りの最終確認を行った。同日の夕刻、最後まで奉納踊りの音頭を取ることを病床で望んでいた阪谷一郎氏が土庫病院（同市）で亡くなった。弟の民男氏をはじめ、家族・親戚の踊り子五名は服にかかるため一週間後の踊りへの参加を見合わせる事となった。

今後の展開

平成二七年三月現在の会員数は三六名である。三六名のうち篠原の住民は五名であるが、規約により自治会員約一四名も保存会員に含まれるため、正確には約四五名が保存会に含まれることになる。ただし、練習や公演などの伝承活動は上記の三六名によって実施されるため、ここでは狭義の保存会について記す。

平成二六年度役員（任期二年）は会長に玉井和尋氏が就いた。従来から篠原自治会長（任期一年）が保存会長を兼ねる慣例であり、玉井氏も自治会長との兼務である。しかし、新しい保存会の規約では今後はこの慣例は適用されないことになった。

副会長には踊り子の代表であった阪谷民男氏、音頭の伝承者であり講習会の指導者であった阪谷一郎氏が³¹とめた。事務局長・会計は篠原関係者ではない椋本芳博氏である。

役員の中で玉井氏と椋本氏は踊りには参加しておらず、篠原踊りの伝承者・後継者ではない。地域（自治会）との連携や開かれた組織運営といった新たな組織化には踊りの伝承者・後継者の力だけでは難しいこともある。このため「本会の目的に賛同し、本会の事業に参加、支援する者」（規約）も積極的に会員となってもらい組織運営に協力する体制作りが模索された³²。

一方、保存会の目的は「奈良県五條市大塔町篠原に伝わる「篠原踊り」の保存・伝承を目的とし」「地域社会と地域文化の豊かな発展を目指すもの」（同）であり、事業の第一は「毎年1月25日、篠原の天神社境内での式三番の奉納」（同）を行うことと定められている。保存会には従来通り「篠原自治会の会員」（同）も含まれている。さらに、規約には「梅の古木踊り」は篠原の天満神社でのみ奉納することが明記されている。篠原という特定地域の関係者（在住者・出身者）以外へ開かれていると同時に、篠原という一地域が伝えてきた固有の歴史・文化を活動の根拠とすることが重視されている。

伝承者の公募は過去の篠原会の名簿に基づいた声かけが自治会からなされたこともあり、現在の会員の約三分の二が出身者やその家族といった篠原関係者、三分の一が篠原とは関係のない会員である。居住地では五條市を中心に奈良県内が多数を占めるが、大阪府や和歌山県からの入会者も存在する。踊りの習得に加え、会員相互の理解と融和、篠原地域との連携、篠原や大塔町の歴史と文化に対する学習を進めることも重要である。たとえ子供の頃に篠原踊を見たり、習ったり、踊ったりした経験のある篠原の在住者や出身者であったとしても、篠原踊という「伝統」をあえて選び直しているという行為を意識化する必要がある³³。

保存会では、今後は大幅に増加した新会員のもと、式三番を含む最大二〇曲の踊りの習得と復活をめざし、月二回程度の全体練習を予定している。用具の新調や修理に加え、習得のための補助ツールとして、教則映像や教則本の作成が計画されている。音頭取りの養成も急がれる。

最近一〇年ほどは舞台での公演をほとんどしていなかったが、今後は新たに習得した演目の披露の場として積極的に多くの舞台に出

演することや若い後継者の獲得のために学校現場との連携を考えていくことも重要である。

現在、牧野公民館での練習日を毎月第一・第三日曜日に固定し、公民館活動（サークル活動）として位置づけることが検討されている。保存会のアソシエーション化によって起こる様々な課題に対し保存会が主体的に対応することが求められている。

（森本 仙介）

註

- （1） 本章の記述は阪谷一郎氏（故人）、阪谷民男氏、富田裕子氏、玉井和尋氏をはじめとした保存会の方々と吉崎正氏からの聞き取りと資料提供に基づいている。また五條市教育委員会事務局文化財課（市立五條文化博物館）からも資料の提供を受けた。
- （2） 要蔵が所持していた篠原踊の歌本も伝わっていたというが、現在は行方不明である。
- （3） 吉崎正家には現在でも三味線や義太夫正本が残っている。篠原や惣谷と同じ舟ノ川筋の五條市大塔町中峯（現在は廃村）では明治の末頃まで人形芝居が演じられており、現在でも浄瑠璃人形の首が残されているが、篠原の岸本勇家にも浄瑠璃人形の首があったという。なお、要蔵の子の政平（弘化三年～大正一〇年（一八四六～一九二二）、孫の留造（明治二三年～昭和四四年（一八九〇～一九六九）は踊りはしなかったが、留造はサンバソウ（三番叟）を演じたという。要蔵の父孫六には四人の息子がおり、それぞれ分家して吉田、小椋、吉岡、吉崎を名乗った。
- （4）

- （5） 井本音吉は戦中に留造の兄寒治郎（明治一七年（一八八四）生）と同じ宇智郡野原村（現在の五條市野原町）へ転出したという。
- （6） 若葉薫（岸田日出男）「昭和聖代の今尚現実に見る太古そのまの桃源郷」（岸田日出男『吉野群山の叢書』吉野山岳会吉野支部 一九二八）には、昭和三年（一九二八）に、不況等から数年来中止していた篠原踊が昭和天皇の御大典を祝うために久しぶりに神社で奉納されたことが報告されている。これにも留吉が関係していたことは想像に難くない。
- （7） 阪谷末房（大正一〇年～平成一六年（一九二一～二〇〇四））であろう。
- （8） 宮本常一『吉野西奥探訪録』（『宮本常一著作集 三四』、未来社 一九八九）。
- （9） 阪谷清房は吉岡伴春等とともに三河萬歳をしており、新宮にまで行っていたという。
- （10） 『日本民謡大観（近畿篇）』（日本放送出版協会 一九六六）『奈良県指定無形民俗文化財・国選択無形民俗文化財 篠原踊』（篠原踊保存会 一九八一）
- （11） 『復刻 日本の民俗音楽』（本田安次監修・解説、日本伝統文化振興財団 一九九八）
- （12） 留吉の長男の清次は戦死している。
- （13） 吉崎正氏の御教示による。
- （14） 吉崎正氏の踊り日記（抜粋）による。以下、踊りの記録や篠原会等の記録は主にこの「日記」による。
- （15） 昭和五二年（一九七七）に県の無形民俗文化財に切り替えられ、昭和四六年（一九七一）には国の記録選択となる。
- （16）

- (17) 『奈良県指定無形民俗文化財・国選択無形民俗文化財 篠原踊』(前出) 所収の「あとがき」による。
- (18) 宮本常一『吉野西奥採訪録―日本常民文化研究ノート第二〇―』(日本常民文化研究所 昭和一七年(一九四二))。なお、引用した註は『日本常民生活史料叢書一九』(日本常民文化研究所 一九七三) 所収版や前出の『宮本常一著作集 三四』(未来社 一九八九) 所収版でも変更はない(青盛透氏の御教示による)。
- (19) 正式な役職ではないが年長者や音頭取りであることが多い。篠原会では昭和五四年(一九七九) 頃より吉崎正氏を頼んで踊りの指南をしてもらった。後に踊り復興の中心となる阪谷一郎氏も篠原会の活動で吉崎正氏から踊りを教わるこゝとなる。前出の「日記」にも「昭和五十七年二月十四日 阪谷一郎君来て篠原踊り教える」「昭和五十七年二月二十一日 高田今里町の水口光治宅の前の会館に行き篠原踊り 篠原会の人に教えに行く 阪谷一郎 中垣公夫 阪谷孝夫」等と見える。
- (21) 『民俗芸能現地習得報告書 古歌舞伎踊りの系譜(Ⅳ)』(日本民俗芸能協会 一九九五)
- (22) 『朝日新聞』奈良版(二〇一三年一月二六日付) に踊り子の阪谷民男氏と富田直司氏、県文化財保存課担当者のコメントが掲載された。
- (23) 「陀々堂の鬼はしり」「阪本踊り」「篠原おどり」
- (24) 調査事業における篠原踊りの解説・分析は、青盛透「奈良県の風流・盆踊り―その歴史と芸能―」『奈良県民俗芸能緊急調査報告書 奈良県の民俗芸能Ⅰ』(奈良県教育委員会 二〇一四) を参照。
- (25) 一九八〇年代頃に大阪大学・大阪芸術大学が中心となって録音したもの。提供は卜田隆嗣氏の協力による。
- (26) 篠原集会所蔵のものと同時期の録音と推測される
- (27) 『民俗芸能現地習得報告書 古歌舞伎踊りの系譜(Ⅳ)』(前出) によれば、平成七年(一九九五) の調査では岸本勇、阪谷民男とともに阪谷一郎氏が踊っているの、保存会を抜けたのはこれ以降であろう。
- (28) 説明会については自治会による篠原出身者への案内状の送付、五條市HPへの掲載の他、読売新聞や奈良新聞でも取り上げられた。
- (29) 奈良新聞に掲載。
- (30) 奉納は毎日新聞と奈良新聞で取り上げられた。
- (31) 副会長は当初は阪谷一郎氏と阪谷民男氏であったが、一郎氏が亡くなったために現在は弟の民男氏だけである。
- (32) なお、連絡調整は五條市役所大塔支所市民生活課・五條市教育委員会事務局文化財課・奈良県教育委員会事務局文化財保存課となっているが、実際には五條市教育委員会事務局文化財課(市立五條文化博物館内) が中心となって担当した。
- (33) 『奈良県指定無形民俗文化財・国選択無形民俗文化財 篠原踊』(前出) 所収の歌詞集には誤記や不足も多い。今後は残された複数の写本や映像・音響記録、聞き取り等から、繰り返しや発音、囃子や口唱歌も視野にいた定本作りが必要である。なお、教本や映像はマニュアルではなく、あくまで補助ツールとしての使用にとどまる。依然として芸能が個人から個人へと身体的に伝承されることに変わりはない。

附章 惣谷の踊りと狂言

附章 惣谷の踊りと狂言

(一) 名称

惣谷狂言

宮本常一の『吉野西奥民俗探訪録』⁽¹⁾にも報告されているように、地元では単にキョウゲンと呼ばれていた。またかつては踊りも伝えられていた。

(二) 所在地

五條市大塔町惣谷

舟ノ川流域と集落の概説は篠原の項で既述⁽²⁾。

惣谷は、「惣谷垣内を川迫の人開」とあるように、篠原の分かれであるとするが、惣谷では必ずしもそうではないという。天正末から文禄年間にかけてできた村と考えられ、慶長郷帳、寛文郷帳では舟川村三〇余石のうちに含まれ、「惣谷垣内」「惣谷方」と呼ばれていた。延宝検地では村高七三石足らず。元禄郷帳では「舟ノ川之枝郷」と注記がある。集落東部に天神社、西部に円満寺(浄土真宗本願寺派)がある。明治一五年(一八八二)頃には、三三戸人口



惣谷の集落 (左上は円満寺)

一六一人であったが、昭和二〇年(一九四五)には、六〇戸二九三人、同三〇年(一九五五)に五三戸二五二人、同五二年(一九七七)には三一戸一一一人と篠原ほどの急激さではないものの減少して、現在一七戸である。生業としては林業に従事するものなどからなり、栗の木を用いる坪杓子作りに従事する者も一人いて、新子光氏は国の記録選択「吉野大塔の坪杓子製作技術」(平成二四年三月八日選択)の保存会メンバーとしてこの地区の生業の伝統を守っている。

(三) 公開時期・公開場所

一月二五日に地元の氏神天神社(惣谷一三一番地)で公開。元は旧暦一月二五日、この日は「神事初め」といって氏神で踊りを奉納したあと、円満寺(惣谷三一八番地、浄土真宗本願寺派)で狂言が行われた。現在は狂言のみが伝わる。依頼を受けて現地外で特別公開することもある。

(四) 由来・沿革

惣谷では篠原のように、オオカミや特定の人物に関する由来譚などは聞かれない。

(五) 伝承組織

昭和三二年から三三年(一九五七―一九五八)にかけて狂言が復活されるまでに、惣谷狂言保存会(初代会長 鍵谷良文)が組織され、以来現在に至るまで保存継承が図り続けられてきたが、かつて

狂言が中絶したのは、青年会が村芝居を盛んに行うようになったからといわれ、狂言の伝承も若連中などの青年組織が中心であったと思われる。

現在は保存会の会長は自治会長が兼ねることになっている。毎年一〇月頃から演目を決め、一月中旬から二月にかけて集会所で練習を行なう。平成二十七年は、「万歳」と「鳥刺狂言」を予定していたが、一月に保存会員であった富本正氏（昭和五年（一九三〇）生）が逝去したため、この年は狂言上演は中止となった。

（六）惣谷の踊りと狂言

（1）概要

既述のように、惣谷の集落にも篠原と同様に踊りと狂言が伝えられていた。毎年旧暦一月二五日を「神事初め」といって、氏神天神社（集落の東、県道宇井篠原線の谷側）に惣谷区の人々が集まり、ここで祭典が執行されてから踊りを奉納し、その夜、集落西部の円満寺の本堂に酒肴を持ち寄り、区の役員を上座にして一同が座に着き、酒三献ずつ廻す。これが終わる頃に庫裏の方から太鼓を持った男と扇子を持った娘が踊りながら入ってきて、その後は区長の命で踊りと狂言が夜が更けるまで交互に上演され、人々は酒を飲み食事を摂りながら見物したという。

この時の踊りは、辰巳義近（昭和四六年（一九七二）没）が書き残したものでは「式三番その一（入波）」「式三番その二 向の山踊」「式三番その三 長者踊」「牛若踊」「近江踊」「信濃踊」「ひんだ踊」「おはらぎ踊」「白糸踊」「あや踊」「京かなこ踊」「花買うて踊」「花見踊」「長崎踊」「俄踊」「ゆずやにしま踊」「おちこ踊」「お江戸下

り踊」「まりの踊」「梅の古木踊」「あわれたった踊」の二一曲が知られる。^③川北仙次郎（昭和四〇年（一九六五）没）が書き残した詞章は曲数は少ないが、ほぼ同

様のものを伝えている。^④惣谷でも「式三番」と呼ばれる三曲はあるが、篠原とは曲が異なる。またこれらの中で、「長者踊」「牛若踊」「信濃踊」「ひんだ踊」「花見踊」「まりの踊」は篠原にはない独自の曲である。これら惣谷の踊歌は、本田安次や山路興造も翻刻している。^⑤また、池田源太が惣谷の踊りの曲名を「梅の古木・宝おどり・世の中おどり・うしわかおどり・花見おどり・お江戸くだり・おはりおどり・白菊おどり・花買うておどりなど」と伝えている。^⑥

岸田文男が狂言伝承の中心人物辻本可也（明治二九年～昭和五四年（一九六六～一九七九））に対して昭和三〇年代初めに行った聞き取りによれば、狂言は明治四〇年頃から途絶え、その後大正天皇の大典（大正四年（一九一五））の奉祝行事として一度行われたのみであったという。この大正四年の公演は、辻本氏の父辻本源治郎（嘉永四～昭和三年（一八五一～一九三八））の薦めで伝来の芸能を奉祝行事に加えたといい、狂言は父源治郎から、踊りは祖父文治郎（文政六年（一八二三）生、八四歳で没）から習った川北勝治郎と西尾善吉の伝授で奉祝が実現したという。^⑦惣谷では、大正の大典時には踊りと狂言の両方が実施されていたわけである。踊りはこの



惣谷狂言「鐘引狂言」

時に習った川北仙治郎と戸毛菊太郎等によってその後も継承され現在に至っているとその時答えている。先に記した踊りの詞章を書き残した川北仙次郎はこの大正時に踊りを習った川北氏と思われる。

一方、狂言はこの時上演されたのみで、肺病の流行と新流行の娯楽のためその後は行われなかったという。踊りは戦争が本格化する昭和一五年頃まで続けられたというが、その後途絶えてしまうが、踊りの途絶えた期間は狂言ほどは長くはなかったという⁸⁾。

その後、狂言復活と県指定化を経て、昭和五四年（一九七九）一月二六日、県教育委員会文化財保存課により、県指定文化財としての映像記録作成事業が実施され、円満寺で惣谷狂言のビデオ撮影が行なわれた。この時、あわせて鳥井ソネさん（当時八八歳）が踊りの一部を披露し、断片的ながら惣谷の踊りが記録に留められた。これが踊り伝承の最後の姿であったと思われる。鳥井さんによれば、一五、六歳頃まで寺で狂言と踊りが行なわれていたとのことであった。この言葉によれば、踊りと狂言が行われていたのは、明治四〇年（一九〇七）頃までとなり、先の岸田文男に対して辻本可也が答えたのと合致する。

（2）辻本家の伝承

狂言は辻本可也の家が代々師匠として伝えてきたという。保存会が昭和五六年（一九八一）に刊行した『惣谷狂言』で当時の保存会長大谷裕は、辻本家を「伝承の家」と呼んでいる。辻本可也は、既述のように大正四年の大典に二〇歳頃で狂言を演じている。祖父文治郎は、文政六年（一八二三）生まれで、万歳、狂言、踊りなどに堪能で、遊びに来た若い衆に囲炉裏の端で踊りや狂言の台詞や太鼓や扇の使い方などを教えていたという。また習いにきた若者は、隣

の辻内という人に浄瑠璃や三味線を習っていたという。また嘉永四年（一八五二）生まれの父源治郎の芸事好きは祖父を凌いで熱烈で、時には狂人めいたようなこともあったという。老いてからも台詞を口ずさみながら孫の守りをしたり、囲炉裏端で仕事をしているときでも文句を唱えていたという。これに対して辻本可也は祖父や父ほどではなかったというが、嫌いではなく必要に応じて父に狂言について質問をしたりしていたという⁹⁾。辻本家は山仕事に関わって人の出入りもあり、何かと芸事が行われ、芝居小屋に近いような様子であったという¹⁰⁾。

（3）復活の経緯

篠原に較べて、惣谷の踊りと狂言は交通上の制約などからか、あまり人々には知られなかったようで、『奈良県風俗誌』をはじめ一連の資料にもその姿を見せない。世に知られる契機となったのは民俗研究家宮本常一の二行の文章であった。それは宮本が、昭和一四年（一九三九）に篠原採訪で得た「チョンガレ・狂言 惣谷にあるという。狂言というのは狐釣とて大名と狐の出るような狂言であるという¹¹⁾。」という聞き書きであった¹²⁾。その後、昭和三一年（一九五六）から村史編纂が始められ、昭和三二年（一九五七）秋に来村した保仙純剛氏（当時県立郡山高高等学校教諭）は、かねてから気に留めていた先の宮本の記述を村史編纂の打合会に出席していた大谷善太郎に話を持ちかけると、「狂言は伝えています。わかるはずですからさつそく確かめてお知らせします」という返答であったという¹³⁾。

大谷善太郎は辻本可也を訪問したが、辻本は大正以来途絶えた狂言の復興は、記録もまったくないことから、自信はなく見込みもないことを告げたが、それでも大谷善太郎は台詞を思い出すことを何

度も勧めたという。以来辻本は寸時も念頭から離さずに台詞を思い出し、苦勞の末、体に染み込んだ芸能の刻印を一つ一つ掘り起こすようにして記憶を辿り、大谷善太郎や新子清一郎なども加わって振りも思い出し、ようやく台本を完成させた。同年一〇月一五日に「鬼狂言」「千秋万歳」「鐘引狂言」「かなぼうし狂言」の四曲の台詞を書いた紙片を大谷善太郎に手渡し、さらに「壺負狂言」「狐釣狂言」「鳥刺狂言」を思い出した（さらに「舟こぎ狂言」が追加され、最終的に八曲の台詞が甦った）。

その後、地元で惣谷狂言保存会が結成されて復活に取り組み、翌昭和三十三年（一九五八）四月二五日に辻堂小学校で行われた大塔村観光協会の発会式場で披露された。さらに同年一二月二五日の惣谷小中学校でも公開されたが、この時には県内からは保仙純剛、東京からは本田安次、後藤淑等も実見することとなった。保仙純剛は、復活した台詞に対してははじめは不安を抱いていたが、確かなものであったことを後に述懐している。⁽¹³⁾ 四三年振りのこの復活を契機にして、かつて盛んに行われながら、既に人々の記憶の中でも薄れつつあった芸能が、急速に甦ることになる。

こうして昭和三十三年暮から八つの狂言が奇跡的に復活された。県教育委員会は昭和三四年（一九五九）七月二三日付けで、県指定無形文化財（奈良県文化財保存顕彰規定による）に指定して伝承の後押しを行い、さらに県文化財保護条例の制定にともない県指定無形民俗文化財となった。

この狂言について、復活の当初からこの狂言を三度にわたり調査をした本田安次は、「惣谷狂言はもと、能の間々ではなく、風流踊りの間に行われてきた狂言である。即ち、後に歌舞伎狂言に展開して行くその直前の形を伝えたものである。鳥刺と狐釣りには、笛、

太鼓の囃子も入るが、もと三味線も入ったと云えば、そのことは容易に領けよう。風流踊りは室町末から徳川時代初期にかけて全国的にも流行したものであるが、それが狂言とともに、この奥吉野にも入ってきたのであった。」として、新潟県柏崎市の綾子舞や静岡県の徳山の盆の風流など全国の事例をあげて芸能の位置付けをするともに、伝わる狂言を能狂言にでてくるものと地狂言めいたものに分け、地狂言風のものが工夫されて歌舞伎狂言へと展開し、さらに人形芝居の浄瑠璃脈と人形振りが取り入れられて、歌舞伎芝居が誕生するという展望を見通している。⁽¹⁴⁾ また、山路興造は惣谷の狂言は、近世初期の風流踊りの間に演じられたもので、ほぼ能狂言の流用であるが、吉野一帯の近世末期に流行した地狂言などの影響を推測している。また、中央に残らなかった「鐘引狂言」に注目し、若衆・野郎かぶきとして演じられたものが地方に定着したものとしている。⁽¹⁵⁾

急峻な山の頂に神社がある篠原とは対照的に、道沿いの谷側の平地にある天神社で、一月二五日の祭りの後、毎年二、三演目ずつ、近年は一、二演目を少ない出演者の中で配役を考慮しながら公開されている。

篠原と惣谷では、風流踊りと地狂言がともに伝承され、今日では篠原といえは踊り、惣谷といえは狂言というように、それぞれ別個なものとして伝承されており、踊りと狂言が交互に行われていたかつての様子は、芸能大会など現地以外での特別公開で復元公開される場合を除いて、今では見ることができないのは残念なことである。⁽¹⁶⁾

(4) 演目とその概要

演目は、「万歳」「鳥刺狂言」「鐘引狂言」「鬼狂言」「狐釣狂言」「かなぼうし狂言」「壺負狂言」「舟こぎ狂言」の八曲。その概要は次の通りである。

・「万歳」

太夫と才若が官方町方を祭って通り、才若が何かと言葉を取り違えて粗相するが、最後にめでたく舞納める。

・「鳥刺狂言」

日本一の鳥刺が大和の鳥刺に会い、自分の師匠を紹介するが師匠は耳が遠くてちぐはぐな受け答えをする。最後に師匠が刺して二人がはやす。竿で鳥を捕らえる鳥刺の世界が垣間見える狂言。

・「鐘引狂言」

長崎へ商いに来る夫を見送った妻が、早速坊主を引き入れて酒宴に耽り、突然夫が帰宅すると慌てふためいて鐘に坊主を隠し、最後は「隣の豆盗人また失せよった」で終わる。

・「鬼狂言」

六道の辻で鬼が猛将朝日名に地獄を貢ごとと責めるが、朝日名はたじろがず和田の戦いの勇猛振りを語る。恐れ入った鬼は、朝日名を浄土へ案内する。

・「狐釣狂言」

老練な古狐が住持に化けて、狸の名人に教訓を与えて殺生を止めさせようとするが、仕掛けられた罠にたまらず食いついて化けの皮が剥がれる。

・「かなぼうし狂言」

寺を譲られた小坊主が、次々に訪れる客に対してちぐはぐなあしらいを繰り返す、最後はもらえる布施を損させる。

・「壺負狂言」

酒に酔って寝ている法師が持っている茶壺を、日本一の博打打ちが横取りしようともめている場に大名が通りがかり、持ち主を判定しようと壺の生い立ちを舞で語らせるが、法師が舞うと同じ事を博打打ちも真似て語るので判断がつかない。

・「舟こぎ狂言」

東に下る僧が茶屋に雨宿りするが茶代も払えない。そこで亭主は行く先の船賃代わりに、言葉を教える。船に乗った僧は下船時に「忠則ただのりさつまの守」と答えて、船頭にただ働きをさせる。

これら八曲以外にも「田植狂言」「豆炒り狂言」「薯洗い狂言」「米搗き狂言」「花折り狂言」などがあつたという。上演には、曲に合ったカツラ、衣裳、小道具が使用され、「鳥刺狂言」と「狐釣狂言」では最後に、太鼓・笛・三味線のお囃子がつく。鬼狂言では木彫りの鬼面、狐釣狂言ではおなじく木彫りの狐面が使用される。

(5) 台本

台本は、先に記した過程を経て文字化され辻本可也氏がまとめたものが「狂言保存帳」として保存会に伝わり、さらにそれをまとめたものが、池田源太により大蔵流・鷺流・和泉流との異同を注記したもののや保存会から刊行されているもの⁽¹⁸⁾、山路興造によるものなどがある⁽¹⁹⁾。



惣谷狂言用面（左は鬼、右は狐）

(6) 近年の上演

最近の上演演目は以下の通りである。

- ・平成十一年「壺負狂言」
- ・平成十二年「狐釣狂言」
- ・平成十三年「万歳」「かなぼうし狂言」
- ・平成十四年「鐘引狂言」「舟こぎ狂言」
- ・平成十五年「鬼狂言」「鳥刺狂言」
- ・平成十六年「狐釣狂言」「壺負狂言」
- ・平成十七年「万歳」「かなぼうし狂言」
- ・平成十八年「狐釣狂言」「舟こぎ狂言」
- ・平成十九年「鳥刺狂言」
- ・平成二十年「舟こぎ狂言」
- ・平成二十一年「万歳」「鬼狂言」
- ・平成二十二年「かなぼうし狂言」
- ・平成二十三年「壺負狂言」
- ・平成二十四年（前年の災害により中止）
- ・平成二十五年「舟こぎ狂言」
- ・平成二十六年「狐釣狂言」
- ・平成二十七年（会員で物故者あり中止）

(7) 中峯と中井傍示の芸能

篠原と惣谷の芸能以外に、同じ舟ノ川流域でも芸能活動は盛んであった。

惣谷のさらに下流の中峯（すでに廃村）では、寛政頃から盛んに人形芝居が行われたといい、明治末年頃までは毎年盆と正月には浄瑠璃人形操りがあり、検非違使、文七、舅、白太夫、定之進、子役、

三枚目、与勘平、老け女形、娘、婆など小型の人形のかしら一六個が保存されている。⁽²⁰⁾

中井傍示では、宝泉寺（浄土宗）で狐釣や鬼狂言が行われ、森本義弘やウエダタカアキなどが行っていた。篠原でするような踊りは中井傍示や中峯にもあり、中井傍示では踊りは東文太郎が師匠で、今西友一も精通していた。盆には首から太鼓を吊り下げたり、手に持ったりし、女は扇を持って踊った。太鼓を首から吊るものは他の踊りと区別して「大踊り」と呼んでいた。盆踊りは寺の境内で踊ったというが、廻り廊下でも踊ったようで、その時には中に見物人がいたともいう。また村には万歳師が三人も五人もいて、三味線や鼓弓や鼓を持って四、五人で行ったという。正月には村外に出て二、三カ月帰らないこともあった。中井傍示には明治四三年（一九一〇）の「二和カキヨゲン」の台本も残されている。

篠原と惣谷の芸能は、この二地区だけでなく広く舟ノ川流域全体、さらにその周辺も含めた芸能伝承として捉えながら考える必要がある。

（鹿谷 勲）

註

- (1) 宮本常一『吉野西奥民俗探訪録』（日本常民文化研究所 一九四二）。この調査は昭和十一年から十四年（一九三六）一九三九にかけて行われたが、篠原へは十四年八月と一〇月の二度出向いた。
- (2) 『日本歴史地名体系 第30巻 奈良県の地名』（平凡社 一九八一）、『角川日本地名大辞典 29 奈良県』（角川書店 一九九〇）
- (3) 『惣谷踊詞章 辰巳本』（『惣谷狂言』（惣谷狂言保存会 一九八一）
- (4) 『惣谷踊詞章 川北本』（前掲 註（3） 所収）
- (5) 本田安次『日本の民俗芸能 5 離島・雑纂』（木耳社 一九七三）、山路興造解題校注「吉野大塔村惣谷狂言詞章 付惣谷踊り詞章」（『日本庶民文化資料集成 第4巻 狂言』（芸能史研究会 三一書房 一九七五）
- (6) 『大塔村史』（大塔村役場 一九五九）
- (7) 岸田文男「惣谷の狂言」（前掲 註（6） 所収）
- (8) その後も踊りは大谷正一など「小若い衆」に伝えられていたようで、終戦後辰巳氏が西吉野村へ移住するまでは、神社でも踊られていたという。また、「牛若踊」は両足を揃えて飛ぶようにして太鼓を叩いたという（筆者調査）。
- (9) 岸田文男「惣谷の狂言」（前掲 註（6） 所収）
- (10) 福本政洋（昭和十六（一九四一）年生）談
- (11) 註（6）に同じ
- (12) 岸田文男の「惣谷狂言」（前掲註（9）に同じ）によれば、保仙氏は村教育委員会の橋本主事に質して復興の必要性を説き、主事は惣谷の大谷裕（惣谷小学校長）に狂言復興の必要性を訴え、大谷は父善太郎に伝えて、善太郎がくり返しくりかえし記憶の蘇生を熱心に希望したとあり、過程はやや異なるが、おそらくともに事実であったのだろう。
- (13) 保仙純剛「狂言復活の次第」（前掲 註（3） 所収）
- (14) 本田安次「惣谷狂言について」（前掲 註（3） 所収）、『本田安次著作集 日本の伝統芸能』に再録。
- (15) 山路興造（前掲 註（5）に同じ）
- (16) 昭和五十八年十一月の全国民俗芸能大会や平成九年一〇月の第一回紀伊半島民俗芸能祭では、篠原と惣谷の両保存会が出演し、踊りと狂言を交互に上演し、かつての姿を再現した。
- (17) 池田源太「惣谷狂言の台本」（前掲 註（6） 所収）
- (18) 「惣谷狂言台本」（前掲 註（3） 所収）
- (19) 註（6）に同じ
- (20) 『奈良県 大塔村史』（一九七九）及び『大塔村無形文化財並古文化財調査報告書』（大塔村教育委員会 一九八一）
- (21) 岡田駒次郎（大正九年（一九二〇）生、中井傍示出身）他談。万歳を行うものは篠原や惣谷にもいたといい、万歳芸の盛行ぶりが窺われる（筆者調査）。
- (22) 鹿谷勲「大和奥吉野舟の川流域の芸能」『民俗芸能』64・65（一九八三、一九八四）

篠原踊 調査報告書作成委員会

※敬称略、肩書職名は平成二六年度当時

調査報告書作成委員会

委員長

星野 紘 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所名

委員

誉研究員

青盛 透 京都ノートルダム女子大学非常勤講師

入江 宣子 日本民俗音楽学会副会長

齊藤 裕嗣 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所客

員研究員

鹿谷 勲 奈良民俗文化研究所代表

城井 智子 公益社団法人全日本郷土芸能協会専務理事

笹生 昭 公益社団法人全日本郷土芸能協会常務理事

森下 春夫 公益社団法人全日本郷土芸能協会常務理事

オブザーバー

森本 仙介 奈良県教育委員会事務局 文化財保存課

事務局

小岩秀太郎 公益社団法人全日本郷土芸能協会事務局次長

調査報告書作成委員会開催日

会場（公社）全日本郷土芸能協会事務所

第一回 平成二六年 七月 四日（金）

第二回 平成二六年 一月二六日（水）

第三回 平成二七年 二月二日（木）

執筆者

第一章 星野 紘

第二章 青盛 透

第二章 入江 宣子

第二章 鹿谷 勲

第三章 森本 仙介

附 章 鹿谷 勲

現地調査実施日・調査員（調査実施日順）

平成二六年 九月二七日（土）、九月二八日（日）

篠原踊講習会 奈良県五條市 牧野公民館

調査員 青盛 透 鹿谷 勲 笹生 昭

記録員 勝又 国光

平成二六年 一月二日 九日（火）

篠原踊聞取り調査 奈良県五條市 牧野公民館

調査員 鹿谷 勲 星野 紘 笹生 昭

記録員 小岩秀太郎

平成二七年 一月二四日(土)、一月二五日(日)

天満神社例祭 奈良県五條市大塔町篠原 天満神社

調査員 青盛 透 入江 宣子 鹿谷 勲 齊藤 裕嗣

星野 紘 城井 智子 笹生 昭 森下 春夫

記録員 勝又 国光 小岩秀太郎

平成二七年 二月 四日(水)

惣谷狂言聞取り調査 奈良県五條市 五條文化博物館

調査員 鹿谷 勲 星野 紘 笹生 昭

記録員 勝又 国光

協力者・協力機関等

※敬称略、順不同 肩書職名は平成二六年度当時

本調査にあたり、各芸能団体並びに各地区の方々には多大なるご協力を賜りました。ここに御礼を申し上げます。

協力者

篠原おどり保存会

会長 玉井 和尋

和泉 恵夫

阪谷 一郎(故人)

阪谷 民男

富田 妙子

富田 裕子

保存会の皆さん

荒木 真歩

及川 陵一

卜田 隆嗣

吉崎 正

惣谷狂言保存会

福本 政洋

協力機関等

奈良県教育委員会事務局文化財保存課

奈良県五條市教育委員会事務局文化財課

奈良県五條市立五條文化博物館

奈良県五條市立牧野公民館

奈良県五條市役所大塔支所

【本書添付】平成二十六年現地調査記録映像（DVD）

平成二十六年

文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」

篠原踊 調査報告書 現地調査 記録映像DVD（33分44秒）

■平成二十七年一月二十五日

天満神社祭礼「篠原踊」奉納

■平成二十六年九月二十八日

「篠原踊」講習会 於・五條市立牧野公民館

平成二十六年 度

文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」

篠原踊 調査報告書

発行日 平成二十七年三月三十一日

発行 文化庁文化財部伝統文化課

〒一〇〇―八九五九 東京都千代田区霞が関三―二―二

作成 公益社団法人全日本郷土芸能協会

〒一〇六―〇〇三二 東京都港区六本木四―三―六―二〇六

印刷 江戸クリエート株式会社

